

# 伊能忠敬

研究

史料と伊能図

二〇二三年 第一〇一号

伊能忠敬研究会

史料と伊能図「伊能忠敬研究」

二〇二三年 第一〇一号

伊能忠敬研究会

THE INOH TADATAKA JOURNAL  
STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.101 2023





国立公文書館蔵（デジタルアーカイブ）  
松前距蝦夷行程測量分図 9

表紙は伊能忠敬の第一次測量の到達点であるニシベツ付近の大図である。寛政十二（1800）年閏四月十九日深川黒江町を出発、五月十九日に津軽海峡を渡り松前領吉岡（現在の福島町）に到達し、いよいよ蝦夷地測量が始まった。

五月二十九日に箱館から間縄を使つての距離測量を試みたが、時間がかかりすぎるために歩測での測量に戻った。「測天量地」のうちの小方位盤と歩測による「量地」で繋いできた測線も厚岸湾西岸のゼンホウジ（釧路郡釧路町大字仙鳳趾村）でついに途絶えた。

忠敬は八月七日にニシベツに到着した。表紙の『松前距蝦夷行程測量分図 9』には測線が全く描かれていないという、伊能図らしくない伊能図となった。記載された地名も、アン子ヘツ（浜中町姉別、フウレントウ（風蓮湖）、ニシベツ（別海町本別海）にとどまる。

ニシベツまでの測線を繋ぐことは出来なかつたが、地図中のアン子ヘツには「此處測量北極出地四十三度一十六分」、ニシベツには「北極出地四十三度二十三分」と記されている。八月三日の『測量日記』にもアンネベツで「夜晴天測量」、八月七日にはニシベツで「夜晴天測量」と記載されており、この「測天」による緯度測定の結果が大図に残され、これが忠敬の「測天量地」の最北地点の記録となった。なお文化元年上呈中図には雄阿寒岳、雌阿寒岳や国後島の甲乙丙の三地点に向けて方位線が引かれ、『山島方位記』にも記録が残されている。



地理院地図

『松前距蝦夷行程測量分図』十枚には第一次測量の函館からニシベツまでの三十地点について緯度が大図上に記されており、伊能忠敬記念館の寛政十二年小図の表と完全に一致する。文政四年に『大日本沿海輿地全図』とともに幕府に上呈した『輿地実測録』の第十三巻には松前以東の蝦夷地東沿海の各地の緯度が記載されているので比較してみた。

蝦夷地東沿海で『輿地実測録』に緯度が記載されている場所は、全て『松前距蝦夷行程測量分図』に記載されており、緯度の数値についても函館北方の大野村の北緯が二分異なる以外は一致している。

『輿地実測録』の蝦夷地東沿海の緯度データは基本的に第一次測量の観測結果を引き継いでいるといえる。

（表紙題字は伊能忠敬の筆跡）

玉造 功

目次

101号

表紙解説

国立公文書館蔵

松前距蝦夷行程測量分図 9

玉造 功

特集Ⅱ 伊能図の研究

● 伊能忠敬の測量と地図づくり

菱山 剛秀

研究と話題

● 法隆寺史に伊能忠敬測量隊の記録

柏木 隆雄

↳ 訪問日の動向が明らかに

玉造 功

● 琵琶湖図をめぐる書状二通

玉造 功

● 伊能下図を活用した測量経路の復元

中野 直毅

伊能図の二つのずれの問題について考える

玉造 功

● 江戸府内第一次測量の記録（十）

玉造 功

文化十二年二月十五・十六日の『日記』

玉造 功

資料

● 「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」

渡辺 一郎・井上 辰男

連載第三十四回

中村 泰子

忠敬談話室

● 技術を繋ぐ

中村 泰子

各地のニュース

忠敬翁の足跡と「広報ふくしま」

中塚 徹朗

橋本惣司氏講演会

水田 清志

令和五年度九州支部総会報告

井上 辰男

会員だより

山武のスケッチ(三)

江口 俊子・河崎 倫代

山武杉とイワシ漁船

江口 俊子・河崎 倫代

新入会員自己紹介

江口 俊子・河崎 倫代

## 伊能忠敬の測量と地図づくり

菱山 剛秀

## 地図をつくることについて

伊能忠敬が作った地図は、現在の地図とほとんど変わらない正確さで描かれていることに驚かされる。現在では、飛行機や人工衛星などから地表にある道路の形や島の形などを写真などに記録し、それをもとに地図に描くこともできるが、伊能忠敬の時代は、そうした方法は使えなかった。それでは、伊能忠敬はどうやって、道路や海岸線の正確な形を知ることができたのだろうか。

正確な地図は、地図に描かれる道路や海岸線などの実際の形や位置などを測って、それを縮尺に応じて描くことで作ることができる。このように海岸線や道路、建物などの形や位置関係などを測ることを「測量」という。伊能忠敬も全国を測量して日本全体の正確な地図を作ったのである。

## 伊能忠敬の測量

伊能忠敬は、測量の記録を数多く残しているが、不思議なことに測量方法についてはほとんど記録を残していない。

その要因の一つに伊能忠敬の測量方法がこの当時特別な方法ではなかったことが考えられる。江戸時代初期に伝わった西洋の測量技術は、日本では「紅毛流」と呼ばれ、これを伝える流派ができ、測量方法を紹介した技術書も出版されていた。伊能忠敬が行った測量方法も既に知られていた技術だったので、あえて書き残す必要もないとしたのかもしれない。

あるいは、日本全体の地図の完成を優先し、技術的な記録は、地図が完成した後で書き残すつもりだったのかもしれない。しかし、忠敬は日本地図の完成を見ずにこの世を去ってしまい、それが叶わなかったとも考えられる。

伊能忠敬は、自ら測量の記録を残さなかったが、弟子の一人である尾形慶助（後に渡辺慎と改名）が『伊能東河先生流量地伝習録\*1』（以下「量地伝習録」という）という伊能忠敬の測量方法を解説する記録を残している。量地伝習録には、間縄、磁石、象限儀といった測量に使用する道具の説明と分間、町見といった測量方法、絵図仕立という地図の描き方などが説明されており、付録として距離を南北と東西成分として求める「地面経緯表」や三角関数を表にした「割円八線表」、測量器具を描いた「測量絵図」が付いていた（保柳1974）。

## 測量方法

以下の、主として量地伝習録の記述を基に、現存する地図や測量用具に照らして、伊能忠敬の測量や地図づくりについて確認してみる。

当時の測量方法には、分間と町見があった。「分間」は、道具を使って目的の場所の距離や角度を直接測ることである。伊能忠敬の基本的な測量方法は、目標までの方位角と距離を順に測る導線法と呼ばれる方法である。分間は本来「一分が一間を表す」という縮尺の意味だが、地図を作るための測量を指すこともある。たとえば、「分間絵図」は、測量によって作られた地図であることを意味する。

一方「町見」は、目的の場所を直接測るのではなく、目標までの角度を測り、既知の距離を使っ

て計算により目標の位置を求める方法のことで、直接測量ができない川幅や遠くの山の位置などの測量に使われた。

## 〔分間〕

量地伝習録の分間の項には、地図に描かれる道路や海岸などの線、湖沼や島などの形を測量する場合の手順について、次のように記述されている。

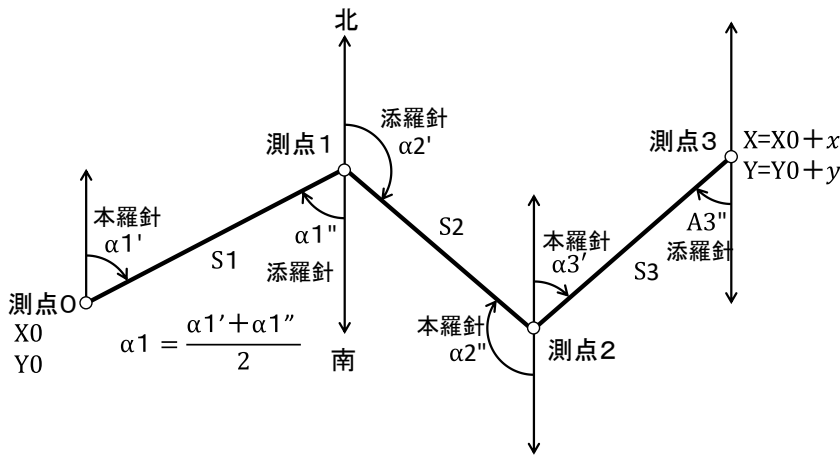
「街道・海浜、アルイハ田畑・沼池・島嶼等ノ形象ヲ計ルニハ、マズ初番ノ杭ヲ打ち、ソレヨリ鯨縄・藤縄ニテ崎湾屈曲ニ随イテ何百何十何間ト計リ、ソコヘ杭ヲ打ち、梵天ヲ立テ、計ルトコロノ間数ハ小札紙ニ書キ記シ、梵天ヲ持ツモノニ渡スベシ。アトヨリ小方位ニ挺ヲ用イテ、梵天ヨリ梵天マデノ方角ヲ計リ、方角ト間数トヲ野帳ニ書キ記スナリ。」

つまり、「測量をするには、最初に基準となる地点に杭を打ち、そこから間縄を使って形に沿って次の点まで距離を測り、そこにまた杭を打ち、目印の梵天を立て、測った距離は紙の小札に書いて梵天を持つ者に渡す。その後、小方位盤を二つ使って順逆に次の点までの方位角を測り、二点間の方位角と間数（距離）を野帳（現地で使うノート）に記録する。」ということである。

また、実際に測量するときの手順が次のように記述されている

「本羅針ハ一番ヨリ二番ヲ順ニ計リ、添羅針ハ二番ノ梵天ヨリ一番ノ梵天ヲ逆ニ計リ、ソノ方角ト間数ヲ記シタル小札ヲ肩書ニシテ、次第二先ヘ計リテ行ク。野帳ニ書キ記ストキ、順逆ノ方角ヲ突キ合ワスベシ。サテマタ間数ノ小札モ順々ニ竹串ヘ刺シ、分間終ワリテ後、毎日野帳ト読ミ合ワスベシ。」

同時代に刊行された紅毛測量術の書と比較すると、測量の方法に大きな違いは見られないが、方位を測る磁石は、本羅針と添羅針の二つを使い、測量区間の両端で北からの方位角（本羅針）と南からの方位角（添羅針）を測って両方の角に大きな差が無いかその場で確認することになっている。また、現地での測量が終わった後も、野帳に整理した数値と現場でメモとして記録した小札の紙を突き合わせて誤記などが無いか再点検することになっている。



伊能忠敬の測量方法（方位磁石を使う導線法）

このように、同じ区間を二度測ることで測量の誤差や測り間違いの有無を確認し、測量結果の点検、確認に細心の注意が払われていたことがわかる。測量の正確さを確保するための忠敬の工夫がここにあるといえよう。

さらに、野帳に記録する内容については、次の記述が見られる。

「方角、間数ハモチロンノコト、国郡村界、田畑、山川ノモヨモ書き記スベシ。コレハ絵図仕立テノトキ形容ニ用ユ。」

この記述から、野帳には測量した区間ごとの方位や距離のほかに、国・郡・村の境界、田畑や河川の位置や名称など地図に記入すべき情報が記録されていたことがわかる。

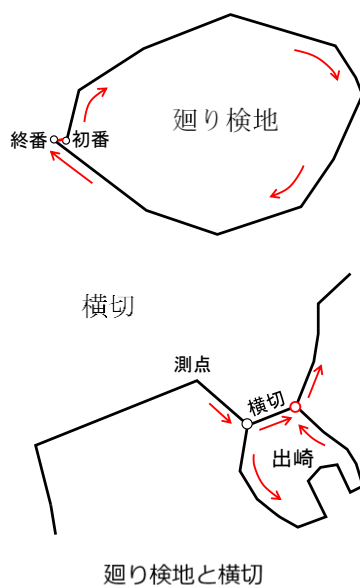
（誤差の確認）

以上が、基本的な測量方法だが、量地伝習録の分間の項には、さらに測量の誤差を調整する方法として、廻り検地という方法と横切という方法が次のように記述されている。

「サテ周旋アルモノハ、廻り終ワリテ初番ノ杭ニ繋グベシ。スベテ海辺ノ出崎ハ何レ險阻ニテ、多クハ断崖絶壁ニシテ人足至ルコト罕（まれ）ナルニヨツテ、精密ノ計ハナリ難キモノユエ、横切ト云イテ山ヲウチ起シ、向コウノ海岸マデ計リオキ、マタモトへ還リテ出崎ヲ廻リ、横切ノ杭へ繋グベシ。縦令出崎ノ計リ粗クトモ、横切ヲ以テ主トスルユエ、強イテ妨ゲニハナラヌモノナリ。」

廻り検地は、測量をして最初の地点に戻ったときに、最後の点と最初の点が一致することで測量の誤差や誤りを確認する方法であり、横切は出崎の断崖絶壁という人が近づき難い地形の場合、出崎の付け根部分を横切って先に測量しておく、出

崎を廻って測量した結果と横切って測量した結果を突き合わせて測量精度を確認する方法である。これらの手法は、狭い範囲の測量に適用するのが一般的であるが、広域的な測量にも適用されていたと考えられる。例えば、第二次測量から第四次測量の東日本の測線は、江戸を出発して、測量地域を一周して江戸に戻る廻り検地の手法で行われており、第五次測量以降の西日本の測線は、既に測量してあった測線間を繋いで測量結果を確認する横切りの手法が使われていたといえよう。



（坂道の測量）

坂道など傾斜のある距離を測った場合、間縄で測った斜面の距離は水平の距離より長くなるため、次の補正方法が記されている。

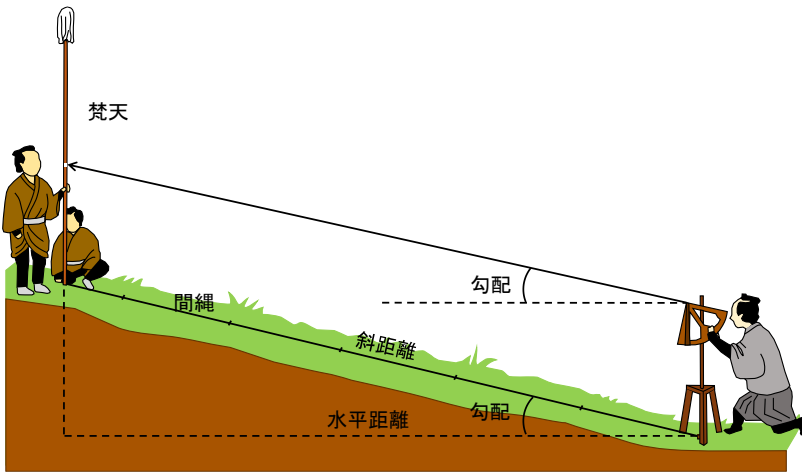
「坂道ニテ勾配アル所ハ、象限儀ヲ用イテソノ勾配ノ度数ヲ計リ、前件ノ法（余弦を間数に乗ず）ニヨツテ平直ノ数ヲ求メテ、絵図ヲ引ク間数トスルナリ。」

このように、斜面上で距離を測った場合は、斜面の勾配を測定して平面上の距離に換算する必要があるとしている。平面距離への換算には三角関



数が使われていたこともわかる。勾配を測る道具の象限儀には大きなものもあるが、坂道の勾配を測るのには、測量する場所に応じて扱いやすい半径五、六寸（15 cm ～ 18 cm）の小型の象限儀も使われたようである。

なお、三角関数の余弦とは、コサイン（cos）のことで、直角三角形の性質を利用して斜辺から底辺を求めることである。斜辺（斜距離）× cos φ（勾配角φの余弦）で底辺（水平距離）が求まる。余弦の値は、割円八線表という三角関数を用いられた。

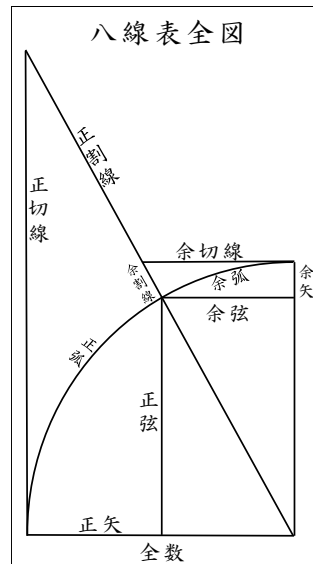


坂の勾配を測量

（自然の町見）  
 分間で直接距離の測量が困難な離島の位置を求めたり、導線法の宿命である累積した誤差を補正するため、次のように間接的な測量方法（町見）を用いることとしている。

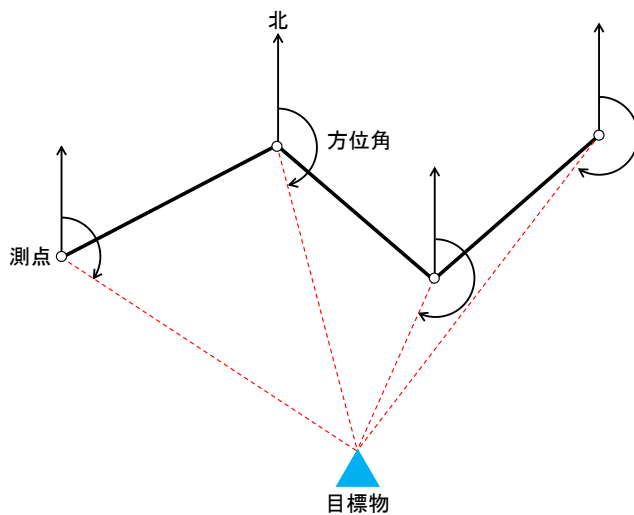
「モットモ離島ニテ繋ギノ間数計リカヌルトコロハ、地方へ近キ出崎々々へ目印ノ大梵天ヲ立テ、相互ニ方角ヲ計ルコト肝要ナリ。ソノホカ、分間ヲシナガラ島嶼・森林・寺社アルイハ近山・遠嶽等、ソノ遠近ニ応ジ、開キノ間数ヲ考エ、小方位諸器ヲ用テ方角ヲ計ルヨウニ計リオクベシ。コレハ絵図仕立テノトキ第一総括ニナルモノユエ、山々縁ノ切れザルヨウ計リオクベシ。所謂、自然ノ町見ナリ。」

※ 伊能忠敬記念館には、対数の八線表が残っている。



八線	三角関数
正弦	sin
余弦	cos
正割	sec = $\frac{1}{\cos}$
余割	cosec = $\frac{1}{\sin}$
正接	tan = $\frac{\sin}{\cos}$
余接	cot = $\frac{1}{\tan} = \frac{\cos}{\sin}$
正矢	1-cos
余矢	1-sin

八線表の線の名称と三角関数



交会法による目標物の位置測定

離島で距離が直接測れない場合は、見通しの効く場所に目印の梵天を立て、離島と梵天を立てた箇所を相互に方位角を計っておくことが肝要であるとしている。そのほか、導線法による測量をしながら、目標になる島や寺社、山などの方位を計っておくことで、地図を描くときに全体の位置確認が可能になることから、繋がりが切れないようにこれらの方位を計っておくべきであるとしている。これは位置の分かっている異なる場所から求める地点の方位を測り、方位線の交わる箇所から目標地点の位置を特定する交会法という測量方法である。遠くから見える富士山は、こうした方法には恰好の目標であったことから、広い範囲で方位が測定されており、中図や小図には富士山の山頂に向けて多くの方位線が引かれている。



### (町見)

山や島の位置以外にも、直接測ることができない川幅や山の高さなどは、間接的に距離を求める必要がある。そのため、量地伝習録には、直角三角形の解法を利用した例を図解し、求める区間の距離を割円八線表を使って計算する町見の方法が例示されている。

また、量地伝習録の町見の説明の中には、地球を球体として扱う球面補正の考えも示されている。

伊能忠敬は、地球が球体であることを認識していたので、遠くの山の高さ（高度角）を測ると実際より低い値になることも理解していた。伊能忠敬が山の高さを求めた記録は、富士山以外に残っていないが、高度角を測った山は富士山以外にもある。忠敬による富士山の高さの計算は、測った地点が山頂に比較的近かったためか、平面上のものとして扱っており、球面の補正はしていない。

### (富士山の測量)

富士山の高さは、山や島の方位を整理した「山嶋方位記」に東海道沿いの次の6か所から計算した記録がみられる。

箱根宿	二十八町二十四間 (3098 m)
三島宿	三十五町五十一間 (3911 m)
沼津宿	三十五町五十五間 (3919 m)
原宿	三十三町五〇間 (3690 m)
吉原宿	三十三町三十三間 (3660 m)
西倉沢村	三十四町十三間 (3733 m)

これらの値は、いずれも観測地点から山頂までの距離と山頂の高度角から三角関数の正接（タンジェント）を使って、水平距離  $\times \tan \phi$ （高度角  $\phi$  の正接）により計算したもので、観測地点からの比高にあたる。

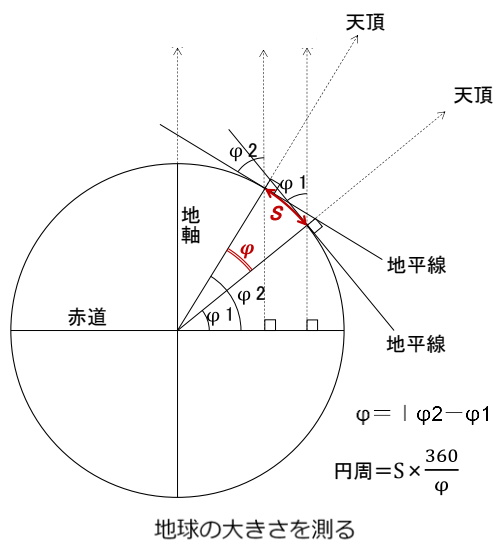
### 天文観測

量地伝習録には記述がないが、伊能忠敬の測量で重要なのが天文観測である。

### (地球の大きさを測る)

伊能忠敬は、当初、地球の大きさを自ら測って確かめるために測量を開始した。

地球の大きさは、地球を球として扱った場合、地球の中心を通る円周の中心角とそれに対応する弧の距離が分かれば計算できる。



そこで、忠敬は江戸と北に離れた地点の緯度を測ろうとして、当時は蝦夷と呼ばれていた現在の北海道の測量を幕府に願ひ出した。

観測地点の緯度は、北極星の高度を測ればおおよそわかるが、北極星もわずかに動いているので、正確な緯度は、北極星の南中高度の観測が必要である。北極星の南中高度は、他の星と同様にいつでも測れるわけではないので、北極星以外の星の南中高度を測り、その星の江戸での観測値と比較して各地の緯度を計算している。また、地点間の

南北距離は、方位角と距離から計算で求めている。

忠敬は第一次測量で東北地方を測量しながら緯度一度の距離を求めようとした。しかし、第一次測量は、出発が遅れて夏になり、冬までに終わらせるためには北海道へ急ぐ必要があったため、距離の測定は歩測という一歩あたりの長さに歩いた数を掛けて求める略式の測量方法によらざるを得ず、正確な距離を測量することができなかった。また、第一次測量では、緯度の測定方法も確立していなかったが、第二次測量からは、間縄を使って距離を正確に測り、緯度の測定方法も上記方法が確立して地球の大きさを求めることができた。

その値は、一度が二八・二里（約107.4 km）で、地球一周の距離に換算すると一万百五十二里（39,865.7 km）となる。この値は現在の値と比べ、緯度一度の距離の差が210 mほど短く、地球一周では75 kmほど短い。それでも、忠敬の計算した緯度一度の距離の有効数字は三桁なので、誤差が千分の二というのは、偶然もあるかも知れないが、驚異的な精度といつてよいだろう。

### (江戸の緯度を基に各地の緯度を観測)

忠敬は全国を測量する間に一二〇〇か所以上で緯度の観測を実施している。

全国各地の緯度の基準となったのが忠敬の隠宅があった江戸深川であり、その値は、『輿地実測録』に「三十五度四十分半」と記されている。

緯度は地軸を延長した天の北極の高度によって求められるが、前述したように北極星は天の北極からわずかに離れているため、北極星の高度を測つただけでは、正確な緯度を求めることができない。量地伝習録には、緯度の測り方が記されていないが、忠敬の友人だった和算家の会田安明が忠



敬の測量方法を記録した『天文簡要論』\*2の「北極測量ノ術」に次のように記されている。

「抑(そもそも)勾陣大星ハ最上ノ小輪ヲ周旋シテ一昼夜二天ノ三百六十度ヲ一周スル也。故ニ一夜ノ内ニ最高ト最卑トヲ量テ、而シテ其中距ヲ取テ北辰トスル也。其高卑ヲ測ルニハ、南北線ニ係ルトキ、象限儀ヲ以テ是ヲ量ル也。宵ニ最卑ヲ測リ、夜明ニ最高ヲ量ル。其卑を差引シテ小輪ノ径ヲ得、是ヲ折半シテ、北辰ヲ去ルコト何程ト知ル。乃チ別ニ清蒙ノ差ヲ加減スル也。右ノ如ク一夜ニ最高最卑ヲ測ルコトナレハ、短夜ノ節ハ決シテ測量スルコトナラス。至テ長夜ニアラザレハ得ヘカラス。乃チ一年三百六十餘日ノ中、纔(わず)か)ニ冬至ノ後十日斗ノ間ニアリ。其他ハ一夜ニ最高最卑ヲ見ルコト決シテアルコトナシ。故ニ国々所々ヲ廻村シテ北極ヲ量ルト云モ、実ハ極星ヲ測ルニハアラス。別ニ數年實測シテ得ル處ノ列星及ヒ諸星ヲ量。而シテ其度分ト差引シテ其国所ノ北極出地ヲ知ルコト也」

要約すると、次のような内容である。

「そもそも勾陣(現在の北極星)は、一昼夜で小さな輪を一周するから、夕暮れにその輪の最も低い位置を測り、夜明けに最も高い位置を測って、その中央の高さを求めればよい。ただし、夜が短いときは測量することができない。一夜の間に最高と最低を観測できるのは、夜が長い冬至からわずかに十日ほどである。そのほかは一夜のうちに最高と最低を測ることはできない。各地の緯度を測ると言うけれど、実は北極星を測っているのではなく、(基準地である江戸で)数年かけて予め測っておいた星と各地で測った同じ星の高さを差し引きしてその地の緯度を求めているのである。」

〔測量体制〕

測量は伊能忠敬一人ではできない。角度は測る地点の両側から観測しており、それぞれに目標の梵天を立てる人も必要である。距離を測るのも間縄を引く人が少なくとも両側に二人は必要なので、現地では測量する人数は、少なくとも六人ほど必要になる。

第一次測量から四次の測量までは、忠敬と内弟子、それに高橋至時や景保の従者で測量を実施したが、第五次の測量からは幕府天文方の役人も加わり、さらに測量する各地の藩や地元役人の協力も得て、多い時には百人を越す大掛かりな体制で実施された。

忠敬はそうした測量のいわば総監督として、人の手配や資材の調達など測量全体のマネージメントも行っていた。

測量器具

伊能忠敬の測量の特徴の一つは、測量器具の工夫である。測量の精度を確保し、効率よく測量するためには、測量器具の良否が大きく影響する。

伊能忠敬の測量では、距離を測る器具と方位を測る器具に高度角を測る器具が必要であり、忠敬はこれらの器具に独自のさまざまな工夫をしている。

〔距離を測る器具〕

距離(長さ)を直接測る器具は、間縄という目盛を付けた縄や一尺の鉄の棒を繋ぎ合わせた鉄鎖という器具が使われた。間縄は一般的に麻縄が使われていたが、麻縄は乾燥や吸湿によって伸縮があるので忠敬の測量では乾湿の影響が少ない籐や鯨の鱗を繋いだものが使われた。そのほか、鉄の棒を繋いだ鉄鎖や短い距離を測る器具では、間棹

という棒状の物差しも使われた。また、車輪の回転数を数えて距離に換算する「量程車」という器具も作られたが、この器具は平らな道以外は正確な距離が測れないためあまり使用されなかったようである。



量程車

千葉県香取市伊能忠敬記念館所蔵

鉄鎖 (レプリカ)

間縄 (レプリカ)



(方位角を測る器具)

方位を測る器具は磁石が使われた。短い距離の方位の測量には棒の先に小型の磁石を取り付けた小方位盤という器具が使われた。

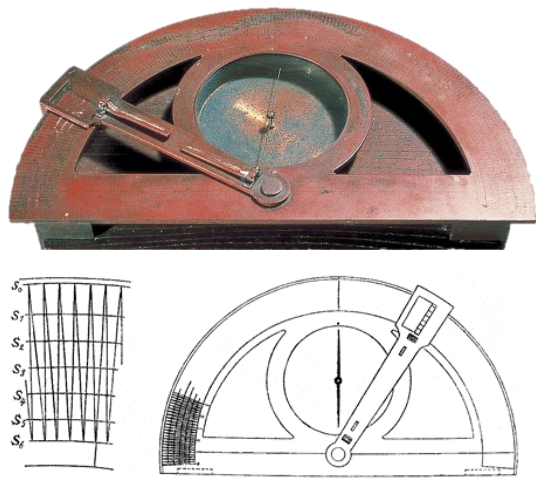
磁石を使った導線法という測量方法では距離よりも方位角の測定誤差の方が図の歪みに大きく影響する。そのため、忠敬も磁針については細心の注意を払っていた。当時杖の先に磁石を取り付けた器具は既に存在していたが、忠敬は特別にやや大きめの直径三寸二分(9.7cm)ほどの真鍮製の方位盤を作らせて使用した。



この方位盤は常に磁針を水平に保つよう穹窿(わんか)という自在に回転する二軸の環に取りつけられた。さらに、磁針を支える軸受け部分には摩擦を小さくするため水晶を使用し針先が摩擦

しないように常に研いで先端を尖らせ、磁針は細く長いものを使用して方位盤の目盛を詳細に読みとれる工夫をしている。この小方位盤は航海用の羅針盤のように目標の方位を磁針の針先で直接読み取れるように目盛が方位の逆に刻まれている。

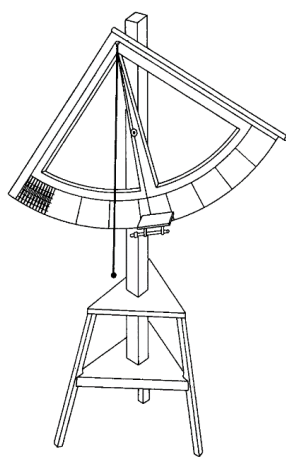
なお、長距離の測量には、より大きな円盤で細かい目盛を刻んだ中方位盤(一尺二寸・36.4cm)や大方位盤(二尺五寸・75.8cm)、あるいは半円方位盤(5寸5分・16.5cm)という半円形の方位盤を使用した。半円方位盤の目盛は対角線目盛になっており、一目盛間同心円状に六等分して十分単位まで細かく読み取ることができるようになっていた。こうした目盛は大方位盤や中方位盤のほか、象限儀など大きな円盤の目盛に施され、角度を細かく読む工夫がされていた。



千葉県香取市伊能忠敬記念館所蔵

(高度角を測る器具)

坂道などの距離を測った場合、水平の距離に比べて長くなってしまふ。しかし、坂道で水平距離を直接測るのは容易ではない。特に傾斜が急になれば、階段状に測れる水平距離は短くなる。そこで坂道に沿って斜距離を測り、坂の傾斜角を測って水平距離に換算する方法が採られた。傾斜角を測る道具は四分の一の円弧に目盛を刻み円の中心から垂直を示す板が下がっている。中でも坂道の傾斜を測るのに使用したものは、半径が一尺三寸(39.4cm)と小さく構造も簡単なものである。象限儀の原理は皆同じで、星の高度を測ったり坂道の勾配を測る測量器具である。



小象限儀

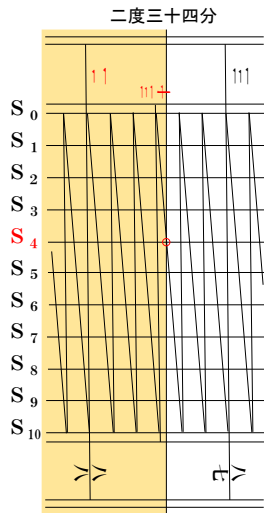
(天文観測の器具)

星の高度測定には、大型の象限儀が使われた。大象限儀は半径六尺(1.82m)、中象限儀は半径三尺八寸(1.15m)と坂道を測るのに使う小象限儀に比べかなり大きな装置となる。大象限儀は現存していないが、現存する中象限儀は、遠くの星を観測するため望遠鏡が取り付けられ、望遠鏡を覗くと十字線が見え望遠鏡の中心で星を観測できるようになっている。中象限儀の目盛盤には半円方位盤の目盛を更に細かく分割した十一

本の同心円に対角線目盛が刻まれており、一分単位の角度が読み取れるようになっていた。  
星の高度角を測りその土地の緯度を知るためには地球の自転による影響を取り除くため、子午線上の星の高度を比較する必要がある。子午線儀は角材を組み合わせ、南北方向に張った細い糸で、観測する星が子午線上にあることを確認するための装置である。



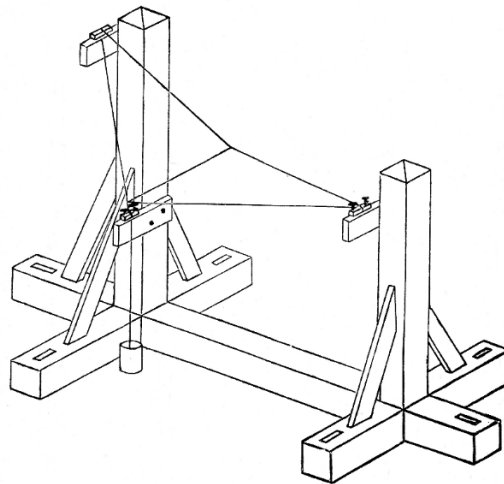
中象限儀  
千葉県香取市伊能忠敬記念館所蔵



中象限儀の目盛

子午線儀は経度の測定でも子午線面を通過する星を観測するために重要な器具である。  
経度の測定にはこのほか、時刻の同期をとるための時計に相当する垂揺球儀や月蝕時の月の欠け具合を測るための測食定分儀と呼ばれる器具などがあつた。

忠敬は経度の測定も試みたが、星や日蝕、月蝕といった天体現象は観測時期が限られ、天候にも左右されるため、結果としては成功しなかつた。



子午線儀



垂揺球儀  
千葉県香取市  
伊能忠敬記念館蔵



測食定分儀  
千葉県香取市  
伊能忠敬記念館所蔵

### 絵図仕立

測量した結果は現地では野帳に記録されるが、野帳に書かれているのは方位や距離の数字であり、これを絵図(地図)として描く必要がある。

#### (下絵図)

絵図を描く前に作られるのが測量した線を描いた地図の骨格となる下絵図(下図)である。下絵図は測量した方位と距離を紙の上に再現する方法で描かれることが量地伝習録に記述されている。

「紙ノ孕縮ヲ知ラズンバ、図成テ違フコト多シ。ヨツテ下タ絵図ヲ引クニハ、先、西ノウチ紙ニ、三枚ツギ合セ、水張シテ五日程ヲキ、夫ヨリハナシテ又五日程ヲキ、縮ミ次第二縮マセ、紙ノ長ナリニ二寸程平行ニ白徑ヲ引クベシ。碁盤ノ如ク引クハ宜シカラズ。水張りシテ直チニハナシ用フルトキハ、次第二縮テ用ニタチガタシ。中図、上図モ同ジコトナリ。下絵図ヲ引ク以前ニ、野帳ノ上ニテ八線表ヲ用ヒ、東西南北ノ直径ヲ推歩スベシ。

(例示省略) 紙上ニテ、分度矩ハ羅針ナリ、厘尺ハ間繩ナリ。分間スルニハ、初メ間ヲ計リテ後ニ方角ヲ計ル。絵図ヲ引ニハ、先ニ方角ヲ定メテ、後ニ間ヲ計ルナリ。サルニ依テ、前条東西南北直径ヲ取り初メタル針穴へ、分度矩ノ心十文字ヲ当て、左右ヘユガマザルヤウニ分度矩ト白徑トヲ合セ、野帳ニ何ノ支何十度トアルヲ、分度矩ノ目モリニテ其方角ヘ針ヲ立テ、分度矩ヲトリノケ、二厘尺ヲ以テ分度矩ノ心ニ当タル針穴ヨリ、今方角ヘ立タル針ヘ当テ、白徑ヲ引キ、野帳ニ何十何間トアル絵図ノ分量ニ随テ何寸何分何厘何毛ト当ル所ヘ針穴ヲアケ、是ヲ一番ト名ヅク。一番ノ針穴、多クハ白徑ノ上ニ在ベカラズ。コレニ依テ分度矩ヲ居ルニ、コンパスヲ用ヒテ白徑ト分度矩ノ平行

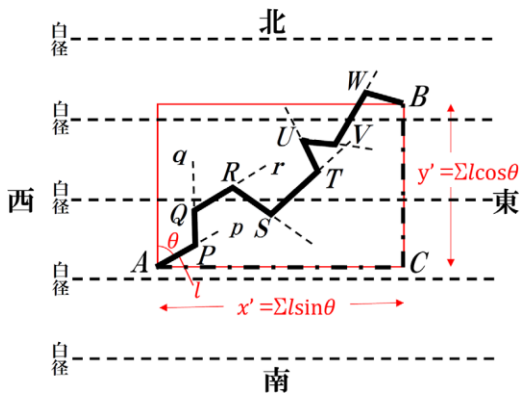


ヲ定ムベシ。コノ平行ユガムトキハ、絵図合ザルモノナリ。夫ヨリ二番、三番ト次第二野帳ニ倣テ引クベシ。モシ終ニ至リ、東西南北推歩数ノ針穴ニ合ザレバ、絵図ニ引タガヒ有トス。幾度モ引キ直スベシ。分間ヲ稽古スルニハ、先ヅ絵図ノ引キヤウヨリ学ブベシ。絵図ニ熱セザルトキハ、分間ニ及ンデユキツマルモノナリ。」

下絵図を描く紙は、伸縮を少なくするため、「西の内」という薄手の和紙を貼り合わせ、よく乾燥させたものが使われた。

下絵図を描く準備として、この紙に二寸ほどの間隔で「白径」と呼ばれる色の着かない筋を引き、描く範囲全体を想定して、白径上に測量を始めた最初の点（始点）の位置を決めて針孔を開ける。

次に、方位と距離の測量値により測点間の東西方向と南北方向の直径（距離）を計算で求め、描く測線の終点の位置にも針孔を開ける。これで始点と終点の位置が決まるので、この間の測線を測量した値（距離と方位角）に基づき再現する。



下図の描画方法 大谷 (1917) の図に追記

東西南北の直径は、2点間の直交座標の東西及び南北の距離のことで、2点間の斜距離に2点間方位角の正弦 (sin) を掛けることで南北の直径が求まり、余弦 (cos) を掛けることで東西の直径が求まる。これをそれぞれ合計することで、長い距離の直径も求めることができる。伊能忠敬記念館には、予め斜距離と方位から東西と南北の距離を計算した「地面経緯表」が残っている。

測線を描く方法は、最初に始点の位置に分度矩の中心を合わせ、分度矩の下辺を白径と平行にして、始点で測った二番目の測点方向の方位角を測る。これで、始点から二番目の点の方向が決まる。

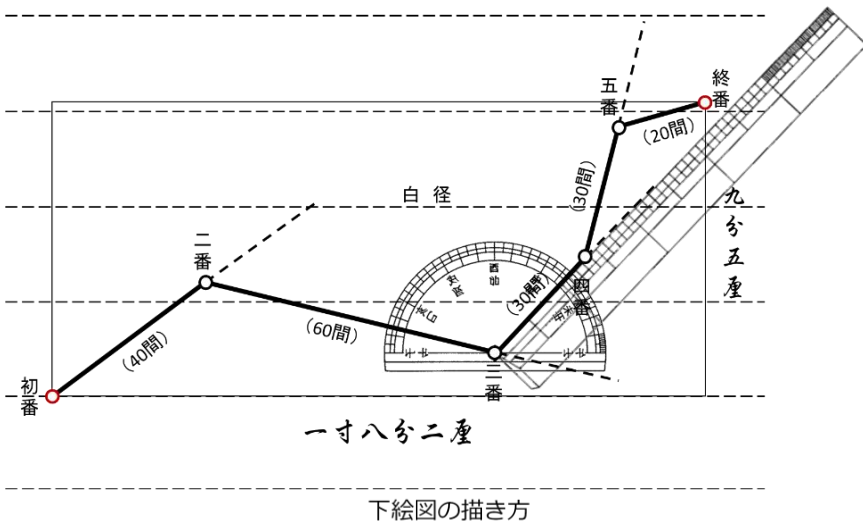
次に始点と二番目の点の方向に沿って現地でも測った距離を縮尺化した長さを二厘尺などの定規で測り、その地点に二番目の測点を示す針孔を開ける。以後同様に、二番目を始点とし三番目の測点位置に針孔を開け、これを順に繰り返し最後の点の方位と距離があらかじめ決めておいた終点の点と一致すれば現地の測量を正確に下絵図に反映できたことになるが、一致しなければ、描く途中に誤りが有るので合うまで最初からやり直すことと、かなり厳しい。そして、測量を学ぶものは、絵図の引き方から学ぶべきであるとしている。

（測量誤差の調整）

方位の測定は、目標となる山や島、測線から離れた城や寺院などの建物の位置を求めるほか、導線測量による測量の過誤や累積誤差の確認にも使用された。量地伝習録の「絵図仕立て」の項には次の記述がある。

「遠山ハ下夕図ノ小紙ニテハ遠近知レガタシ。近山・森林・堂塔目当ニ計リタル分ハ、絵図ヲ引キナガラ分度矩ニテ方角ヲサシ、其ノ心ニ当タル

針穴ヨリ白径ヲ引キ、各名目ヲ記シ、又次ニ計ル所ヨリ右ノゴトク白径ヲ引出シ、前ニ引タル白径ニ出会テ扇ノ要ノ如クナル所、即チ近山、堂塔ノ地位トス。サテ数カ所同ジ所へ出会ヒ、夫ヨリ少シ脇ヘヨリ、同名ノモノ又数カ所同ジヤウニ出会ヌモノハ、其アイダニ必ず間繩ノウチタガヒ有トス。其トキハ近山、堂塔ノ地位ヨリ逆方位ヲモツテ絵図ヲ直スベシ。一枚ノ下夕絵図引キ終ルトキ、東西南北推歩ノ数ヲ記スベシ。是レハ紙ニチヂミアレバナリ。」



下絵図の描き方

複数の地点からの方位線が数か所同じ所で交わり、同じ目標が少し離れて同じように交わる場合は、それらの地点間に距離の測り違いがあるので、先に交わった近くの山や堂塔から逆向きに方位線を引いて、誤った距離の位置を直すとしている。これは、既知点から方位を測って目標の位置を求める前方交会法とは逆の後方交会法という手法であるが、精度の面では課題もあるので、「逆方位に差があることを見極めて絵図を直すべきで、むやみにしてはならない」という注釈がついている。伊能忠敬記念館に残る下図には、夥しい方位線が縦横無尽に引かれているものもあるから、測量結果の調整にこうした手法も使われていたことが推測される。



下図(金沢八景) 千葉県香取市伊能忠敬記念館所蔵(無断流用禁止)

下図に描かれた方位線は、測量成果をそのまま反映しているので一点で交わっていないところも少なくないが、中図や小図では一点に交わるように描かれているが、遠方から引かれた方位線は、

伊能図の性格上一点に交わることはあり得ないので、描かれた方位線は測定した地点間の位置関係を示すものであり、実際の方位を描いたものではないと考えた方がよいだろう。

また、これらの方位線には、方位角の値が添えられており、この値が観測地点における実際の観測値を示すものと考えられ、紙の伸縮を考慮して下図に記入された寸法も同様の例といえよう。

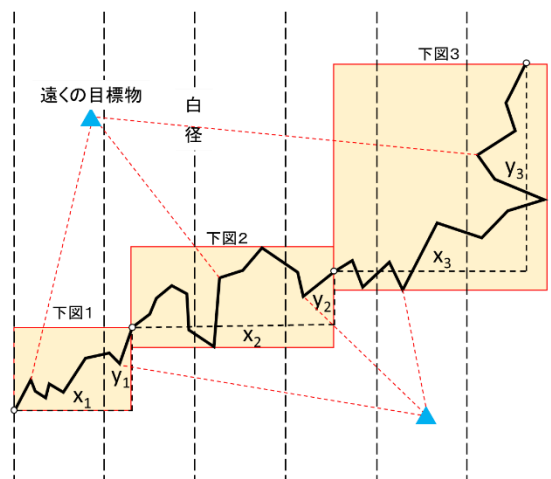
(寄絵図)

下絵図はその日に測量した範囲を宿に着いて描いている。下絵図に描かれる範囲は広くないので、大図の大きさの地図にするには下絵図を何枚も繋ぎ合わせる必要がある。この繋ぎ合わせた図を「寄絵図」または「寄図」という。

寄絵図の作り方について、量地伝習録には次のように記述されている。

「サテ寄絵図ニ寄スルトキ、大アラメニ縦バカリノ白徑ヲ引キ、小図一枚ギリノ東西南北直徑ヲウツシ、ソノ針穴ヘ下夕絵図ノ針穴ヲ合セ、針ヲ用ヒテ突キ写スベシ。写シ終リテ、針穴ノ分ルヤウニ墨引キスベシ。寄図終リテ、遠山ノ見通ヲ引出スベシ。」

寄絵図の作り方は、下絵図の作り方と同じように、白徑を引いた紙の上に下絵図の始終点の位置を針で突いて決め、下絵図に針で穴を開けた測点の位置を寄絵図の紙に突いて写し、その地点の地名を記入する。これで絵図の骨格になる測線を描くことができる。このとき、下絵図では範囲が狭すぎて方位線の交点で位置が確認できなかった遠くの山などの位置も記入するということがある。寄絵図の方位線も下絵図同様、一点で交わっていないが、広域で下絵図を繋ぎ合わせる際、下絵図相互の位置の確認に使われた可能性が高い。伊能忠敬記念館に残る「広域下図」がこの寄絵図に相当するもので、この図の大きさは、ほぼ畳一畳(巾三尺、長六尺)ほどで、前述の下絵図同様、東西南北の寸法が朱書きされている。



寄絵図の作り方

(仕上げ)

下絵図や寄絵図には、測線と測線上で測った山などの目標物の位置や地名しか描かれていないので、絵図に仕上げるには、仕上げ用の用紙に下図から測線と地名を転記し、周辺の景観などを記入する必要があります。地図の仕上げについて、量地伝習録には次のように記述されている。

「夫ヨリ、ドウサ美濃紙ニ突キ写シ、朱引ヲシテ山川・田畑・森林・屋宇等ヲ形容スルナリ。上



絵図ニハウラウチ唐紙カ、生ズキマニアイカ、何レ保チヨキ紙ヲモチフベシ。」

寄絵図に描かれた測線は、礬砂を引いた美濃紙に針穴を使つて写し、現地の様子を描くための山川、田畑、森林、家屋等の情報は、収集した地図などのほか、現地で直接描いた野帳や庵絵図を元に描き入れられ、絵図として仕上げられた。また、絵図として仕上げに使う用紙は、裏打ちをした唐紙か、雁皮の繊維だけで漉いた間似合紙といった保存性のよいものを使うべきとしている。

この説明によると、完成図は美濃紙に描かれた原稿図を基に、保存性のよい仕上げ用の紙に清書されたことがわかる。伊能忠敬記念館には、美濃紙に描かれた控図(副本)が現存しているという。

#### (縮図)

伊能図は大図のほかに、大図を6分の1に縮小した中図とさらに中図の2分の1に当たる小図が作られている。量地伝習録では、地図を縮小する方法を次のように説明している。

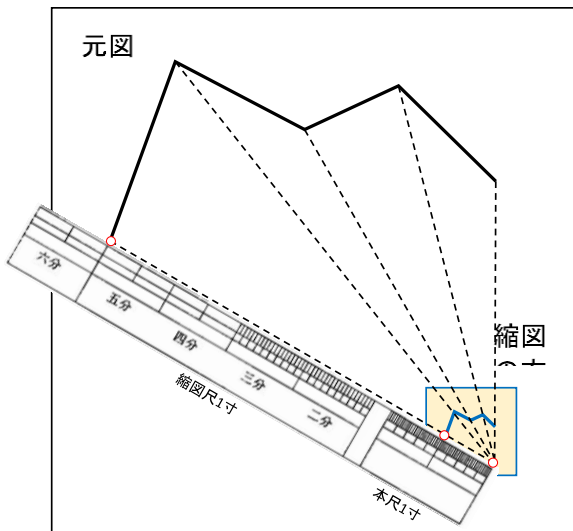
「縮図ヲ造ルノ法、古来サマザマノ仕方ニテ、或ハ十字ノ白徑ニテ縮ムルモノアリ、或ハ曲折ニ随テ分度矩ヲ以テ縮ムルモアリ、要スルニ皆迂遠ニシテ、真数ヲ得ルコト難シ。(中略)

曲尺ノ裏尺ヲ以テ表尺ニ換ルノ法ヲ考工得テ、別ニ縮図尺ヲ造ル。ソノ造リカタ、縦令バ六分ノ一二縮ムルトキハ、先ヅ曲尺五寸ヲ六倍ニシテ、ソノ三尺ヲ以テ縮図尺ノ五寸ト名ヅク。縮尺成テ寄図ノ内へ西ノ内紙一枚ヲ張りツケ、前後都合ヨキ所へ針穴ヲアケ、縮図ノ心トス。夫ヨリ寄図屈曲ノ所へ針ヲ立テ、縮図尺ニテ何寸何分何厘何毛ト計リ、其ノ寸法ヲ直二本ノ方曲尺へ換ヒ、縮図心ヨリ計リテ針穴ヲアケ、次第二右ノ如クスルト

キハ、張りタル紙ニ自然ト縮図ノ形アラハルルナリ。サテ縮図ヲ寄スルコトモ前条ノ如シ。」

絵図を縮小する場合は、寄図の屈曲点と縮図を描く用紙の一点を結びこの区間を縮図尺で測り、その寸法を縮図上に本尺で測り、その位置に針穴を開け、各点間を結んで寄図の範囲の縮図を描きこれを縮図の下図とし、縮図の寄図は、大図の下図から寄図を作ると同じであるとしている。

忠敬が考えたという縮図尺は、縮図の寸法を元の地図の寸法で測れるように目盛を付けた物差しで、寸法を一々計算するのは手間がかかるので、簡単に縮小できるようなしたものである。例えば、中図は大図の6分の1であるから、大図から中図に縮小するための縮図尺の目盛は、本尺の六倍の幅の目盛となる。畳一畳ほどの大図の広域下図(寄図)と同じ範囲の中図の下図が存在するから、実際にはかなり長い縮図尺が使われたと推測されるが現存するものは確認されていない。



縮図の方法

伊能図の下図には、測量結果を図化した狭域の下図とそれを寄せ集めて大図の大きさに編集した広域の下図(寄図)がある。さらに、広域の下図を縮小した中図の下図も現存している。

小図の下図も現存しているが、現存する小図の下図は、中図の下図とは作成の工程が異なるようである。すなわち、小図の下図は、中図の下図までが、測量次ごとの一連の作業として実施されたのと異なり、全測量が終了した後の測線が最終上呈図の大図の範囲に描かれている。このことが何を意味するのか不明だが、小図の下図は、中図の下図を縮小したものでなく、最終上呈図の大図の寄図を1/2分の1に縮小した可能性がある。

#### (経緯線の記入)

伊能図の中図と小図には、経緯線が描かれているが、量地伝習録に記入方法の説明はない。そのため、これまで描かれた経緯線から、伊能図の図法について多くの研究者により論議されてきた。

しかし、描かれた伊能図の図法は、これまで見てきたように、東西南北の直交座標の部分図を直交座標上で繋ぎ合わせたものであり、測量した地点を地図投影法に基づき座標変換してはいない。したがって、経緯線は、描かれた地図とは整合しておらず、伊能図の図法とは無関係といえよう。しかし、経緯線のうち、東西に平行な等間隔の緯線は、天文観測によつて算出した全国各地の緯度を基に描かれたと思われる。描かれた伊能図が直交座標によつて描かれているため、結果的に緯線間隔は、地軸に平行な正距円筒図法の特徴と一致している。一方の経線間隔は、地球上の緯線長に合わせるように描かれているため、基準になる中央子午線以外は描かれた地図とは位置が一致しない。このた

め、経緯線を基準にして、現代の地図と重ねると、中央子午線から東西に離れるに従い、本体の地図のずれが大きくなる。



東京国立博物館所蔵伊能小図（東日本）と正距割円筒図法（赤色）の重ね図

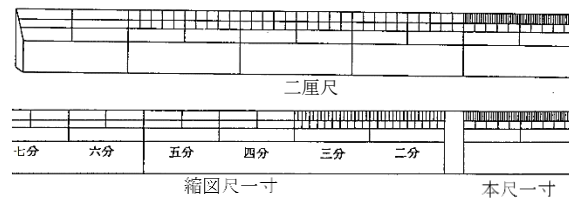
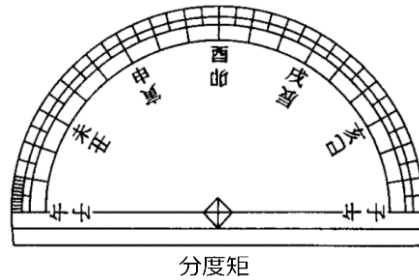
前述したように描かれた地図は、正距円筒図法の特徴を有し、東西距離も実測値に基づいていることから、標準緯線が描かれた地図の範囲内にある割円筒図法と考えられる。試みに、南北の中央付近の緯度（北緯37度）を標準緯線とする正距割円筒図法の現在の地図と伊能図を、緯線を基準に重ねてみると、海岸線がほぼ一致し、従来指摘されていたような大きなずれは見られない。

### 絵図仕立ての道具

下絵図を描くためには、導線法の測量結果を再現する角度と長さを測る器具が必要である。

角度を測る器具は、現在の分度器にあたる分度矩という器具で、和紙を何枚も張り合わせた板目紙で作られ、半円形で百八十度の目盛が描かれた板目紙で作られていた。分度矩の円の中心は二分（6mm）四方が切り抜かれ毛髪が十字に張られ針穴に合わせることでできるようになっていた。

長さを測る器具は、二厘尺という物差しである。二厘尺は、柾目の桧製で長さ五寸（15.15cm）、七寸（21.21cm）、一尺（30.3cm）のものがあり、片側が斜めに削られ、最小二厘（約0.6mm）の目盛が刻まれていた。



二厘尺（上） 縮図尺（下）



点線器（上左）烏口（上右）合印（下）  
千葉県香取市伊能忠敬記念館所蔵

そのほか、測点の位置に穴を開けて印をつける針は、紬針や木綿針に杉箸の柄をつけたものが使われ、絵図に描かれる記号は、合印という小印が使われた。紙も伸縮を小さくするため、二、三枚貼り合わせ、よく乾燥させたものを使うようにしていたことなどが量地伝習録に記録されている。製図用の器具は、細い直線を描くための烏口や測線周辺の景観を描くための絵筆や彩色用の絵の具、文字を書くための筆や墨、朱墨などが必要であり、伊能忠敬記念館には、当時の烏口が現存している。

なお、現存する小図の下図を見ると、その精細さに驚かされる。測点の間隔は1mm以下、文字の大きさは1mmほどのものがびつりと記入されている。針穴も小さく、肉眼で確認することは難しいほどである。このような下図は、何を使って描かれたのだろうか。小さい文字は筆先が小さい筆を使えば書けるが、短い線を描くのに烏口は使えない。筆者は、地図を描くのに丸ペンという金属製の先の細いペンを使っていた。当時の烏口が現存することから、短かくて細い線を描くには、当時もペンのようなものが使われたのではないかと筆者は考えているが、文献による記録も現存する器具も見つかっていない。ただし、小図の下図の文字部分には、用紙のへこみが確認できる箇所もあるので、先が硬い筆記具が使われた可能性は否定できない。

### 伊能図の作成工程

大図は、現地での測量データを野帳や籠絵図に記録し、それを基に測線を図化して「下図」が作られた。この下図は、範囲が狭いので、大図1枚



の範囲となるよう、繋ぎ合わせて寄図（広域の下図）が作られる。寄図の内容は、狭域の下図の測線に村などの地名を記入したものである。完成図には、寄図の情報以外に、測線周囲の山川、田畑、森林、家屋などの様子を書き込む必要がある。また、下図や寄図は測量次に作られているから、最終上呈図のように、複数次の測線を一枚の地図に直接描くことは難しく、一旦完成図の下書きを作ったことが推測される。

量地伝習録の記述には、寄図から礬砂を引いた美濃紙に寄図の測線を針で突き写して、山川、田畑、森林、家宇の情報を描くことが記載されている。この用紙は、美濃紙であり、「上絵図」に用いる唐紙や間似合とは異なることから、完成図を描くための原稿図として作成されたものと考えられる。すなわち、完成図である「上絵図」は、この原稿図を完成図の用紙に写し、それを清書する方法で描かれ、完成図と同内容の原稿図は、次の複製の稿本として、地図の骨格である寄図とともに、伊能隊に残されたであろう。伊能忠敬記念館に残る副本とされる図や、明治期に政府に提出された控図は、こうした性格の図ではなからうか。

中図や小図の作成は、大図の寄図を測量データと見なし、これを6分の1や12分の1に縮めた縮図を作ることから始まる。これが大図の狭域の下図に相当する。以後は大図の作成と同じ工程で中図の範囲をカバーする広域の下図（寄図）や原稿図が作られ、中図や小図の「上絵図」も、大図と同様の方法で仕上げられたと考えるとよいだろう。

### 伊能忠敬の地図づくりの特徴

日本全国を現在の地図とほとんど変わらない正

確さで測量した伊能忠敬の測量方法は、これまで見てきたように、距離と方位を順番に測っていくという単純な方法で、特殊な方法ではなかった。

むしろ単純だからこそ、正確な地図ができたのかもしれない。あえて他の測量と違う点を挙げるのであれば、誤差をいかに小さくするか、測量の誤りを防ぐにはどうすればよいか、という測量の最も基本的な注意を分析し、それを防ぐ方法を測量や地図を描く作業方法の中でマニュアル化したことであろう。試行錯誤の末辿り着いた単純な作業を確実に繰り返す愚直なまでの姿勢が、日本全体の正確な地図を作り上げたといえよう。

正確な地図作りには、現地での測量だけでなく、測量したデータを使って地図を描く技術も重要である。下図作りは、紙の上の測量に外ならず、導線法という誤差の累積が懸念される現地での測量結果を、下図を描く段階で交会法という別の手段で確認し、さらに天文観測で求めた各地の地球上の絶対位置に結び付けることで、全体の歪を調整したことで、大きな歪が解消できたと考えられる。

伊能忠敬が此の世を去って二〇〇年余りが過ぎ、人工衛星を使って誰でも高精度な位置情報を取得できるようになり、地図も航空写真や人工衛星の画像から、容易に作るできるようになった。こうして地図は、今、私たちの生活に欠かせないものになったが、二〇〇年前に一步一步測量を積み重ね、本稿で示したような工程を経て日本全国の地図を作り上げ、その地図が日本の近代化に大きく貢献したことを現代に生きる私たちは忘れてはならないと思う。

### 参考資料

- ・『伊能忠敬』大谷亮吉 254〜502 大正5年
- ・『伊能忠敬の科学的業績』保柳睦美 333〜361 昭和49年
- ・伊能忠敬記念館所蔵 測量器具、香取市Webサイト  
<https://www.city.katori.lg.jp/sightseeing/museum/index.html>
- ・『天文簡要論 坤』会田安明 東北大学附属図書館狩野文庫  
<https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100328710/>
- ・東京国立博物館所蔵 伊能小図（東日本）  
<https://webarchives.tnm.jp/imgsearch/show/C0072788>

### 注

- \*1 本稿で参照した「量地伝習録」は、保柳睦編著『伊能忠敬の科学的業績』に掲載されているものである。保柳によれば、大谷（大正5）に記述のある原本と考えられるものは確認できず、国会図書館、東北大学、静嘉堂文庫、秋岡武次郎所蔵の写本を対照し、語句や仮名遣いの違いは、分かりやすいものを採用し、要点をとらえることに主眼をおいたとしている。

- \*2 『天文簡要論』は、天文観測の基本的な考え方を記録したもので、東北大学附属図書館のほか、山形大学小白川図書館が所蔵しており、それぞれで若干の相違はあるが、記載されている内容に変わりはない。本稿では、読みやすい東北大学のものを使用した。

本稿は、2018年4月13日発行『伊能忠敬日本列島を測る―伊能忠敬没後二〇〇年―前編』第一章「伊能忠敬の人と業績」に収録した「伊能忠敬の測量」に加筆修正したものである。

※本稿は冊子発行後4pの図とその説明を一部修正した。

## 法隆寺史に伊能忠敬測量隊の記録

～訪問日の動向が明らかに～

柏木隆雄

伊能忠敬の第六次測量は、四国、大坂の測量を終えて大和路に入った。文化五年十二月一日、法隆寺村に到達、その日の測量日記の全文を記す。

十二月朔日 晴天、朝六ツ後當麻村出立、無測量にて同国葛下郡王子（王寺）村へ立帰、昨日残印より初、同国平群郡 衆人領カミナミ 神南村、木村宗右衛門支配稲葉車瀬村、植村駿河守御預所 小吉田村、同上 竜田村迄測、中食、同所より初、植田（植村）御預所 法隆寺 宇新町 又並松と云 迄測、印杭を残し法隆寺門前迄測、九ツ頃法隆寺村へ着、止宿百姓平右衛門 一軒、夫より法隆寺へ越、諸堂拝覧、靈宝一見加藍（伽藍）靈宝別紙にあり、御朱印千石 此夜晴天測量

日本最古の木造建築物の法隆寺の大伽藍を眼前にしたわりには短文で淡白な記述である。なぜ測量日記の法隆寺の項の記録が淡白であったかの疑問は、日記の最後の一行で解決する。

「伽藍靈宝別紙にあり」

忠敬は法隆寺から伽藍と周辺の末寺まで描かれた絵図と靈宝録を拝領しており、そこに法隆寺の全容が描かれ、靈宝録には秘仏や宝物が記載されているので日記での説明を避けた。

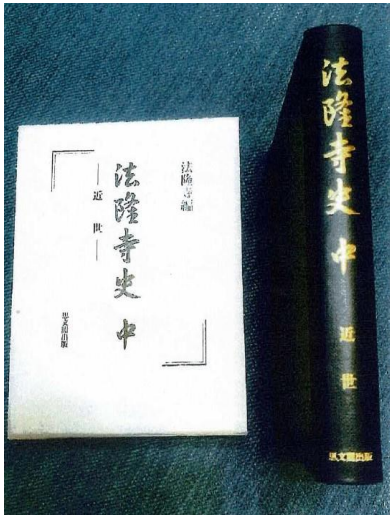
忠敬が持ち帰ったこれらの資料は、なぜか佐原の柏木家に残された。（佐倉の国立歴史民俗博物館へ寄託）

二〇〇九年六月、私はこの絵図等の検証で法隆

寺を訪ねた。（法隆寺との検証のいきさつは本誌の五六号、五七号に記載）。訪問時の法隆寺側の対応は、執事長の 大野正法氏。大野氏は当方の問いに「古文書を調べたらその日、測量方が法隆寺に入った」と仰言られた。いずれ確かな記録をいただきたい、と願ひ出て法隆寺を後にした。

### 『法隆寺史(中)近世編』の刊行

令和五年四月、自宅に法隆寺から電話が入った。執事長の 大野正法氏からだった。用件は、近々刊行予定の『法隆寺史』の近世編に、伊能忠敬を取り上げたいので協力の依頼であった。翌日には手紙が届いた。以前に私が送った資料を基に忠敬の法隆寺訪問の記事を掲載したいとのこと。「本書により伊能忠敬の業績と仕事ぶり、法隆寺との絆の一端が紹介できれば幸いかと存じます」とも記されていた。



『法隆寺史(中)近世編』

令和五年九月三日、待望の『法隆寺史(中)近世編』が届いた。『法隆寺史(上)古代・中世編』は二〇一八年に刊行されており、この近世編はそれに続くものである。織田・豊臣・徳川の法隆寺との関わりから始まり、江戸末期に至るまでの法隆

寺での諸々の出来事が記載されている。伊能忠敬のことは、「学者たちの法隆寺訪問」の項に三ページに亘って記載されていた。前文は、測量隊一行の法隆寺村に到着、法隆寺訪問までの測量日記の全文の掲載。私の第一の関心事は忠敬一行の法隆寺での動向と寺側の対応だった。法隆寺は忠敬一行の訪問をなぜ知ったのか、またどのような接遇であったのか

この問いに法隆寺の日記が答えてくれた。寺史の「年会日次記」にこう記されている。



『年会日次記』

八ツ時寺内へ参詣有之、西大門より案内人吉岡右司馬しめ附添参詣案内ス、於舍利殿十八種宝物出ス、於三経院七種宝物出ス也、聖皇院御殿開帳シ、宝物縁起十八種方者花園院、七種方八年会善任院也、尤於三経院伽藍絵図巻枚、靈宝目録巻冊、順見之砌差し出し候通相認メ遣ス也、七ツ時過二諸事相濟、寺内退出也、夫より宿所西川刑部宅へ退宿也、



名前左二記ス

天文方高橋作左衛門手附

伊能勘解由

同下役

坂部貞兵衛

柴山伝左衛門

下河辺政五郎

青木勝次郎

右之通也、尚同夜初夜前<sup>二</sup>、年会所使者として挨拶<sup>二</sup>吉岡右司馬、西里刑部宅<sup>江</sup>遣入、下河辺政五郎出逢、丁寧二口入れ申也

忠敬一行の法隆寺訪問は、その日の朝、門前の庄屋吉十郎により法隆寺に報らされた。忠敬一行は午後二時頃寺内に入る。案内人は吉岡右司馬、西大門から舍利殿へ、ここで十八種の宝物を鑑賞、次の三経院では七種、聖皇院では特別に開帳された聖徳太子像を拝鑑、宝物縁起十八種は花園院で、なお三経院で伽藍絵図一枚、霊宝目録巻冊が下賜された。午後四時頃一行は諸事相済み寺内から退出した。宿泊所は百姓平右衛門家に。参詣者の名前も記されている。この夜、忠敬宿所に、使者として吉岡右司馬が来訪、改めての挨拶に下河辺政五郎が丁寧に応接したことも年会日次記の末尾に記されている。

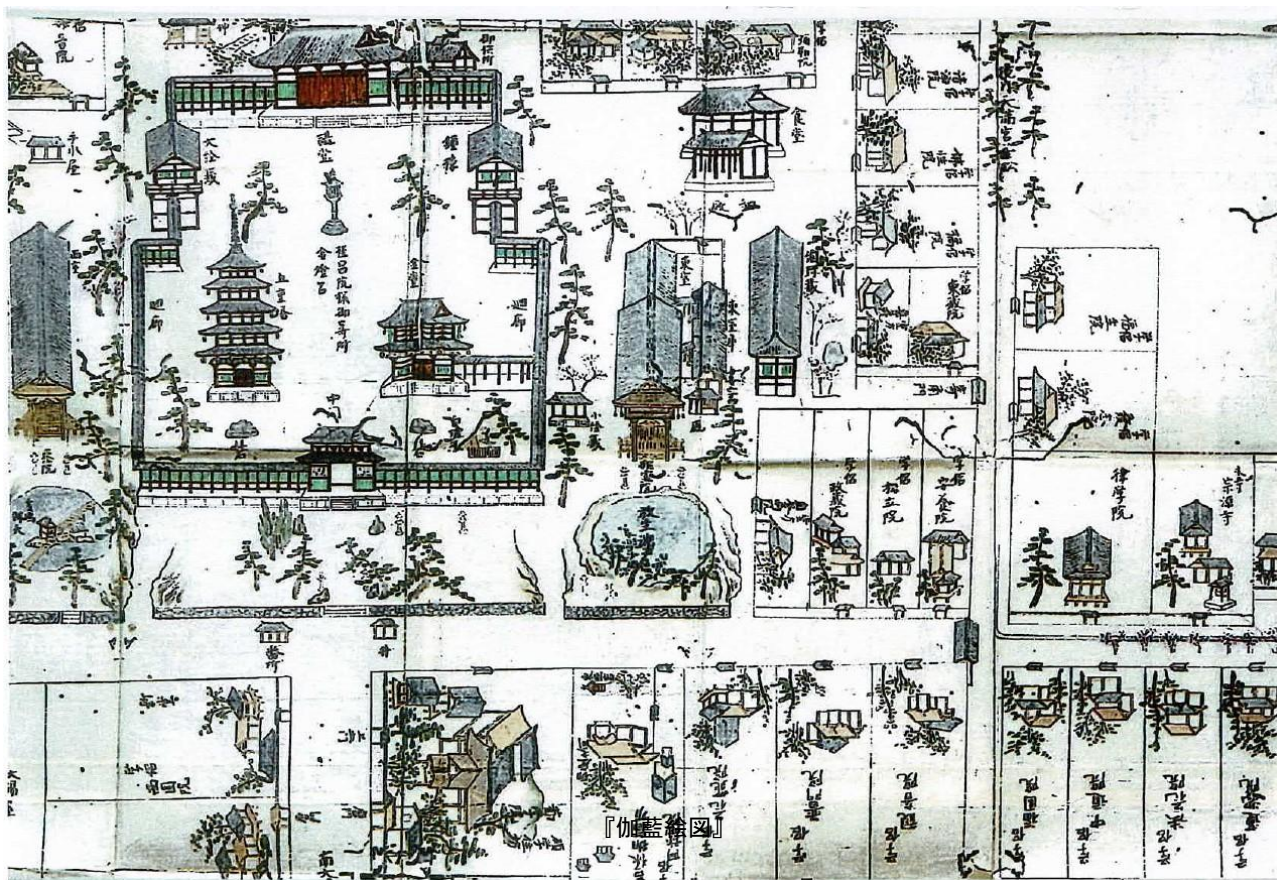
忠敬が持ち帰った伽藍絵図と霊宝目録は、南都奉行や巡見使などの公儀役人の要望に備えてあらかじめ寺側に用意されたもので、忠敬の受領は幕府要人と同様に処遇されたと寺史は記す。(丁)

(参考資料)

法隆寺史(中) 近世編 思文閣出版

令和5年9月1日発行

伊能忠敬研究 第五六号、五七号



伽藍絵図(「大和国法隆寺伽藍寺院境内之図」から西院部分拡大)

# 琵琶湖図をめぐる書状二通

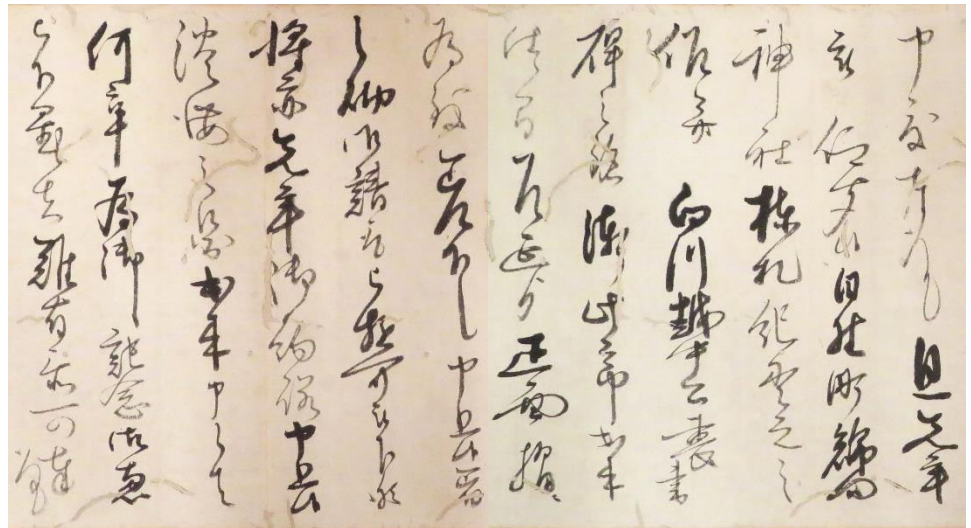
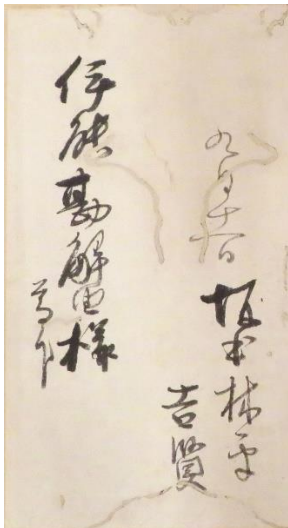
玉造 功

はじめに

文化十一（二八一四）年五月二十三日伊能忠敬は第八次（第二次九州）測量から江戸に帰着し、八丁堀亀島町の居宅を地図御用所として幕府に提出する地図の作製をはじめた。その年の十一月二十九日の忠敬の『江戸日記』に「嵩山社碑銘並びに白川侯副碑銘、坂本林平より来る。且此方よりも琵琶湖の全図を遣す」という記事がある。『会報』29号の「伊能忠敬の江戸在住日記（八）」には、佐久間達夫氏による『江戸日記』の翻刻とともに「阪本という人物は不明であるが、嵩山社碑銘並びに白川侯副銘を受け取り、お札に琵琶湖図を渡している。琵琶湖図は贈呈用に作られたといわれながら、さっぱり謹呈した記録がなく残存数も少ない。その図を渡すほどこの碑銘は大切なもののようなのである。忠敬にとつて、白川侯・松平定信の副碑に価値があったのかもしれない」との解説が付けられている。このときの琵琶湖図贈呈をめぐる書状二通を紹介したい。なお『江戸日記』の「阪本」は「坂本」の誤記である（後述）。

## 一 坂本林平の伊能忠敬あて書状

坂本林平が忠敬に宛てた書状が香取市立伊能忠敬記念館に残されている。内容から見て、忠敬が「嵩山社碑銘並に白河侯副碑銘」とともに受け取ったものであろう。その国宝の書状類321「坂本林平書状」について、その画像の一部と、翻刻、大意を紹介する。



坂本林平書状（国宝：書状類 321）部分 伊能忠敬記念館蔵、無断流用禁止  
書状の画像は翻刻の太字部分である。

翻刻

尚々

乍恐以鹿札奉啓上候、先以秋冷相慕候之處、尊前益御堅固ニ被為遊御座候事、恐悅至極奉存上候、然者先歳御巡国之砌者、誠ニ久々ニ而奉拜尊顔、于今申出候而、実ニ以北総之昔を忍び、百歳之鬱を發し候、其節御教訓被成下候通り、養生專一二仕候而、勇氣者落し不申候間、何卒今一度東都下向を樂ミ罷在候間、其砌者得尊顔候而、御示し二預リ

申度奉存候、且先年被仰聞候日野町綿向神社棟札紀貫之之

作并 白川越中公裏書碑之銘漸此節出来

仕候間、左延方正面摺ニ為致差下し申上候、着

之砌、御請取被遊可被下候、将亦先年御約議申上候

淡海之図出来申候者何卒為御記念御患

被下置候者、難有忝可奉存候、當年者長場御下向之趣奉承知候、此程御機嫌宜

御帰府被為遊候事奉遠察候、最早功成名とけて安樂之御心夫肝要之御事奉存候、

穴かしこ

先者右氣候御見舞迄、乍恐以愚毫如此二御座候、誠恐誠惶頓首

九拜

九月十一日

坂本林平

吉賢

伊能勘解由様

尊下



## 大意（挨拶部分は省略）

先年お話しがありました日野町の綿向神社の紀貫之の棟札の碑銘と白河藩主松平定信侯による裏書の碑銘の拓本が出来上がりました。左延より正面の碑文を拓本にして送りました。到着しましたらお請け取りください。

先年御願い致しました淡海之図（淡海は琵琶湖のこと）が出来上がりましたら、記念として御恵与下されますと有り難く忝く存じます。

## 二 伊能忠敬の坂本林平あて返信

このように文化十一年九月十一日付けの坂本林平の書状と嵩山社碑銘などを江戸で受け取った忠敬は、十一月二十九日に「此方よりも琵琶湖の全図を遣す」と『江戸日記』に記した。その際、琵琶湖図に添えて坂本林平に返信を送っていた。

その書状の翻刻が『近江蒲生郡志』巻六に掲載されているので紹介する。残念ながら写真はないが、書状の日付と内容は琵琶湖図をめぐる『江戸日記』の記事や坂本林平の書状と符合するものである。

大正天皇即位の大典の記念事業として全国的に郡誌編纂事業が進められていたが、『近江蒲生郡志』もその一つである。大正十一（一九二二）年に、滋賀県蒲生郡役所が刊行したもので、編纂にあたったのは中川泉三である。彼は『近江日野町志』や滋賀県内の郡誌などを数多く編纂したことで知られる。

『近江蒲生郡志』は国会図書館デジタルコレクションで閲覧できる。翻刻文を引用するにあたっては、読みやすくするため適宜改行した。

## 翻刻

『近江蒲生郡志』巻四 五十六頁による）

東櫻谷村中郷渡邊紋四郎氏文書

芳管（簡力）辱致ニ捧（奉力）読ニ候、愈御安被レ成ニ御座ニ珍重ニ少奉レ存候、

随而愚老儀、無ニ別條ニ諸國測量相済、當五月下旬致帰府ニ候、

六月より直に地図に取掛り、即今日々下役中並内弟子一同、拙宅に而右調最中に有レ之候、

先年御国許測量之節者、不ニ存寄ニ廿年來に而寛々得ニ御意ニ致ニ大慶ニ候、

其節日野大嵩社碑銘摺立之儀御頼申候處、大嵩社碑銘並に白川侯御副銘正面摺共、此度御贈惠被レ下恭奉レ存候、

尤佐原西宮支配人、態々持参有レ之候間、直談に茂及候、

當年中来亥年茂、地図取調中に候間、御約之琵琶湖之図、一兩年も延引に相成可レ申と申談候處に無レ據御頼之儀に付、内々急仕立申付、此度進上申候、

取急候間、彩色等不レ宜候得共、図式方位、郡村等は相違無レ之候、

尤図面折立可レ申候得共、年来に者折切、又は折縮も出来及ニ破損ニ候間、図し候儘に遣申候、御地に而軸を御入、御巻物に被レ成候方宜奉レ存候、

當冬者別而嚴寒にも御座候得者、御保愛可レ被レ成候頓首。

十一月廿九日

坂本林平様

伊能勘解由

## 大意

お手紙拝読致しました。ますますご健勝とのこととお慶び申し上げます。

さて私も諸国測量を無事に済ませて、この五月に江戸に帰着しました。

六月から直ちに地図造りに取り掛かり、今は日々下役衆と内弟子一同が拙宅で作業しているところですよ。

先年お国許を測量した際に思いがけず二十年ぶりでお目にかかれてうれしく思いました。

その節、日野大嵩社碑銘の拓本を御願いしましたところ、大嵩社碑銘と松平定信侯による副銘の拓本をこのたび御恵贈いただき忝く存じます。

佐原の西宮の支配人が、わざわざ持参して来られたので、直接お話しできました。

当年中も来年も、地図の作業中ですので、お約束の琵琶湖の図は一、二年も延引になりそうだとお話ししたところですが、やむを得ない事情でしたので、内々で急いで琵琶湖図を仕立てさせ、このたび進呈致します。

急ぎましたので、彩色など不十分ですが、図式方位、郡村等は間違ひありません。

ただし地図は折りたたんでありますので、いつかは折り切れたり縮んだりして破損してしまいます。作図したままの状態を送りましたので、そこから軸装するなり、巻物に仕立てたりするほうが宜しかろうと思えます。

この冬は特に嚴寒ですので、ご自愛下さい。頓首。

十一月二十九日

坂本林平様

伊能勘解由

### 三 坂本林平とは何者か

『江戸日記』では「阪本」とするが、書状に記載されている様に「坂本」が正しい。忠敬の書状では二十年ぶりに会ったとあり、坂本林平の書状にも、久々に尊顔拝し、北総（佐原をふくむ下総国北部のこと）の昔をしのんだと記されているので、二人は旧知の間柄であったことがわかる。

日野町側の文献では『東桜谷志』が坂本林平について紹介している。それによると、坂本林平は中之郷（現在は日野町の大字）の人でその住まいは中之郷の観音堂の前であったと伝えられているという。方円舎、楓亭と号し、『楓亭雑話』という桜谷全体の村々の郷土誌を書き残した。桜谷は鈴鹿山系の綿向山の西麓から琵琶湖に向かって西流する佐久良川の上流域の総称である。『東桜谷志』では、どうして坂本林平と忠敬に交流があったのかは不明であるとする。

中川泉三は『近江日野町志 卷下』では坂本林平について、文政十三年寅八月二十四日死去、法名釈篋流と記している。さらに中川は「考古学雑誌」第六巻第十号に寄稿した「近江商人の旧記に見ゆる下総国葛飾八幡宮の古鐘」という記事で「林平の家は先代より商人にして、下総国佐原に支店を設けしが、林平又業を継ぎて、毎に江総（近江と下総）の間を往復したり、林平商家に生れしも、性、文学を好み業暇青史を繕き、稍々見識を有す」と記し、さらに、坂本林平の著作『楓亭雑話』から「予、先年下総佐原二、出店往来ノ節、寛政五癸丑正月…」と引用している。

これで行くや坂本林平と佐原が繋がった。坂本林平は日野商人として佐原に出店しており、佐原時代の忠敬とは面識があったということにな

る。周知のように近江商人は、近江国に本宅を構え、他国で行商や出店を設けて商いをしてきた商人であり、なかでも、近江八幡、日野、五個荘などがその出身地として知られる。利根川下流域の水運と商業の中心地である佐原村にも多くの日野やその近辺出身の商人が店を構えていた。

ただし、坂本林平という名前は佐原側の史料で見いだすことが出来ない。坂本林平と佐原側の史料を繋ぐ手掛かりが忠敬の書状の「佐原西宮支配人」という記述である。

『千葉県の歴史』資料編 近世6所収の「安永四年河岸役銭割付控」に「ししの宮林平 一貫七百文」と記されている。坂本林平の佐原の出店は西宮を屋号としていたと思われ、佐原側の史料では坂本林平ではなく、西宮林平として記録されていた。なお、この史料は安永四（一七七五）年に佐原河岸に幕府が賦課した運上金（営業税）の負担記録であるが、林平の負担額は商人仲間でも最多である。町内単位で記載された寛政四（一七九二）年の「川岸運上取立帳」では、林平は佐原村の小野川沿いの上川岸という町内の商人の並びに記載されているという。

また『旌門金鏡類録』や『伝家』という伊能家に伝えられた史料には、明和九（一七七二）年六月に代官遠藤兵右衛門が佐原村の有力商人十六人に対し御用金を要求したという記録があるが、負担額二番目の金七両のランクに忠敬と林平が並んで記載されている。

『伊能忠敬未公開書簡集』の「暮金銀出入」という年末年始の出入金の記録では、忠敬は林平に金二歩と銭一貫十八文を出金している。

多くの日野商人と同様に林平は日野町近くに

本宅を、佐原に西宮という店を構えて支配人を置き、林平や支配人が近江と佐原を行き来していた。ただし近江商人は佐原の商人仲間や酒造仲間などの一員として記録が残されているが、村役人として佐原の村政記録に名を残すことはなかった。

### 四 忠敬と林平の再会

『測量日記』から忠敬と林平の二十年ぶりの再会を見てみよう。第七次測量で九州測量に向かう途中、近江国では中山道を南下した。武佐宿からは中山道を離れ、日野町をへて鍵掛宿で一泊し、東海道の土山宿へと測線を繋いだ。この脇街道は多賀大社と伊勢神宮を結ぶ参詣路にあたる。



「大日本沿海輿地全図 中図 5. 近畿」に加筆 日本学士院所蔵



文化六（一八〇九）年十一月一日の『測量日記』を引用する。

中食所の興仙寺にて、久保屋久左衛門、倅久七に逢。同郡中ノ郷村坂本林平、今は隱居のよし。改名金四郎と云。鎌掛の止宿へ尋向、数刻談話。

昼食場所に挨拶に来た久保屋久左衛門もまた佐原で酒造業を営む日野商人である。天明八（一七八八）年の佐原の酒造人仲間三十五人のなかで、千石作りの永沢、伊能両家に続いて九百石で第三位、佐原村の酒造人仲間の惣代を務めていた。

林平は鍵掛宿の本陣藤屋権右衛門に忠敬を訪ねて、二十年來の再会を果たした。林平は隠居して金四郎と隱居名を名乗り、忠敬と同様に隠居後は、自分の好きな郷土の歴史や地理を研究していたようである。『測量日記』には「数刻談話」とあるので、単なる挨拶ではない。二人の共通の関心事である地誌をめぐる話も話が尽きなかったのではないだろうか。その中で紀貫之ゆかりの「嵩山社碑銘」が話題となったのであろう。

### 五 嵩山社碑銘とは何か

忠敬が琵琶湖図をお札にすることで入手した「嵩山社碑銘」を書状では「日野大嵩社碑銘」と記している。この日野大嵩神社は滋賀県蒲生郡日野町の馬見岡綿向神社の奥宮で、日野町東側の鈴鹿山脈の綿向山の山頂に祀られている。当時は里宮の馬見岡綿向神社も併せて日野大嵩社と呼ばれていたようである。

『近江蒲生郡志』巻六の神社志の馬見岡綿向神

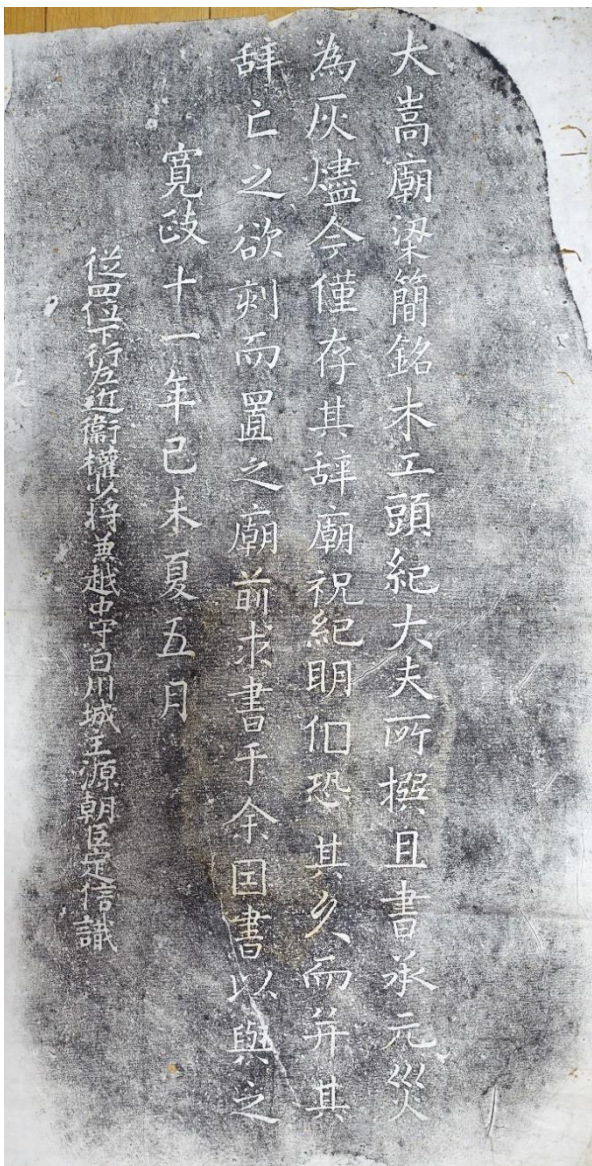
社の由緒に「當社に天慶八年紀貫之の撰する梁間銘（棟札のこと）あり原本滅ぶと雖も写本によりて其文を伝う」とあり、その全文が紹介されている。これが問題の銘文である。

『近江日野の歴史』第三巻や、馬部隆弘の『椿井文書』（中公新書）によると、江戸時代中期の十八世紀頃からは、地方の有力町人や地主層までも歴史や地誌を調査研究する気運が広がるなかで、地域の神社が平安中期の『延喜式』の神名帳に記載された神社（式内社と呼ばれる）に相当するかどうか大きな関心事となり、各地の神社間で論争が巻き起こった。

蒲生郡においても、日野町の馬見岡綿向神社と八幡の馬見岡神社（近江八幡市馬淵町）間でどちらが式内社の馬見岡神社にあたるのかをめぐる激しい論争が繰り広げられたという。八幡側は「綿向神社鐘銘」を根拠に馬見岡綿向神社は「式外之

神」であり、八幡の馬見岡神社が式内社であるとした。もつとも、この鐘銘は『椿井文書』で一躍その名が知られるようになった椿井政隆が偽造して八幡側に持ち込んだものであった。実は、椿井政隆は坂本林平のもとにも偽造した古文書や古絵図を持参して滞在したことがあった。もつとも坂本林平は紙が新しいなどと椿井文書に対して、疑念を持っていたとのことである。

八幡の馬見岡神社側の主張に対して、日野町の馬見岡綿向神社の氏子の側は寛政五（一七九三）年に大嵩社の由緒を記した「梁簡銘」と呼ばれる紀貫之作の棟札の写しを発見した。中川泉三は『近江日野町志』に、「神主を始め氏子一同は「奇跡的発見を喜悅したり」と記す。さらに日野町の豪商中井源左衛門光武がこの銘文を後世に伝えるために、「當時の名土松平定信（白川楽翁）に揮毫を請ひて之を石に刻し境内に建設し」と経緯を記して



「白川侯御副銘」

（『梁簡銘』についての松平定信の副銘の拓本）

いる。松平定信は寛政十一（一七九九）年に「梁間銘」を揮毫し、更にこれが紀貫之によるものであることや、揮毫した経緯を副銘として記した。これが「白川侯御副銘」である。松平定信は自著でも梁間銘を紹介したという。

いま一人この梁間銘が世に広まる上で貢献したのが近江八幡の豪商で、隠居してからは歌学者として、『近世畸人伝』（岩波文庫、東洋文庫）の著者として知られる件蒿溪である。彼は享和元（一八〇一）年に出版した随筆『閑田耕筆』に、この梁間銘は写しとはいえ「いと古びて虫ばみたり」と紹介し、「梁簡銘」の最後に「従四位下 行木工頭 紀朝臣貫之謹誌」とあることから、紀貫之の最終的な位階が従来いわれてきた従五位上ではなく、従四位下である証拠とした。さらに徳川光圀の命で始まった『大日本史』巻二百十九の紀貫之の伝記に「従四位下に叙せらる。『近江日野大嵩社 天慶八年の梁牌』として採用され、さらにお墨付きが与えられた。かくして「梁間銘」は「すこぶる有名な古銘として喧伝されたり」と『近江日野町志』は記す。

福岡藩では付添の青柳種信が忠敬について、先年志賀島より金印が発見されたことをご存じで、金印を押した印影の紙を所望されたと記している。そのような忠敬であれば紀貫之の「梁簡銘」が見つかつたと聞けば拓本を所望するのも当然である。ただし、梁間銘の真偽については昭和五年の『近江日野町志』がすでに懐疑的な筆致で記述していたが、目崎徳衛は『人物叢書 紀貫之』（一九六一）で「梁間銘」を偽作と断定している。なお拓本は東京国立博物館が所蔵しているだけでなく、インターネット・オークションや古書店などでも販売

されることがある。

## 六 忠敬書状と琵琶湖図の行方

忠敬書状と琵琶湖図について日野町教育委員会に確認したところ、両者ともに現在はその所在不明のことであつた。ただし、第三高等学校の地理学教授であつた藤田元春は『伊能忠敬の測量日記』で「筆者の知人は江州蒲生郡の人で伊能先生の書翰を珍藏している」として書状の内容を紹介している。この著作は一九四一年九月の出版であるので、書状については戦前までは存在していたことが確認出来る。

一方、琵琶湖図の所在については戦前の『近江蒲生郡志』や『近江日野町志』にも記載がない。坂本林平に贈られた琵琶湖図の行方を考える上で、神戸市立博物館が平成二十五年に購入した『近江国及附近絵図』は興味深い資料である。

小野田一幸は「神戸市立博物館蔵近江国及附近絵図の特質」において、伊能忠敬記念館所蔵の「琵琶湖図」（国宝・地図・絵図類112）と詳細に比較分析をしている。その結果として、「近江国及附近絵図」は越前国の敦賀半島西半や若狭国三方郡が描かれていないこと、大阪や京都の都市景観の描写が簡略であること、第四次測量による関ヶ原から木之本までの伊吹山南麓を通る北国脇往還が盛り込まれていること、琵琶湖東岸の村名情報が多いことなどを指摘している。また文化四年に完成した「琵琶湖図」に対して、「近江国及附近絵図」は記載された村名から判断すると第八次測量が終った文化十一年以降に製作されたと指摘している。

「近江国及附近絵図」の特色として坂本林平が

住む近江国に重点が置かれて越前国、若狭国に省略があり、京都や大阪が簡略であること、忠敬書状の「取急候間、彩色等不<sub>レ</sub>宜候」という記述と一致すること、忠敬が文化十一年十一月末に贈っていることなどから考えて、「近江国及附近絵図」は忠敬が坂本林平に贈つたものであるという可能性に期待したいところである。

## 七 忠敬の時代

藤田覚は『近世史料論の世界』において、忠敬が日本全図を作成させた要因について「一九世紀初頭の幕府による歴史・地誌等の大規模な編纂事業の開始と、それを必要とし可能とした政治的経済的思想的背景」を考慮すべきであると指摘している。寛政期からは「編纂書の時代」と呼ばれるように、歴代將軍の公式実録である『徳川実紀』、支配者の系譜をまとめた『寛政重修諸家譜』、期待される被支配者像として『孝義録』、動脈ともいえる五街道や脇街道を調査し絵図に仕立てた『五街道其外分間延絵図』、塙保己一の和学講談所による国書を集大成する『群書類従』等が次々と編纂された。日本の海岸線を地球の経緯度に位置づけようとする伊能測量も、そうした時代の精神の一端に位置づけることが出来るよう。

幕府による編纂事業には地誌編纂が含まれていた。幕府は『御府内備考』、『新編武蔵風土記稿』、『新編相模国風土記稿』を、各藩でも会津藩の『新編会津風土記』、福岡藩の命による青柳種信の『筑前国統風土記拾遺』などが編纂された。

幕府などによる大規模な地誌編纂事業が進行するその一方で、地域社会レベルでも自家の由緒や郷土の歴史・地理に対する関心が高まり、式内社



の比定、地名などを考証し、地域の記録として地誌の編纂を指向する状況が生まれた。坂本林平もその一人である。それはまた「梁簡銘」や椿井文書などの偽文書が産み出される背景ともなった。

## 八 忠敬の地誌指向

幕府領や大名領にかかわらず直接的統一的に測量を進める忠敬であったが、その一方で日本各地域の地誌に対する関心は高く、自らも測量先で考証を行っていた。

第七次測量の途中で忠敬が著した「長門国厚東郡寺々由緒書上」（国宝・文書・記録類531）によると、測量旅行に年表「和漢年契」を持参していたことがわかる。「長門国厚東郡名聞書」（国宝・文書・記録類532）では郡名について考証しようとしたところが、参考にしたい辞書の『倭名類聚鈔』や勅撰国史書の『六国史』を探しても、宿場町にはないと嘆いている。

岡山県立博物館には第五次測量に一ヶ月間随行した窪田浅五郎関係の資料が所蔵され、公刊されている。窪田浅五郎は文化十（一八一四）年十二月十日から十五日頃まで第八次測量の帰路の忠敬にも随行したようで、「測量留」というメモを残している。窪田は測量家らしく、各地点間の距離や忠敬の止宿先での天体観測結果を記載する中に、「一、吉備前記 一、和氣絹 一、湯迫方燈記」と三種類の地誌の名前がメモされている。また忠敬に宛てた文化十三（一八一六）年三月八日付けの書状には、忠敬の求めに応じて岡山藩の地誌である『備陽国志』を書き写させて送付したところ、さらに戦国武将宇喜多直家に関する『万燈記』の書写を求められたことが記されている。和算家で、

測量術により岡山藩士に取り立てられた窪田浅五郎に対し、忠敬が求めたのは『備陽国志』や『万燈記』であった。

測量業務日誌であるはずの『測量日記』も、全国測量後半になると寺社や名所旧跡についての記述が詳細になり、伊能図の記載必要事項から逸脱していく。神社であれば、式内社であるか、祭神、祭日、由緒、朱印高、その神社を管理する別当寺、神主や社人などを記載し、文化二（一八〇五）年九月二十四日の『測量日記』では「大に疑し、古の神社を後世に祭れるなるべし」などと自らの考証を書き加えている。

大図において測線が寺社で行き止まりになって、測量精度に無意味な場合がみられる。彦岐島測量中の文化十年三月二十二日付で、坂部貞兵衛が忠敬に送った書状に、式内社が三座もあるから是非測るべき街道ですと記すように、測量目的の選定については、地誌的関心についても留意すべきであろう。

夜明けとともに測量を始め、夜更けまで天体観測をする忠敬は、その一方で地誌考証のために測量先で『六国史』を探しまわる忠敬でもあった。

### 【史料】

- ・伴蒿蹊『閑田耕筆』
- ・国会図書館デジタルコレクション
- ・『大日本史』巻之二百十九（列伝第四百四十六）
- ・国立公文書館デジタルアーカイブ

### 【参考文献】

- ・佐久間達夫「伊能忠敬の江戸在住日記（八）」（会報29号、二〇〇二年）

・滋賀県蒲生郡編『近江蒲生郡志』巻六（蒲生郡、一九二二年）

・東桜谷郷土志編集委員会編『東桜谷志』（東桜谷公民館、一九八四年）

・日野町教育会編『近江日野町志 巻下』（滋賀県日野町教育会、一九三〇年）

・中川泉三「近江商人の旧記に見ゆる下総国葛飾八幡宮の古鐘」（『考古学雑誌』第六巻第十号、一九一六年）

・千葉県史料研究財団『千葉県の歴史』資料編 近世6（千葉県、二〇〇五年）

・日野町史編さん委員会編集『近江日野の歴史』第3巻 近世編（滋賀県日野町、二〇一三）

・馬部隆弘『椿井文書』（中央公論新社、中公新書、二〇一〇年）

・目崎徳衛『紀貫之』（吉川弘文館、一九六一年）

・藤田元春『伊能忠敬の測量日記』（日本放送出版協会ラジオ新書、一九四一年）

・小野田一幸「神戸市立博物館蔵近江国及附近絵図の特質」（『伊能忠敬の地図作成』、古今書院、二〇二二年）

・藤田覚『近世史料論の世界』（校倉書房、二〇二二年）

・白井哲哉『日本近世地誌編纂史研究』（思文閣出版、二〇〇四年）

・玉造功「伊能忠敬記念館 第一〇九回収蔵品展」（伊能忠敬研究会HP）

・竹村栄一、田村啓介「窪田家資料（1）（2）」（『研究報告12、13』、岡山県立博物館、一九九一年）

佐原古文書学習会代表の酒井右二氏には書状の解説及び坂本林平の佐原側資料について、日野町教育委員会の岡井健司氏には日野町側資料についてご教示頂いた。記して謝する。





降の透過図はこのようにして作成した。

香春町道標の内『測量日記』（註七）で位置が確認できるものは、「下香春村香春川中十四間、左上野通筑前追分あり、枝新町①印まで」「また①印より初め、豊後日田追分〔申七月十四日打止置碑に〕繋、五丁二十七間三尺五寸、これより小倉道を測」とあるので①印の「新町の道標③」

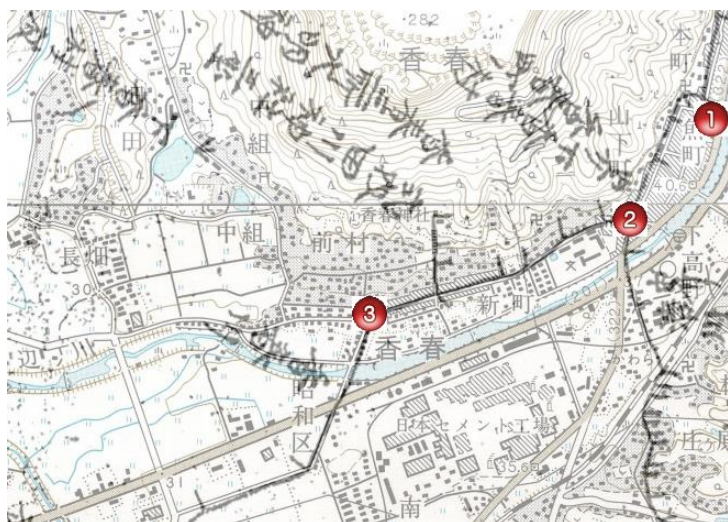


写真1 新町の道標③  
(香春町下香春)

図2 香春町下香春 ①札の辻 ②山下町の道標 ③新町の道標  
国土地理院2万5千分1地形図(田川、金田)と下図の透過図



写真2 木屋瀨の構口跡①  
(北九州市木屋瀨)

と「山下町の道標②」であり、下図を補正する上で距離の根拠となる。また、城下町の鍵型道路形状である本町と魚町間の「札の辻①」で、縦横・距離・角度の補正を行った。修正角度約三度であるが、道標や札の辻のような基点を約八〇〇mごとに見いだし、下図の修正を繰り返す必要がある。添田町から大任町、香春町から北九州市にかけては、角度の修正は二度以下でほぼ一致するが、図2の③を基点とする下香春(香春町)―伊田(田川市)―後藤寺(田川市)―三ヶ瀬(川崎市)にかけて大きな所では約三度の修正が必要であった。同様の方法で田川市以外のいくつかの場所で検証を試みた。添田町・大任町・中間市・北九州市・直方市・荻田町の六箇所では、図3の北九州市木屋瀨(木屋瀨宿)のように追分碑や構口(かまえぐち、宿駅の出入口に設けられた石垣)など

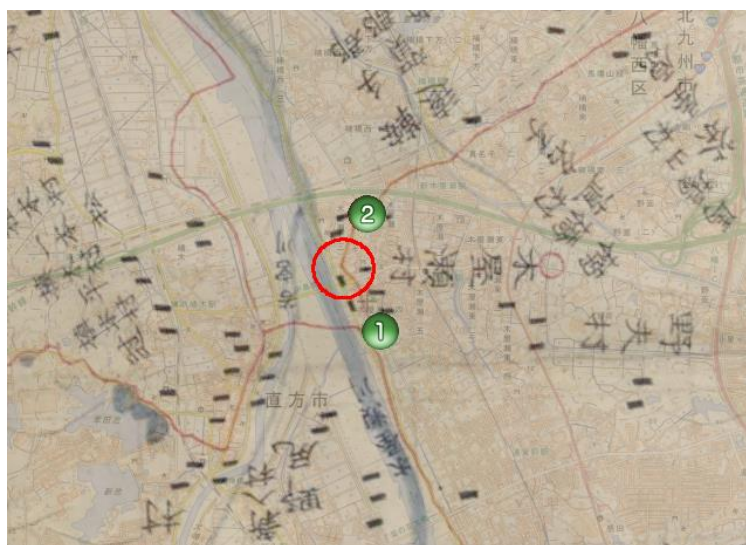


図3 北九州市木屋瀨宿の修正結果 ①西構口跡(追分碑)  
②東構口跡 赤○道路 (地理院地図と「伊能大図」の透過図)

複数の基点がとれる北九州市・直方市・中間市は約二・五度の修正で一致した。大任町や添田町では二度以下である。荻田町は道標など一点しか基点を特定できなかったため確定ではないが東偏の可能性があった。

### 三 田川地域での過去の調査と問題点

田川地域では小倉道や猪膝道、香春道と称される小倉(秋月)街道調査は昭和二九(一九五四)年の田川郷土研究会設立時に田川市立図書館の永末十四生(十四雄)が、伊田町議員植木要に近世末から明治初頭の田川市伊田の聞き取り調査を行い、田川郷土研究会(以下「研究会」)創刊号



(註八)に掲載した関連資料を田川市立図書館に残している。

また、香春宿と猪膝宿の間には、糸飛峠と岩峠の二つの峠があり、峠については『伊田町誌』(註九)に岩峠が掲載され、研究会の小野芳香による岩峠調査と手書き図が存在する。それによると、小倉(秋月)街道は田川市役所と田川簡易裁判所のある新町・中央町の丘陵上を通過している。それに対して、最近の前記出版物(註一と註二)は近代の町が広がる新町・栄町の谷筋を通過している様に図化されている。さらに、平成三〇(二〇一八)年に発行された「デジタル伊能図」(註十)では前記出版物と同様に栄町通りの谷筋を伊能測量経路として修正のうえ図化されている。

『筑豊石炭礦業史年表』(註十一)によると、香春宿と猪膝宿の間の糸飛峠と岩峠の改修記録がある。この二つの峠は明治二〇(一八八七)年に福岡県の予算で改修されていることが判明した。したがって、田川地域では小笠原藩による炭坑開発や三井田川鉱業所の炭鉱開発が盛んに行われ、いままでは旧道と認識されてきた道は明治二十年以降の道路であることが確定した。

この旧道を小倉(秋月)街道と誤認したため、谷筋(町)を通過するという認識が註一と註二の文献によって固定化され、「デジタル伊能図」修正による図化につながった可能性がある。そこで下図を活用した透過地図を作成し精細な現地調査を実施し検討を進めた。

#### 四 現地調査の実際

##### (一) 田川市鉄砲町・新町の測量経路復元

ここからは、伊能測量隊とは逆の方向(香春町

―田川市猪位金)で検証する。図4④の町境を基点として下図と地形図を約二・五度補正し現地調査で照合すると、東町と鉄砲町との境界に参勤交代の道「しゅうりんざか」(水神坂)(写真3)の近世石畳が確認できた。



写真3  
しゅうりんざか (水神坂)  
(田川市鉄砲町)



図4 田川市鉄砲町 ④しゅうりんざか  
地理院地図と下図の透過図

前記の方法によって田川市新町の一里塚を探ってみる。一里塚が地図に表記されているのは『正保年間豊前六郡圖』である。田川市新町の通称「庚申塚」(写真4)は三基あり、大山祇は明和四(一七六七)年、庚申塔は文化九(一八一二)年八月、幸神が一基祀られている。現在は新町公民館の横にあるが、聞き取り調査で四回の移転を確認できた。庚申塚は一里塚の可



写真4 新町の庚申塚 (田川市新町)  
一里塚推定地は⑤付近

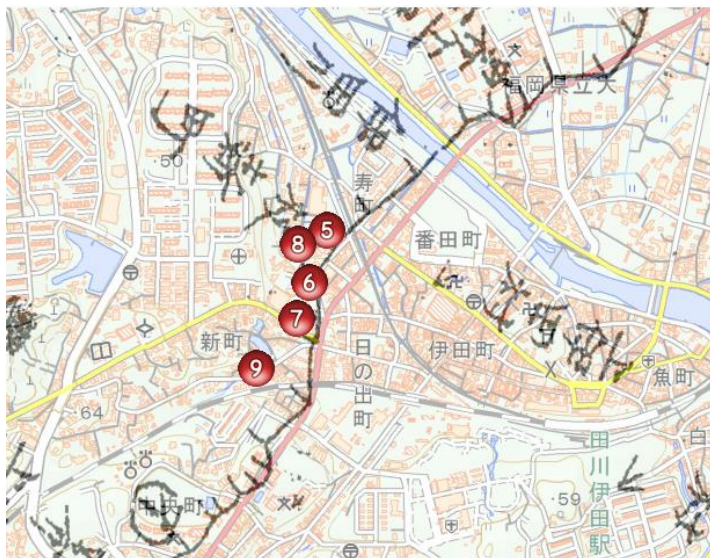


図5 測量経路 (田川市新町) ⑤ 庚申塚推定原位置  
⑤-⑨移動順 地理院地図と下図の透過図





図6 左は陸地測量部地形図と「伊能大図」の透過図 右は陸地測量部地形図  
 ⑩福岡県立大学 ⑪あおぎり ⑫ 田川市役所 (田川市川端町・新町・中央町)

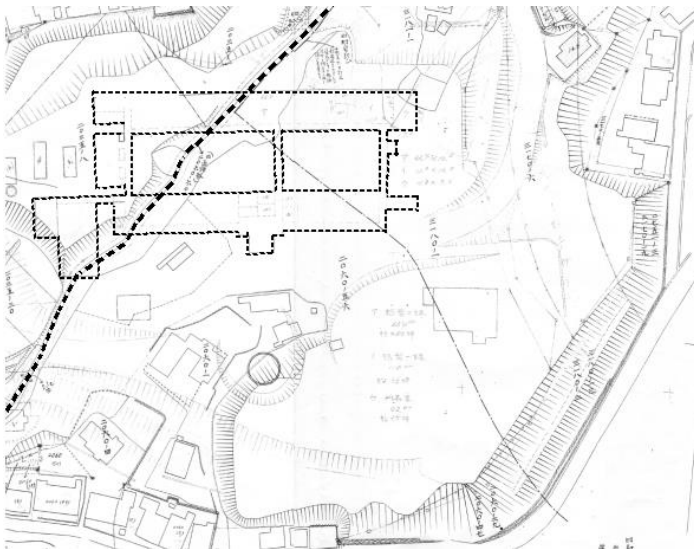


図7 三井田川鉱業所建築予定図 (伝北側屋敷跡)  
 旧県道 (左斜め点線)



写真5 朝日寺の丘陵上の恵美須社  
 (田川市中央町 (旧新町))

能性が高く、現在⑨の場所にあるが、原位置は『正保年間豊前六郡圖』から⑤と推定される。しかし、一里塚の場所を決定できる一次史料はない。伊能忠敬の測量経路は、香春道、小倉道が主であったと考えられるので、「陸地測量部地形図」と「伊能大図」を透過させると、国登録有形文化財(建造物)「あおぎり」(図6⑪)の北端の石垣付近を通過している。「あおぎり」(田川市新町)付近は石垣が築かれる前は丘陵で「伊能大図」の測量経路はここを通過している。

この街道は田川市中央町にある旧田川市立中央中学校から田川市役所(図6⑫)を通過している。近年云われ始めた栄町の谷筋を通過していないことになる。

新町は筑前と豊前国府を結ぶ往還と小倉(秋月)街道との交差点であり「拾丁分」「中ノ陣」などの近世地名が付近に残り、明治十五(一八八二)年の小名調(註十二)でも確認できる。旧公図では「中ノ陣」小字が存在していたことがわかる。番田町は、「番役人の所得していた土地故に番田」と伝えられ・・・と『伊田町誌』(註九)にあり、近世地名「中ノ陣」がこれにあたる可能性が高い。「中ノ陣」は現在の田川信用金庫東支店付近で、旧伊田町(一九一四年〜一九四三年)役場

と派出所があった場所であり、橋梁名として残っている。「拾丁分」は日の出町の踏切付近の「拾丁分鉄橋」として残っている。

「陸地測量部地形図」と「伊能大図」を透過させると、ほぼ旧道と一致するが三度前後の補正を要することがわかった。また、「デジタル伊能図」は栄町の谷筋に測量経路を描いているが、先ほどの補正で「陸地測量部地形図」の旧道と「伊能大図」は一致することから、丘陵の上を通過していることが確定した。

つまり、測量経路は『伊田町誌』にある「水茶屋」(推定北川屋敷)の場所(図7)にあった元三井田川鉱業所の中央部を通り、田川簡易裁判所前から田川市役所の丘陵を通過し、朝日寺付近の里道をたどりながら新町へ至る。朝日寺の丘陵上には恵美須社が鎮座するので、『測量日記』の「岩峠、上伊田村枝新町、左恵美須社」の表記と一致する。つまり、小倉(秋月)街道は、栄町の谷筋ではなく、岩峠の丘陵上を通過していたことは明らかである。





写真6 丘陵上に残る街道跡と庚申塔  
(田川市平松町)

(二) 田川市平松の測量経路復元  
三井田川鉱業所の建築前の図面では旧県道が鉱業所渡り廊下付近を通過しており、下図を修正し透過させた「陸地測量部地形図」とも一致した。永末氏の聞き取りとも一致し、地元には「江戸時代の道と井戸」の伝承も確認することができた。さらに旧警察署長官舎敷地が道に沿う。平松町では今まで小倉(秋月)街道とされてきた平松の旧道は明治期のもので、定林寺のある丘陵中腹に小倉道の痕跡が確認できる。約三度の補正を行った透過図と小倉道は、丘陵階段脇の庚申塔(写真6)とも一致し、田川後藤寺駅付近の里道とも一致することから、定林寺丘陵中腹の畑地(写真7)が小倉(秋月)街道であることはきわめて確実性が高い。



写真7 丘陵中腹に残る街道跡  
(田川市平松町)

さらに、平松町での補正図を庚申塔や里道を基点に約三度の補正を行っていくと旧後藤寺町の旧道痕跡が明らかとなった。田川市大黒町恵美須神社神殿裏の祠(写真8)については『地方史ふくおか』第一六二号「伊能忠敬の測量経路「昼休武兵衛」をめぐって」(註十三)ですすでに報告したが、昭和四(一九二九)年に移転した恵比寿社の跡地を公図や聞き取りで検証することができた。大黒町恵美須神社の神殿裏には古い「えびす社」(写真8)の祠がある。玉垣を再利用し土台を形成している。近世のもので風化が著しい。拓本(写真9)を取ると祠の裏には「宝永五年寅」「昭和四年□□」とある。旧玉垣の石材には「飴屋利右エ門」「久野屋治□□」「飴屋久平」等の名称が確認できる。昭和四年に「えびす社」旧跡地から移転した折りの遷座祭の写真が拝殿にある。



写真9 昭和4年移転の拓本  
昭和4年移転後の恵美須神社(神殿・拝殿の裏庭)(田川市大黒町)



縁起では字屋敷に宝永七(一七一〇)年に鎮座し、昭和四年に遷宮したとある。宝永五(一七〇八)年と宝永七年の違いはあるが、伝承、縁起、拓本はほぼ一致する。つまり、大黒町恵美須神社は昭和四年まで存在していなかったことになる。測量隊の昼休の場所は現在の大黒町恵美須神社(図8⑮)付近ではない。  
ちなみに、宝永四(一七〇七)年は東海・南海・南海と三つのトラフが同時に動き富士山が噴火した宝永の巨大地震直後である。香春町にも宝永五年に恵比須の祠が倒壊し移転したという記録が残っている。  
「えびす社」旧跡地の字屋敷は特定できていないが、旧本町三丁目あたりには「蛭子支」と書



かれた電柱が七本並ぶ。旧公図で確認すると西部田川新四国七番札所に隣接する広い敷地がみえる。西部田川新四国の本部十輪院（大任町下今任）所蔵の大正十二年発刊『西部田川新四国寫真帖』に七番札所は後藤寺町三丁目筋にあると説明され、現状の盃状穴のある手水鉢も写っている。この付近が「えびす社」旧跡地（図8⑭）で蛭子宮の可能性が高い。この三丁目筋にはかつて、七番札所塩間屋と並んでおり、蠟燭を商う二村邸（図8⑬）まで道筋が続いていた。二村家当主である二村た

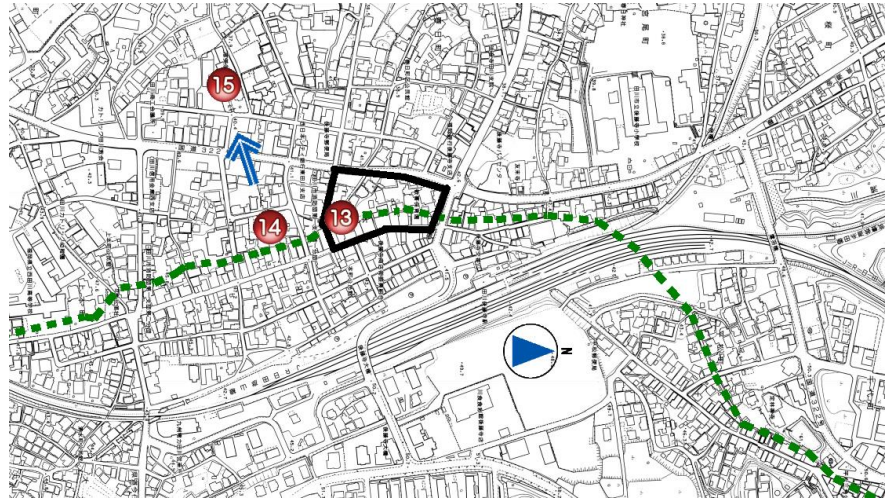


図8 田川市後藤寺の小倉（秋月）街道 田川市基本図 2500 分の 1  
⑬ 推定 二村武兵衛宅 ⑭ 旧えびす社 ⑮ 昭和4年移転後の恵美須神社

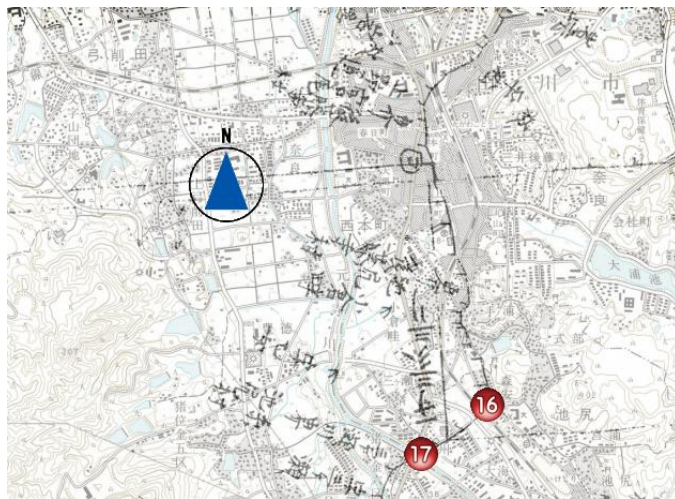


図9 田川市後藤寺の測量経路 ⑯ 森安 ⑰ 三ヶ瀬  
国土地理院 2万5千分1 地形図（田川）と下図の透過図

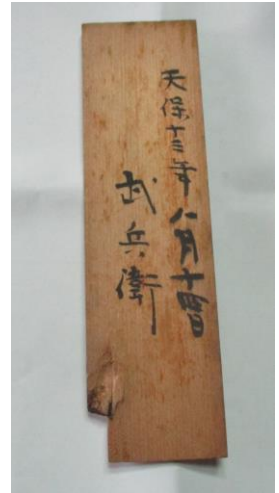


写真10  
二村武兵衛の御位牌裏

ま子さん（大正十三年生、九十九歳）の聞き取りができた。先手・後手の問題はあがあるが、「伊能忠敬さんは家でお接待しました。」との証言を得た。後藤寺町商店街は櫛山で、二村家は邸内に十三の蔵を持ち藩の役目で蠟燭を商っていた。現商店街十数軒分の間口をもつ大きな屋敷であった。当主の名に代々「武」の字を持つという。櫛山から少し下がったところを水路と道が南から北へ貫いて

いたこと、屋敷内にえびす社はなかったことから考えると、天保十三（一八四二）年に逝去された二村武兵衛（にむら ぶひょうえ）が『測量日記』の「後藤寺村、左蛭子宮、昼休武兵衛」に一致すると考えられる。

これにより小倉（秋月）街道の痕跡を現在の後藤寺町アーケイド街より西10mの丘陵中腹に確認することができた。この旧道は水路を伴い、近世初頭の集住化によって後藤寺町が形成されたことと符号する。

地元での聞き取り内容「丘陵上部は櫛山で道はなかった。水路のそばに道があった。」とも一致する。『測量日記』の「昼休武兵衛」は、二村武兵衛であることから近世の後藤寺町の復元も可能性が見えてきた。

森安（川崎町森安）の交差点（図9⑯）は百十度に曲がる特徴的な道路形状で、三ヶ瀬（川崎町池尻）（図9⑰）から田川市猪位金の猪膝宿にかけては下図と地形図のずれは少ない。

ここで、最初の香春宿に戻って北方の金辺峠と採銅所について、国土地理院地形図と下図のずれを検証してみることにした。



写真11 企救・田川郡境石⑱  
（北九州市小倉南区・香春町採銅所）



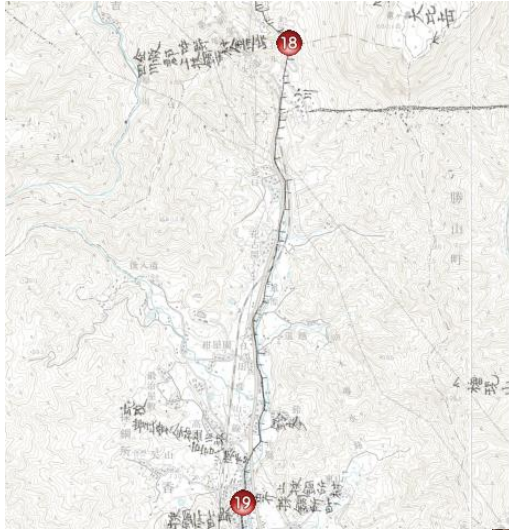


図10 金辺峠から採銅所の測量経路  
⑩金辺峠 ⑨採銅所道標  
国土地理院  
2万5千分1地形図(金田)と下図の透過図



写真12 採銅所の道標  
⑨古宮八幡神社横  
(香春町採銅所)

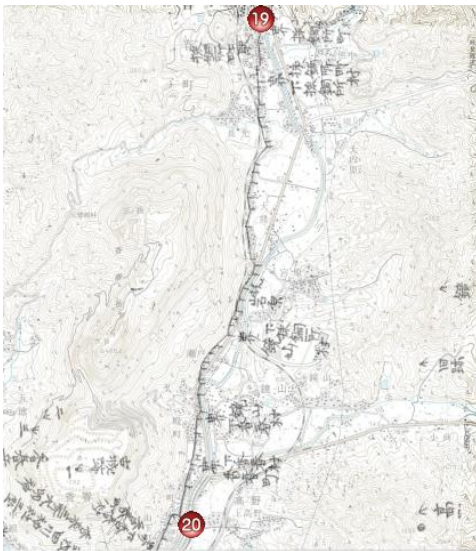


図11 香春町採銅所の測量経路  
⑩札の辻 ⑨採銅所道標  
国土地理院  
2万5千分1地形図(金田)と下図の透過図



写真13 札の辻⑩  
(香春宿鍵型道路形状)

○図10は採銅所の道標から金辺峠  
○図11は香春の鍵型道路形状から採銅所の道標

この二つの図の基点について説明する。

図10の⑩は香春町と北九州市小倉南区の境で、金辺峠には現在「企救・田川郡境石」(写真11)があり石柱に「従是北企救郡 従是南田川郡」と陰刻され、堀割道上部に建てられている。もう一つの基点は図10の里程標⑨で、採銅所の里程標(写真12)は田川郡香春町採銅所にあ

り、高さ一五〇cmで古宮八幡神社の旁らに在る。ほぼ原位置を保っていると考えられている。里程標には「従是香春迄壱里 従是呼野迄壱里四町」とあり、旧呼野宿の里程標に続いている。現状としては旧街道がよく残されている。『測量日記』では採銅所町(駅場)と記載され、下図の採銅所町と上採銅所村の界で道標元位置の妥当性は高く旧街道とよく照合できた。図11の札の辻⑩(写真13)は香春町香春にある典型的な宿場町の鍵型道路形状である。近世の

高札場であり、明治期まで警察署が置かれた重要な場所である。これを基点に採銅所の道標にあわせて下図を修正すると、比較的わずかな修正で一致する。これは大任町や添田町より少ない修正角度であった。つまり、香春町新町からは特異な鍵型道路形状や道標の原位置が確認できるために、距離の修正と一度程度の角度修正をかけることで伊能測量経路を復元する事が可能であった。文化九(一八一二)年と文化十(一八一三)年の二回測量が行われていることにより精度は高いと考えられる。

### 五 おわりに

直方市木屋瀬の下図修正は約二・五度、中間市の下図修正は約二・五度、香春町採銅所の下図修正は約一度、大任町の下図修正は約一度、添田町の下図修正は約一度となるのに対して、香春町下香春から田川市伊田の下図修正は約二・五度、田川市後藤寺から図6⑫までの下図修正は約三度とずれが大きく、田川市猪位金の下図修正は約二度前半と一般的な北部九州のずれの範囲に収まった。もちろんこれは下図修正のための回転角度であつて、磁気偏角の数値ではない。様々な要因の複合的な結果であるのは明らかである。

朝鮮半島南部の山々を方位測定した伊能の『山島方位記』から、辻本元博氏は対馬北西岸の「磁針偏角」を解析したように、田川地方は約三度西偏を考慮する必要があるであろう。香春では香春岳の西麓では西偏、香春岳から東側の行橋市や苅田町では東偏の可能性があることを考えておきたい。香春岳西側付近には磁石岩があり、方位が大きく狂うことで著名である。蝦夷地にあるよう



な磁気異常が存在する可能性も否定できない。筑紫山地の花崗岩類は、地域的なまとまりと化学的特徴から大きく二つに大区分されている。①北部九州主部花崗岩類、②北部九州東部花崗岩類の二つである。①は小倉―田川構造線付近を境にして西側に、②はその東側に分布する。①は磁鉄鉱系、②はチタン鉄鉱系の特徴を示している。こうした化学的特徴がどの程度磁気偏角に影響をおよぼしているかは不明であるが、香春岳付近の「磁石岩」のように方位のずれに大きな影響をおよぼす地点が存在することも事実である。さらに金辺峠の断層で金辺峠から北部と南部は大きく分かれる。

現在、「デジタル伊能図」などを活用すれば手軽に当時の測量経路をたどることが可能となった。しかし、「デジタル伊能図」は完全ではなく、多くの「ずれ」を内包している。この「ずれ」は当時の測量技術「交会法」の誤差、「山島方位記」の見かけの頂上を測量することでの誤差、磁鉄鉱系花崗岩等の地質による誤差、磁気偏角による誤差、山稜や丘陵などの測量誤差を生じさせやすい地形、炭坑開発による地盤沈下など、様々な要因が複合的に重なり合った結果とみるべきであろう。したがって、現地調査を中心に文理学際的なアプローチも含め総合的観点で進めることでより正確な伊能忠敬測量経路や小倉（秋月）街道の復元を試みるができると考えている。

注記  
註一 秋月街道ネットワークの会（二〇〇一）『秋月街道をゆく』海鳥社

註二 福岡県教育委員会（二〇〇三）『秋月街道』福岡県教育委員会

註三 佐久間達夫（一九九六）『伊能忠敬の長崎街道測量』（附图）は、伊能忠敬記念館所蔵 国宝 地図・絵図類三六一「自筑前国夜須郡下秋月村至豊前国企救郡新村下図」のコピー

註四 アメリカ議会図書館所蔵「伊能大図第一七八号」（小倉）

註五 伊能忠敬記念館所蔵『山島方位記』

註六 辻本元博（二〇〇五）『山島方位記』による

19世紀初頭の磁針偏角と伊能図の朝鮮の山々の解析』四三巻 Supplement 号

註七 原田種純（一九七六）『伊能忠敬 測量日記』九州ふるさと文庫刊行会

註八 永末十四生（一九五四）「番田ごうらの流れに生きて」『郷土田川』一、田川郷土研究会

註九 和田泰光（一九三〇）『伊田町誌』筑豊之実業社

註十 「デジタル伊能図」（@東京カートグラフ イック・河出書房新社二〇一五）

註十一 筑豊石炭礦業史年表編纂委員会（一九七三）『筑豊石炭礦業史年表』田川郷土研究会

註十二 伊東尾四郎（一九七二）『福岡縣史資料第十輯』名著出版

註十三 中野直毅（二〇一七）『地方史ふくおか』第一六二号「伊能忠敬の測量経路「昼休武兵衛」をめぐる」福岡県地方史研究連絡協議会

#### 主な参考文献

山本光正（一九九一）「近世及び近現代における道標の成立と展開」『国立歴史民俗博物館研究報告第三二集』国立歴史民俗博物館

松尾昌英（一九九七）『伊能大図による「筑前長崎街道の追跡」』みき書房

村上利男（二〇〇〇）「香春・秋月街道を歩く」『地方史ふくおか第一〇五号』福史連

山内公二（二〇〇〇）「中津街道ノート」『地方史ふくおか第一〇五号』福史連

伊能忠敬研究会（二〇〇二）『伊能圖』武揚堂

近藤典二（二〇〇五）「伊能忠敬と九州測量」『地方史ふくおか第一二五号』福史連

福島日出海（二〇〇五）「秋月街道という名称と旧八丁峠の使用と石畳」『地方史ふくおか第一二五号』福史連

仲江健司（二〇一三）「筑前・豊前の国境石」『地方史ふくおか第一二五号』福史連

山本光正（二〇一三）「海道・街道と交通路の名称」『通信総合博物館研究紀要第四号』通信総合博物館

山内公二（二〇一三）「豊前国に残る郡境標柱」『地方史ふくおか第一二五号』福史連

渡辺一郎（二〇一三）『伊能図大全』河出書房

#### 【参考】『測量日記』文化十年十月

十日 曇又小晴、筑前国嘉麻郡大隈町（先手六ツ前、後手六ツ後出立）。後手我等、今泉、門谷、保木、佐助同所より初：豊前国田川郡小倉領猪膝村、字境谷、枝田尻、枝堂原、猪膝町駅場（本陣大庄屋猪膝平四郎）、〇イ印に繫。（即昼休）：先手永井、箱田、嘉平治、甚七、猪膝町（駅場）〇イ印より初（左に一向宗密厳寺、石橋二間）、右中津道（追分、中津へ十三里）、左天満宮の社、枝小園、金国村、系村枝新所（系川渡九

間)、字三ヶ瀬、池尻村(三ヶ瀬川土橋十五間)、枝盛安、後藤寺村、左蛭子宮(昼休武兵衛)。宮尾村(左上野道追分)、枝平松(小川土橋中一間計)、岩峠、上伊田村、枝新町、左恵美須社(伊田川板橋二十間、川上彦山縁川也、川下は筑前遠賀川…)、下伊田村枝鉄砲町、鉄砲坂、野陣小休。新所村枝浦野(新所川中七間)、下香春村(香春川中十四間、左上野通筑前追分あり)、枝新町①印迄二里三十一町一十八間。此より香春の神社へ打上、…又①印初、豊後日田道追分(申七月十四日打止置碑に)繋、…此より小倉道を測。香春町(左一向宗善竜寺、左に問屋場左一向宗浄妙寺、左に山伏千手院、左浄土宗光願寺)、止宿測所前打止。…香春町着。止宿(本陣米屋源右衛門、脇博多屋勘助。此夜曇少測)。

十一日曇天、六ッ時前後、香春町出立。手分後手我等、今泉、門谷、保木、佐助。香春町、止宿測所より初。下香春村(左に香春神社旅所あり)、枝殿町、枝高座石寺谷、鏡山村、…枝瀬戸、下採銅所村、枝大熊、採銅所町駅前、上採銅所村、左に古宮八幡社、…枝天屋金辺峠、企救郡呼野村駅前(本陣原幸右衛門前、即昼休)。先手の初①小印に繋。…先手永井、箱田、嘉平治、甚七。小倉領豊前企救郡呼野村駅前①小印初。…徳力村駅前(昼休庄屋勘左衛門) …城野村、新村、三方追分(未正月十七日残置碑に)繋。九州測量済。

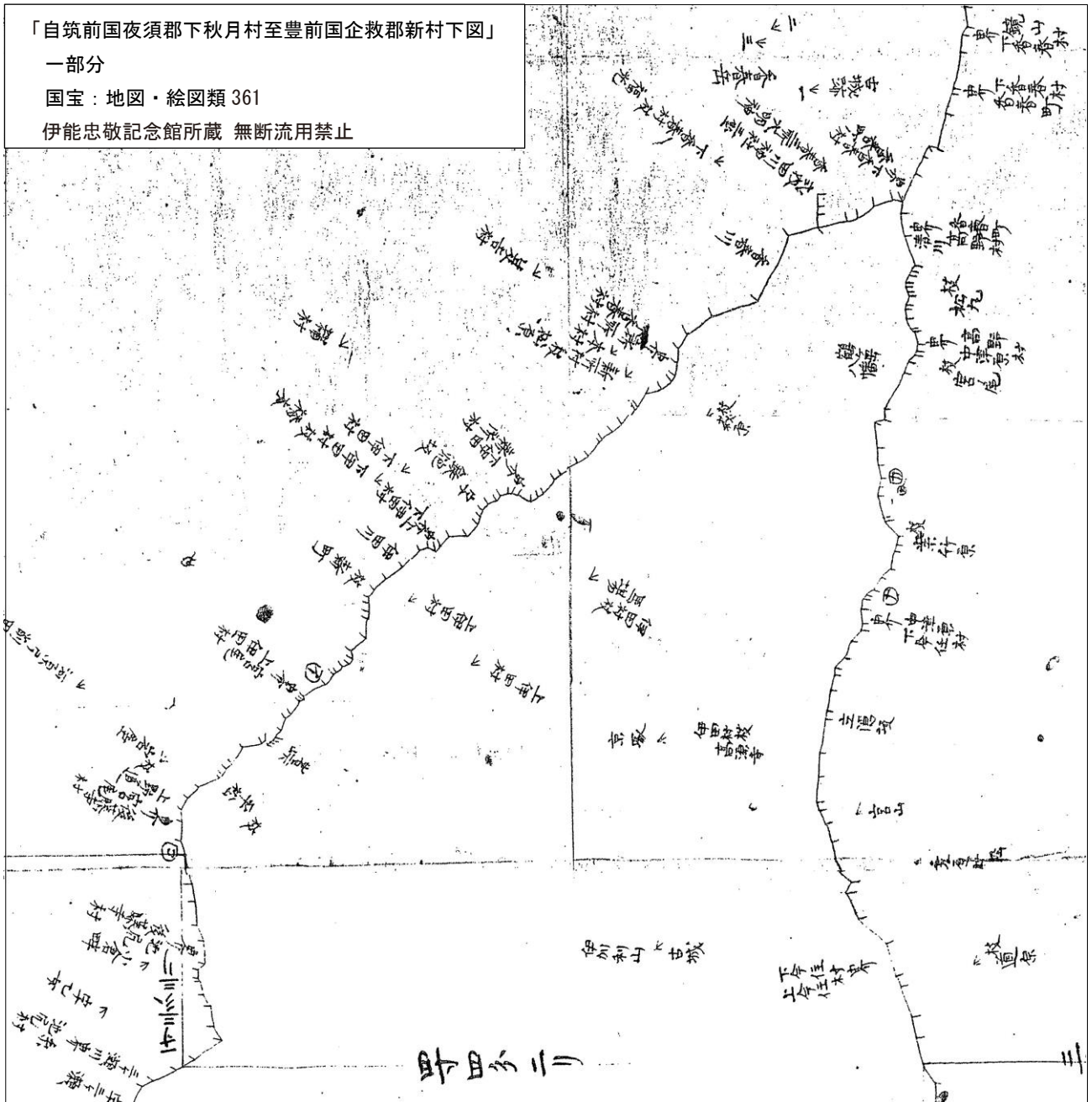
※ ( ) は割注の部分を示す。

「自筑前国夜須郡下秋月村至豊前国企救郡新村下図」

一部分

国宝：地図・絵図類 361

伊能忠敬記念館所蔵 無断流用禁止





# 江戸府内第一次測量の記録(十)

文化十二年二月十五・十六日の『日記』

玉造 功

図1に朱線で加筆したように、十五日の測量は東海道に並行した海岸線の(大)印から(七)印までである。

江戸府内測量初日の二月三日は高輪大木戸から日本橋までの東海道測量であった。その測量では、日本橋に向かう前に、東海道からすぐわきの海岸まで十五以足らずを測量して(大)印を残しておいた。また途中の本芝三丁目では東海上上の(一)印から海辺の(四)へ横切り測量をしておいた。



図1 『大日本沿海輿地図』第90図に加筆

高輪の大木戸として名高いが、図2のように木戸は撤去されてなくなり、街道の左右に土手石垣が、山側に高札場が残っているだけである。

同十五日 晴天 武所 荏原郡 惣名芝 字車町之裏 大印始 沿海測量 石垣下を行

同十五日 晴天 武州 荏原郡 惣名芝 字車町の裏 當月三日残 (大)印始め 沿海測量 (石垣下を行

芝田町九丁目の裏 同八丁目 左千葉 太郎兵衛 同七丁目 左細川越中守 抱屋鋪 同六丁目 左延建寺 裏

芝田町九丁目の裏 同八丁目 左千葉 太郎兵衛 同七丁目 左細川越中守 抱屋鋪 同六丁目 左延建寺 裏

芝田町五丁目 左松平紀伊守 抱屋鋪 同四丁目 左紀伊殿 抱屋鋪 左松平阿波守 抱屋鋪 同三丁目 同二丁目

芝田町五丁目 左松平紀伊守 抱屋鋪 同四丁目 左紀伊殿 抱屋鋪 左松平阿波守 抱屋鋪 同三丁目 同二丁目

芝田町五丁目 左松平紀伊守 抱屋鋪 同四丁目 左紀伊殿 抱屋鋪 左松平阿波守 抱屋鋪 同三丁目 同二丁目

芝田町五丁目 左松平紀伊守 抱屋鋪 同四丁目 左紀伊殿 抱屋鋪 左松平阿波守 抱屋鋪 同三丁目 同二丁目

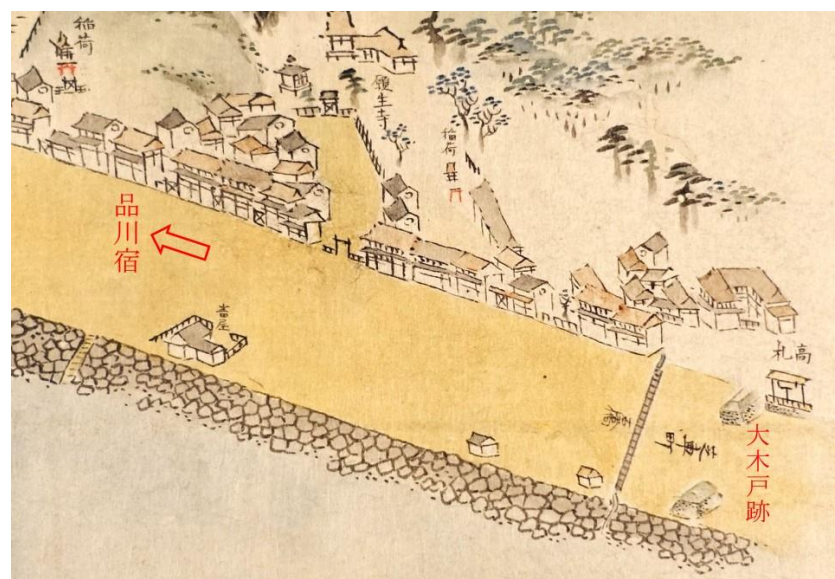


図2 『東海道分間延絵図』に加筆

図2は、伊能忠敬の全国測量と同時期に、幕府の道中奉行所が七年をかけて五街道や主な脇街道を実測して作製した『五海道其外分間見取延絵図』の内の『東海道分間延絵図』の巻頭の部分である。各街道の実態を把握するために街道の距離については一八〇〇分の一の縮尺で作製したので、高札場、石橋、番屋、木戸、本陣や一里塚など情報量が多い。



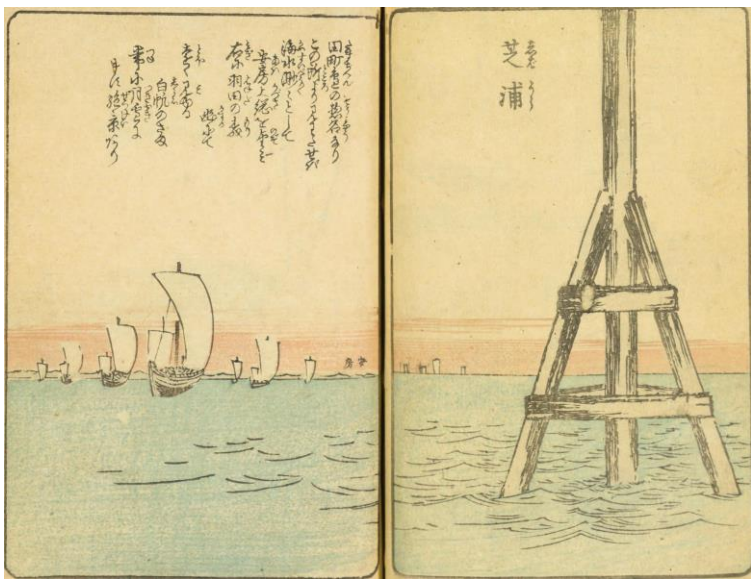


図3 芝浦 広重『絵本江戸土産 第二編』

・沿海測量、石垣下を行…日記の最初に「石垣下を行」と記されているが、車町や田町の各町内が幕府に提出した『町方書上』によると海岸

・惣名芝…『御府内備考』は「芝は芝浦などと呼びて古き世よりの名なり」と記し、今は芝口町から車町までの総称であるとする。  
 図3では芝浦について「田町辺の惣名なり。この所より見わたせば海水渺々として安房上総を望み、右に羽田の森幽にて、遠く見ゆる白帆のさま、常に月雪にます絶景あり」と記す。  
 図中の航路表示の濤杭を享保四年に芝金杉沖から神奈川沖まで九基設置した。経費の三百二十三両は幕府と廻船問屋が折半した。

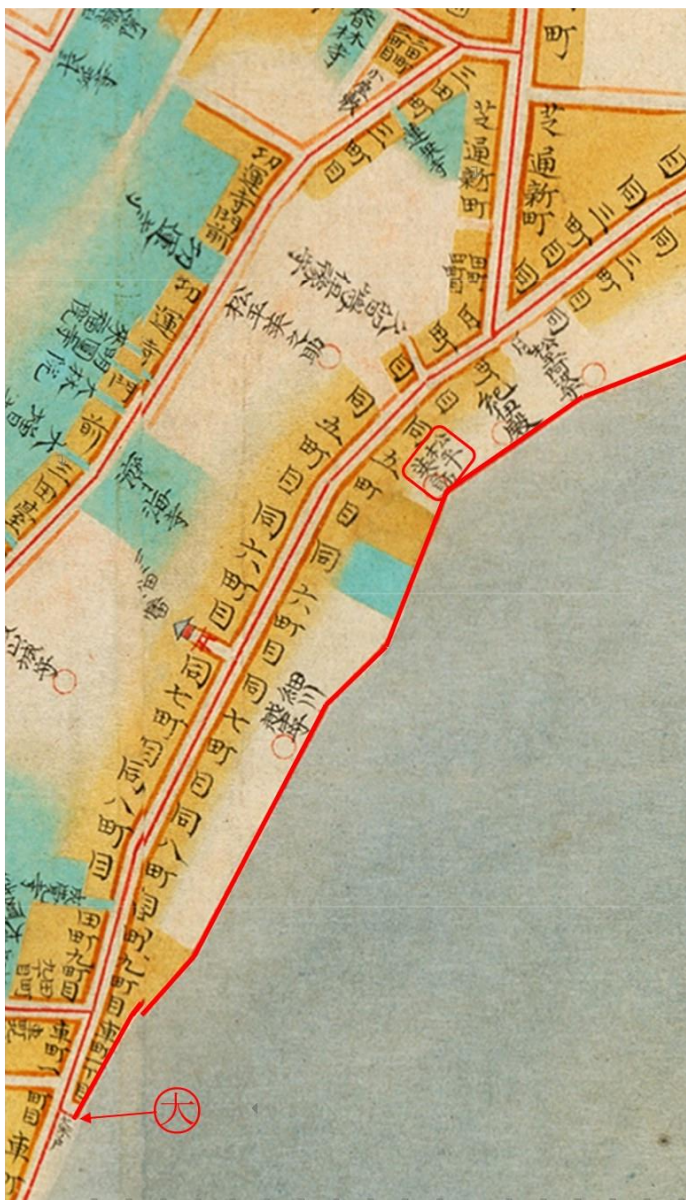


図4 『江戸実測図(南)』に加筆

線には高さ一丈から一丈三尺の護岸の石垣が造られていた。この日の仕事は図2の四ヶ所の石垣を波打ち際に降りるところから始まったわけである。なお、水深について、『町方書上』によると、「小汐の節」で石垣際の深さは五、六寸、潮が引くと干潟となると報告している。『日記』には、昼食について「舟中昼休」とあるが、「船中引繩」とは記していない。干潟の上なのか、海水につかっただけの測量であったのだろうか。  
 ・千葉太郎兵衛…仙波太郎兵衛のことであろう。同時代の史料においても仙波太郎兵衛を千葉太郎兵衛と記しているものがある。仙波太郎兵衛は家業の牛車による運送業から別家して金融業に転じ、大名貸で江戸有数の豪商となった。寛政の改革においては、江戸の富商十人が幕府

の勘定所御用達を命ぜられたが、「芝田町八町目家持仙波太郎兵衛」はその一人であった。天保の大飢饉では幕命を受け、大坂や新潟で米を大量に買い付けて江戸に送ったが、それが大塩平八郎の乱や生田万の乱の引き金になった。  
 ・松平紀伊守…測量時点では『日記』の記載の通り、丹波亀山藩の五代藩主松平紀伊守信志の下屋敷であったが、文化十三年に代替わりがあり、幼児の松平英之助が家督を継いだ。図4では情報を更新している。  
 ・抱屋舗…上屋敷、中屋敷、下屋敷はその役割による区分で、多くは幕府から貸与された拝領屋敷であった。拝領屋敷に対して、抱屋敷は百姓や町人から土地を購入したものであり、代官などの土地の領主に対し年貢などを負担した。



左  
薩州抱屋鋪 同一町目 本芝四町目 左鹿嶋 豐嶋郡 (左横町本通りへ出る小路) 本芝三町目  
大神宮 又前同断

左  
薩州抱屋鋪 同一町目 本芝四町目 左鹿嶋 豐嶋郡 (左横町本通りへ出る小路) 本芝三町目  
大神宮 又前同断

當月三日残す  
口印に繋ぐ 一十二町二十四間 本芝二町目 同一丁目 左真鍋若狭守屋鋪 金杉浜町

當月三日残す  
口印に繋ぐ 一十二町二十四間 本芝二町目 同一丁目 左真鍋若狭守屋鋪 金杉浜町

海邊 左松平相模守屋鋪 金杉川尻中 舟中昼休 左入江口を斜に渡る 巾二十七間  
左丹羽加賀守 舟中昼休 斜に渡る 巾二十七間

海邊 左松平相模守屋鋪 金杉川尻中 舟中昼休 左入江口を斜に渡る 巾二十七間  
左丹羽加賀守 舟中昼休 斜に渡る 巾二十七間

左關但馬守屋鋪 宇田川町の浦打止め印を残す 一十七町 沿海惣測 二十九町三十八間 八ツ時頃掃宿

左關但馬守屋鋪 宇田川町の浦打止め印を残す 一十七町 沿海惣測 二十九町三十八間 八ツ時頃掃宿

・薩州抱屋鋪：図4の松平豊後守（薩摩藩主第十代藩主島津斉興）の屋敷である。『御府内備考』によると、この抱屋敷は九百八十一坪を入手したことからはまる。沽券地（売買可能な土地）であり、年貢、七分積立金（窮民救済にあてる積立金）、町役銭（町人に課せられた負担金）などを町側のルールに従って払っている。さらに隣接する屋敷地を買い増し、屋敷の海側を埋め立てることで、敷地五千坪余りを拡大したが、その部分も年貢地となっている。図5の左側に薩摩藩抱屋敷の東端が描かれているが、海に向かって忍び返しのような物が突き出している。

・鹿島大神宮：鹿島社までは石垣の下を測量してきたが、本芝町は漁師町でもあるので、網干場の浜辺を進むことが出来た。



図5 『江戸名所図会』から薩摩藩抱屋鋪・鹿島社・網干場

・当月三日残す口印に繋ぐ：二月三日の『日記』には、東海道の本芝三町目四辻に印を残したあと、「是より海辺打出し、印を残す。メ外四十八間」と記している。  
・真鍋若狭守屋鋪：真鍋は間部の誤記で、図6の間部鉞之進が正しい。越前鯖江藩第七代藩主で幼名鉞之進、成人後の間部詮勝は下総守や侍従に叙任され、幕末期には老中として安政の大獄を引き起こした。



・金杉浜町：この日の測量では最後の町場であり、護岸の石垣が途切れる砂浜である。種々の小魚が特産なので里俗として雑魚場と呼ぶ場所があると『町方書上』に記されている。



・松平相模守：図6の松平因幡守が正しい。鳥取藩第八代藩主池田斉稷は因幡守を名乗ったが、第三代から第七代までは代々相模守を名乗っていたための誤記か。なお、池田家、

鳥津家など有力外様大名は「松平」姓が与えられ、公的には松平を使用する。鳥取藩下屋敷は一万七千五百坪余あり、図7を見ると、水門や金杉川尻（河口）が確認出来る。『鳥取藩史 第2巻』によると、「海地を拝領せられ、之を埋出し宮築有りしもの」とあるように、幕府は海辺の浅瀬を大名に拝領地として与えて埋め立てさせている。「海に臨み



図6 『江戸実測図（南）』に加筆

て眺望佳絶」ということで隠居した前藩主などが居住した。図7には築山や桜も描かれている。

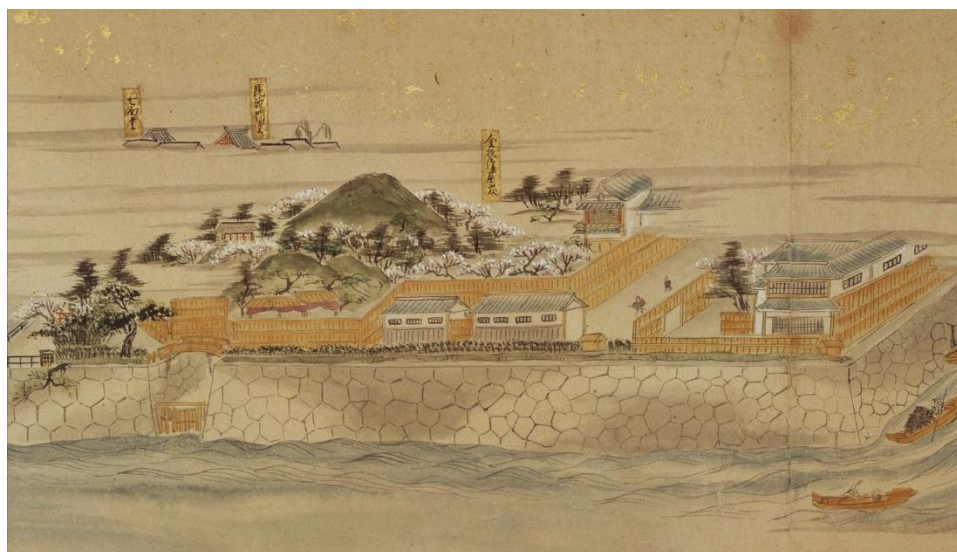


図7 鳥取藩下屋敷 『浜御殿より品川新宿迄江戸往還道絵巻』から

・丹羽加賀守：図6の左京大夫が正しい。丹羽長祥は陸奥二本松藩第八代藩主。大久保安芸守屋敷：大久保忠貞は相模小田原藩の第七代藩主。忠貞は安芸守を名乗った時期もあるが、この測量の頃は図6の加賀守が正しい。





図8『大日本沿海輿地図』第90図に加筆

二月十六日は前日に続いて⑦印から測量を再開した。浜御殿から築地の海岸線をへて⑧印の佃島への渡口までの測量である。尾張藩、松平越中守（白河藩）、松平安芸守（広島藩浅野家）の下屋敷の海側を測量し、昼食はこの日も船中となった。堀田相模守（佐倉藩堀田家）中屋敷を過ぎると町家となり、路上の測量となった。更に十七日の測量の準備として佃島に渡り⑨印を残しておいた。

・桑山五兵衛：『御府内沿革図書』等で確認すると、五兵衛ではなく図10の猪兵衛が正しい。文化十一年の武鑑では桑山猪兵衛は二千石の旗本で御槍奉行を勤めていた。

・浜殿：浜御殿ともいう將軍家の別邸であり、現在の浜離宮恩賜庭園である。『京橋区史』によ

（築地川尻巾十八間  
舟中昼休

（左堀田相模守屋鋪  
南本郷町という左片町

上柳原町

左横町也

（左上柳原町。南飯田町  
右南飯田町。又上柳原町

築地川尻巾十八間  
舟中昼休

左堀田相模守屋鋪  
南本郷町云々九斤町

上柳原町  
左横町也

（左上柳原町。南飯田町  
右南飯田町。又上柳原町

（大納言様御乗船場  
石垣北角上に御船役所有り

新橋川尻  
渡巾 此入江四町ばかり  
三十四間

左  
（尾張殿  
抱屋鋪漆

（入江口の上に橋有り左松平  
越中守屋鋪 水門

（左松平  
安芸守屋シ  
水門

二月十六日 晴天

（宇田川町裏  
昨日打止め

⑦印始め

（沿海測量  
左入口奥 桑山五兵衛屋鋪

（左浜殿下添を行  
水門 御乗船場

二月十六日晴天  
宇田川町裏  
昨日打止め

⑦印始め  
沿海測量  
左入口奥 桑山五兵衛屋鋪

（左松平  
安芸守屋シ  
水門

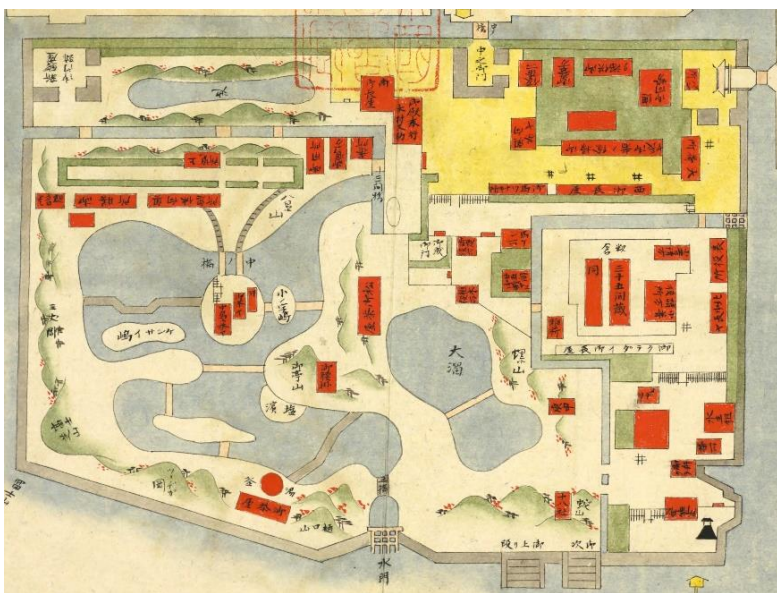


図9『浜御殿苑池指図』

ると約六万五千坪。『御府内備考』は「此御殿地は昔兼葭など生ひ茂りて、御鷹場に用ひられし処なり」と記す。その後、將軍家の別邸となり、家々の頃にほぼ現状のように整備された。『日記』や図9の「水門」は汐入の池に海水を引き入れるためのものである。「御乗船場」は將軍が御座船の天地丸に乗船する場所。図9では「御上り段」と、「大納言様御乗船場」は將軍家世子の乗船場で「御次」と記している。

・御船役所：五人いる御船手頭の一人である吉江左門の御役屋敷と船番所で、図9の右下角の部分。見張りの櫓も描かれている。



図10 『江戸実測図(南)』に加筆



・尾張殿抱屋舗：抱屋敷ではなく幕府から拝領した下屋敷で、尾張藩は蔵屋敷として利用した。二万七千二百五十八坪と広大な敷地であるが、『築地地区の蔵屋敷』によると邸内中央部には面積の過半を占める小判型の大池があり、海と通ずる水路があつて、船の出入に便利であつたという。図10にも海からの水路と池のようなのが描かれている。江戸藩邸のために国元から船で運送される物資(米穀・材など)を納めるだけでなく、尾張藩の専売であつた瀬戸物が保管され売り捌かれた。『京橋区史』によると文政二(一八一九)年には一万一千六百両に達したという。

・松平越中守屋敷：松平定信の下屋敷。幕府は寛政四年に將軍家齊が出た御三卿の一橋家の下屋敷のうちから一万七千坪を定信に下賜した。そこに汐入りの池泉回遊式庭園を築き、將軍家から拝領するという恩に浴したという意味で浴恩園と名付け、文化九(一八一二)年に隠居すると浴恩園に隠棲した。浴恩園は堀田正敦、松浦静山や文人たちとの交流の場として知られ、多くの和歌や漢詩、絵画が作られた。

定信が浴恩園で暮らした十七年間の日記が『花月日記』



図11 星野文良『浴恩園真景』から、定信の隠居所「千秋館」

である。測量当日の二月十六日の日記には、いとよく晴れぬ、梅苑いくたびか散歩逍遙と記すだけである。測量隊のことは定信の耳には入っていないかつたのかもしれない。

浴恩園は文政十二(一八二九)年に大火にみまわれ、その二ヶ月後には定信も死去した。

・南本郷町、上柳原町、南飯田町：築地は元々埋立地の意味であるが、明暦の大火後にさらに埋め立てが進み、西本願寺や武家地が造成された。その一角には町屋も形成された。南本郷町は本郷の湯島四丁目の代地であつたことから南本郷と名付けられた。



又南飯田町 又横町 又言寒サ橋 明石橋 渡巾十間 鐵砲洲 又横町之海岸 石置場 又横町  
右辻番 又横町 又言寒サ橋 明石橋 渡巾十間 鐵砲洲 又横町之海岸 石置場 又横町  
割れあり

又南飯田町 (左横町) 明石橋 (又言寒サ橋) 渡巾十間 (鐵砲洲) 明石町 (左横町の海岸) 石置場 (左横町也)

大明石町 十軒町 大横町 大洲采女守揚場 船松町二丁目 佃島渡口打止め 沿海  
右十軒町 大横町 大洲采女守揚場 船松町二丁目 佃島渡口打止め 沿海  
松印を残す

(左明石町) 十軒町 (左横町) (左横町) (左細川采女守揚場) 船松町二丁目 (佃島渡口打止め) 沿海  
右十軒町 (左横町) (左横町) (十五間ばかり引込屋舗あり) (松印を残す)

二十四町三十二間 是より佃嶋へ引渡す 物測 二十六町三十五間丈 九ツ半頃帰宿  
外横物あり 是より佃嶋へ引渡す 物測 二十六町三十五間丈 九ツ半頃帰宿

二十四町三十二間 (是より佃嶋へ引渡す) 瀬戸巾一町五十六間 物測 二十六町三十五間丈 九ツ半頃帰宿

測量隊は明石橋を渡って、明石町、十軒町、船松町へと鉄砲洲の町場を北上した。西側は武家屋敷が広がり、東側は隅田川河口の河岸場という細長い町場である。船松町二丁目と一丁目境界にある佃島渡口に(松)印を残し、さらに翌日の佃島測量に向けて佃島に渡り、(ツ)印を残した。この日の測量区間は短く、午後一時頃には帰宿した。

・明石町：図12、図13に描かれているように鉄砲洲の先端に位置する、延長二十九間、裏行十五間という極めて小さな町である。明石橋のたもとには丸太が山積みされ、石置き場がある新開の埋立地であった。ところが明治二(一八六九)年に築地鉄砲洲の外国人居留地となり、青山学院、明治学院などのミッションスクール発祥の地として、また鑄木清方の『築地明石町』により、独自のイメージをもつ町名となった。

・鉄砲洲：本湊町から明石町あたりの総称。鉄砲洲の名前の由来について『御府内備考』は、かつて大筒の試射場であったため、砂洲が細長く鉄砲の形をしていたことによるという説は誤りとしている。

・細川采女守(正)揚場：熊本藩の支藩である肥後新田藩第八代藩主細川采女正利愛の上屋敷。二月十三日の『日記』でも肥後新田藩の中屋敷について「細川采女守」と誤記していたが、今日の上屋敷については「守」と「正」という正



図12 『江戸実測図(南)』に加筆

誤両方を併記している。揚場は物揚場ともいい、船から荷物を積み降ろしする場所で、細川家専用の物揚場がおかれていた。

・佃島渡口：佃の渡船は隅田川の最後の渡船として昭和三十九(一九六四)年まで運行した。



百万都市江戸で消費される米や諸物資は舟運によって全国各地からもたらされた。経路としては、諸国廻船による海上輸送のルートと、高瀬舟による利根川・荒川水系のルートからなる。菱垣廻船や樽廻船などの大型の諸国廻船は水深の深い品川沖に停泊し、中型の廻船は図14のように永代橋から佃島までの隅田川河口の江戸湊に停泊した。積荷は茶船（瀬取船）と呼ばれる小舟に積み替えて江戸市中の堀川沿いの物揚場や河岸へと輸送された。五大力船は喫水が浅い中型帆船で、木更津など上総、安房の各地と江戸湊の河岸場を結んだ。

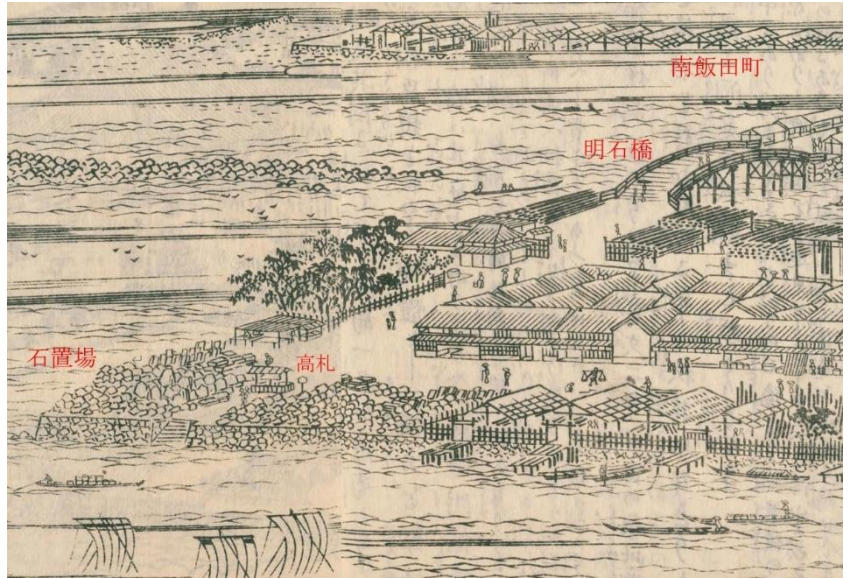


図13 明石町 『江戸名所図会』に加筆

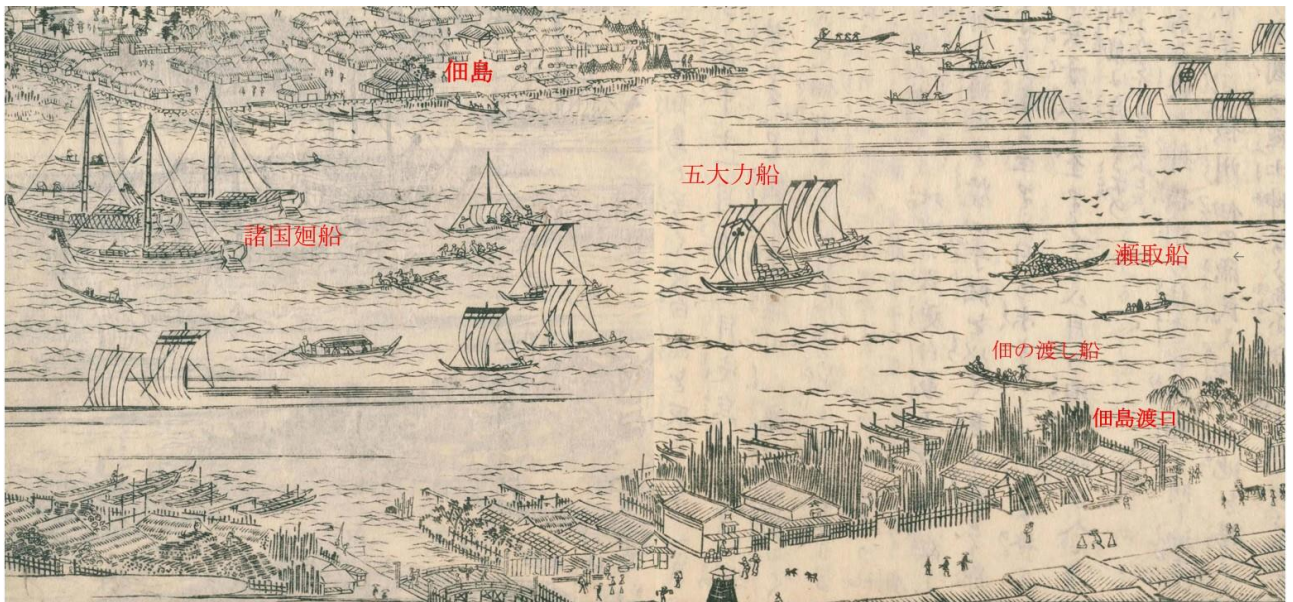


図14 江戸湊 『江戸名所図会』に加筆

【図版の出典】

- ・『日記』の図版は伊能忠敬記念館に架蔵されている写真帳による。無断流用禁止。
- ・『江戸実測図(南)』は国土地理院ウェブサイト上の古地図コレクションによる。

- ・図1、2、3、5、8、9、11、13、14は国会図書館デジタルコレクションによる。
- ・図7は江戸東京博物館デジタルアーカイブズによる。

【参考文献】 画像を公開しているウェブサイト

- ・国立国会図書館デジタルコレクション (国会)
- ・国立公文書館デジタルアーカイブ (公文書)
- ・『町方書上』(国会)
- ・『御府内備考』(国会)
- ・『新編武蔵風土記稿』(公文書)
- ・『江戸名所図会』(国会)
- ・『御府内沿革図書』(国会)
- ・『文化武鑑』(文化十一年) (国会)

【参考文献】

- ・『芝区誌』(一九三八)
- ・『京橋区史』(一九三七)
- ・『東京市史稿 遊園篇第二』(一九二九)
- ・『鳥取藩史 第2巻』鳥取県編(一九七〇)
- ・『花月日記 第2』八木書店(二〇二二)
- ・吉田伸之『都市 江戸に生きる』(岩波新書、二〇一五)
- ・小澤弘『館蔵『浜御殿より品川新宿迄江戸往還道絵巻』について』『江戸東京博物館紀要』第4号(二〇一四)
- ・安藤菊二『築地地区の蔵屋敷』『京橋図書館 郷土室だより』第8号(一九七五)
- ・中島卯三郎『濱離宮と其庭園に就て』『造園研究』第四輯(一九三二)



「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」連載第三十四回

伊能忠敬銅像報告書「伊能忠敬の足跡」の改訂増補版

【第八次測量】（九州第二次） 高山く松本く飯山く富岡く江戸

自 文化11年4月17日 至 文化11年5月23日

監修 渡辺一郎 編著 井上辰男

宿泊日・旧暦

（西暦）

宿泊地

現・市町村名

宿泊宅

特記・天体観測

大図番号

文化11年4月

【本隊】  
(1814)

17					
【支隊】	支隊昼休	（ 5）	同	同	同
古川二ノ町	広瀬町村	高山三ノ町四丁目	同	高山市	本陣鍵屋与作 杉坂屋甚右衛門
同	同	同	同	同	同
飛騨市	高山市	高山市	同	同	同
杉崎屋彦兵衛	一向宗西念寺	杉崎屋彦兵衛	杉崎屋彦兵衛	杉崎屋彦兵衛	杉崎屋彦兵衛
<p>手分。【忠敬他四名】灘郷高山三ノ町逗留測。同所上向町中橋欄干柱より越中街道を測、三ノ町内、向町字上向町、左国分寺追分にコ印を残。此より国分寺へ打上げ、七日町村の内真言宗古義医王山国分寺、本堂薬師如来。コ印より、向町内字下向、右鍛冶橋、同郷七日町村、同桐生村、神通川端玉印を残。同郷本母村、神通川松本橋、大八賀郷松本村川端古印に繋。又桐生村玉印より、神通川板橋、大八賀郷三福寺村、字合崎、高山二ノ町内字大新町、一ノ町に五印を残。此より八幡宮へ打上げ、三福寺村内八幡八幡宮、別当高野山丹生寺末真言宗古義八幡山長久寺。</p> <p>又五印より、二ノ新橋板橋、南詰十印を残迄測る。二ノ町横町通、三ノ町右止宿鍵屋測所を歴て中橋通三辻三印に繋。此より野麦通、信州道を測、一ノ町通に四印を残。即野麦道追分、左旗鎌道追分、一ノ町内字空町、綿橋、字島河原町、高山一ノ町村・江名子村界に打止。又一ノ町追分四印より、同町内に目印を残、此より照蓮寺へ打上げ、東本願寺掛所輪番、光耀山照蓮寺、本堂十八間四面。寺中（不遠寺、了泉寺）。目印より、右一向宗勝久寺、二ノ新橋南詰十印に繋終。江戸書状を出。</p> <p>【永井他三名】向古河町測。高山町出立。大野郡大八賀郷松本村追分より古川道測、字松本、三枝郷下切村字保木、字向田、字新田、小八賀川板橋、吉城郡広瀬郷三河村、上広瀬村、字和田、字流、右舟津道・左古川道追分に繋。字安成寺、広瀬町村、古川郷古川町方村枝大野、左神通川中に一周十三町計島、枝上町分、是重村、又古川町方村、三ノ町内字向町、吉城川橋、左二ノ町本通、右に一向宗本光寺、一ノ町本通制札に向左角に繋。右横町一向宗円光寺、又二ノ町通人家の限、右側の人家に向、左柱に繋。</p>					
一一二	一一二	一一二	一一二	一一二	一一二

22		21		20		19		18			宿泊日・旧暦	
(10)	(9)	先手昼休	後手昼休	(8)	後手昼休	(7)	先手昼休	後手昼休	(6)	支隊昼休	本隊昼休	(西暦)
同	奈川村字寄合渡	奈川村枝川ノ浦	野麦峠	野麦村	上ヶ洞村	中之宿	黍生谷村	黒川村	甲村	高山町	山口村尾上峠	宿泊地
同	同 松本市	長野県松本市	同 高山市	同 高山市	同 高山市	同 高山市	同 高山市	同 高山市	同 高山市	同 高山市	同 高山市	現・市町村名
同	本陣善之丞 組頭平吉 問屋清七	組頭清兵衛		本陣半六 名主市三郎 久左衛門	一向宗東派 仏頂山大徳寺	名主忠右衛門 百姓所左衛門 百姓仁右衛門	問屋太郎作	一向宗東派西教寺	問屋市郎兵衛 甲山円城寺	一向宗東派 杉崎甚右衛門	四郎兵衛	宿泊宅
<p>雨天逗留。</p> <p>【忠敬他四名】大野郡高山町出生。一ノ町村・江名子村界より、式内荏名神社、当時稲置明神という、字下江名子、字保木、字上江名子、字岩野、大八賀郷山口村（上り駅場）、字下山口、字上山口、山口谷、尾上峠、益田郡阿多野郷辻村、見座村、阿多野川大橋、字橋爪、字添塚、甲村、甲谷小流、字森下、甲本村甲印に打止。【永井他三名】古川字二ノ町出生。無測、高山町昼休、それより甲村へ着、両手出会。</p> <p>甲村出生。手分。【後手】同所甲印より、万石村、万谷石小流、字薬師堂、上見村、大広村、黒川村、梶ヶ洞谷小流、小瀬ヶ洞村字橋場人家前小印に繋終。それより無測、中之宿村着。</p> <p>【先手】益田郡阿多野郷小瀬ヶ洞村字橋場小印より、秋神川大輪橋、字岡田、右に加茂社あり、黍生谷村（駅場）、字赤坂峠、字定塚、定塚川、字猪ノ鼻峠、猪鼻村、猪鼻川板橋、字橋家、字地蔵峠、中之宿村（駅場）、左八幡宮社あり、止宿前に打止。恒星測定</p> <p>中之宿出生。手分。【後手】同所止宿前より、下向村、日影村、道川谷小流、上ヶ洞村、砂場橋、口留番所、黍生橋、字小長谷、先手初谷印に繋。【先手】上ヶ洞村字長谷谷印より、阿多野郷村、棚川同橋、右福島道追分、字寺ヶ坂峠、野麦村、濁川板橋、野麦川板橋、同川野尻橋、野麦本村（馬駅）止宿入口に打止。</p> <p>野麦村一同出生。手分。【後手】同所止宿前より、蛭ヶ谷沢板橋、戸沢谷小流、野麦峠、道端に消残の雪あり、同峠を少し下り国並領界（飛州益田郡高山支配阿多野庄野麦村、信州筑摩郡尾州殿領木曾庄奈川村）に繋。昼休野麦峠。</p> <p>【先手】飛州益田郡野麦村、信州筑摩郡奈川村界より、深沢川板橋、巢山川板橋、月夜沢川、枝川ノ浦、字丁子、本谷川板橋、枝神谷、本谷川板橋、栃洞川同、奈川本村（駅）字寄合渡、右藪原道・左善光寺道追分打止ヨ印を残。</p>												
一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一一二	一一二	一一二	大図番号



2 5		2 4		2 3		宿泊日・旧暦
【支隊】	支隊昼休	( 1 3 )	本隊昼休	( 1 2 )	昼休	(西暦)
村井宿	原新田村	松本城下本町	郷原町	洗馬宿	贄川宿	宿泊地
同	長野県松本市	同	同	同	同	現・市町村名
本陣御子柴忠兵衛	組頭善右衛門	大名主 倉品七郎左衛門	弥右衛門	本陣百瀬伝左衛門	本陣千村右衛門治	宿泊宅
特記・天体観測						
九六	九六	九六	九六	九六	九六	大図番号
<p>木曾庄奈川村字寄合渡出立。手分。【後手】同所追分ヨ印より蕨原道測、界沢川、水木谷小流、荻曾村、界峠、字界沢、字鍋割平、字押出野に繋。【先手】木曾庄荻曾村字押出野より、字細島、笹川飯橋、字柴原、字斧沢、笹川寺平橋、字寺平、字塩沢、塩沢川土橋、笹川飯橋、字田ノ上、字花ノ木、字長谷、笹川飯橋、左笹川・味噌川落合、此より川下を木曾川という。蕨原宿在分、字翁象、字藁原、木曾川五反田橋、字下河原蕨原宿(家数百七十軒)、中山道三辻に出迄測る。此より中山道を上方へ向て測。左本陣前迄一町、左引込臨濟宗極楽寺、右制札に向左柱に繋終。恒星測定</p>						
<p>洗馬宿出立。手分。【忠敬他四名】同地内善光寺道追分、右中山道・左善光寺道追分碑より北国脇街道、善光寺道測、右方は桔梗ヶ原、左の方は犀川。寺印を残、此より長興寺へ測。左側洗馬村字下平、左側洗馬村字下平、右側本洗馬村、犀川琵琶橋、左右本洗馬村字下平、字上町、長興寺表門、額蜀北禅林本堂前に打止。曹洞宗越前国福井心月寺末青松山長興寺。又寺印より、本洗馬村、左川向字中町、郷原町(村)、(駅場)郷原町、堅石町村、原新田村、右京都・伊勢道追分碑に繋終。それより無測、松本城下着。当城主より贈物あり、江戸帰後迄預け。当所より御用状を出す。恒星測定</p>						
<p>【水井他三名】洗馬宿出立。大門村、右松本道・左中山道追分より松本道を測、棧敷村、高出村字芝茶屋、字桔梗ヶ原、野村、原新田村、左伊勢道追分を残。吉田村枝新田、村井町村(馬継)、駅名村井宿止宿前打止終。</p>						

27		26			宿泊日・旧暦
(15)	昼休、小休	(14)	本隊昼休	支隊昼休	(西暦)
青柳宿中町	西条本村	会田町	刈屋原村	松本城下本町	宿泊地
同	同	同	同	同	現・市町村名
筑北村	筑北村	松本市	松本市	松本市	宿泊宅
本陣八郎右衛門 年寄太兵衛	名主作左衛門	問屋善左衛門 百姓伊右衛門	本陣弥三右衛門	大名主 倉品七郎左衛門	
<p>【永井他三名】村井町村（駅名）村井宿出立。同所止宿前より、右芭蕉塚碑あり、平田村枝茶屋、右に修験金剛院、枝新茶屋、出川町村、右森中に多賀大明神・諏訪大明神合社、右山根計に山添に名所相染川。田川土橋、左側小島村、右側庄内村、薄川土橋、右山根引込湯ノ原村に温泉あり。字山部の湯という）、松平丹波守城下松本町（家数三千六百軒）、字博勞町、右番所木戸、長沢川土橋、本町五丁目木戸、右引込一向宗極楽寺、止宿前測所迄測る。本町四丁目、同三丁目、左浄土宗生安寺、左伊勢町通、飛驒道追分、同一丁目、同一丁目、大手打上げ、中町、右引込法花宗本立寺、女鳥羽川、東町、和泉町、右引込一向宗長唱寺、右引込同宝栄寺、安原町、右浄土宗撰取院、木戸市中限、在、松本分・桐原分入会、人家は松本町にあり、桐原分枝中原、松岡村、下岡田村枝治郎丸、下岡田村・岡田村界に繋。</p> <p>【忠敬他四名】松本城下出立。下岡田・岡田町村界社印初、同所より式内岡田神社へ打上、社前迄測る。又社印より、岡田町（駅場）、右田街道碑繋、左側伊深村、右側洞村、伊深村内古城山左引込、右側稲倉村、左側伊深村、同枝問屋原、仇坂峠、左右刈屋原村（本村）駅場、反町村、板場村、保福寺川飯橋、取出村、会田町村、雨トヤノ古城、西の方引込宮本村の上にあり。虚空蔵山古城跡町後東の方にあり。穴沢川小流、会田川小流、会田町（駅場）止宿前打止。別手と出会。恒星測定</p> <p>会田町出立。手分。【後手】同所止宿前より、右弘法大師堂、袈裟掛の松あり、枝岩井堂、左観音堂、立峠、乱橋村、中山峠、乱橋・西条村界先手の初に繋。それより無測西条村。【先手】乱橋・西条村界より、西条村枝小仁熊、字中ノ峠、右上田道・左善光寺道追分碑に繋置、西条本村（家数八十七軒）、立川土橋、東条村枝大明神、右引込鎮守神明社、字長畑、中村、右の方引込山の中腹に曹洞宗竜沢山碩水寺、青柳町村（駅場）青柳宿、下町、中町本陣前測所迄測る。此より仕越。右方引込古城跡、青柳宿字横町、右十王堂、字切通（天正年中に此所を切抜くという。百体地蔵在）、青柳町村地内ア印打止。</p>					
九六	九六	九六	九六	九六	特記・天体観測
					大図番号



29			28			宿泊日・旧暦
(17)	本隊昼休	支隊昼休	(16)	先手昼休	後手昼休	(西暦)
長野村善光寺門前町	稲荷山村篠野井追分	丹波島宿	稲荷山村字八日市町	桑原村	市野川村字上平	宿泊地
同 長野市	同 千曲市	同 長野市	同 千曲市	同 千曲市	同 麻績村	現・市町村名
本陣藤井平五郎	柳屋甚之丞	問屋林右衛門	本陣問屋兼松本完司 米屋甚左衛門	柳沢忠蔵	伊作	宿泊宅
<p>特記・天体観測</p> <p>青柳町(村) 出立。手分。【後手】同所ア印より、野口村、切通あり、枝砂原、安坂川土橋、下井堀村枝西村、麻績村枝高畑、字叶里、麻績町(駅場) 寺印迄測。此より法善寺へ打上、曹洞宗仏眼山法善寺、本尊釈迦如来、又寺印より、町出口、右上田道追分碑に繫、市野川村字上平、猿ヶ馬場峠(此所に湖あり、茶屋一軒、名物柏餅)、同所先手の初に繫。【先手】字猿ヶ馬場峠より、本八幡村字薄水、郡村枝中原(立場)、佐野川土橋、桑原村(立場)、左口留番所、左引込真言宗佐野山長福寺、三辻治印を殘。此より式内神社及竜洞院打上、伊沢川、社前迄測。式内治田神社、此より竜洞院へ打上、追分キ印を殘。桑原村枝小坂村、右森中に式内治田神社、竜洞院本堂前に打止。曹洞宗遠州可睡齋末桑原山竜洞院、本堂釈迦如来(弘法大師作)、左古城跡、又キ印より、街道へ打出セ印殘。又桑原村治印より、七印に繫。稲荷山村(本村、駅場、家三百七十九軒)、字新田町三辻、右八幡道追分ハ印を殘、字八日市町止宿前打止終。恒星測定</p> <p>稲荷山村(宿) 一同出立。【永井他三名】同所止宿前より、左制札、字中町、字荒町、川中島、塩崎村字上町、左引込浄土宗天用寺、字山崎町、聖川仮橋、枝平久保、左一ツ木八幡、枝篠野井(立場)、右京都道、左江戸道追分碑に繫。それより無測にて丹波島宿、又無測善光寺門前町着。【忠敬他四名】稲荷山町(駅) 字新田町、八幡並姨捨山道追分ハ印より、志河沢水無河原、本八幡村、志河村同枝北堀、八幡宮門前を歴て神前迄測。八幡八幡宮、式内武水別神社、別当天台宗清浄山神宮寺、裏門より境内を通、表門華表前へ測。本八幡村(本村家統)、更級川小流、右名所田毎の月、左に小袋石、姪石、月見堂へ登口に芭蕉塚。姨石、月見堂(観音)、此所より山々千曲川の流れ絶景也。八幡神宮寺持天台宗小庵姨捨山長楽寺。更級十三景、姨石、姪石、甥石、小袋石、桂ノ木、一重山、有明山、更科川、宝ノ池、田毎月、冠着岳、鏡台山、千曲川。それより稲荷山へ引帰、篠野井追分を歴て、善光寺門前町に着。</p>						
八一	八一	八一	八一	八一	九六	大図番号

		文化11年5月	宿泊日・旧暦
		(1814)	(西暦)
			宿泊地
			現・市町村名
			宿泊宅
			特記・天体観測
			大図番号
2 1	1		
先手昼休	後手昼休	(6. 18)	
静間村上組 枝五右衛門新田	替佐村	浅野村	
同 飯山市	同 中野市	長野県長野市	
庄屋助三郎	庄屋兼帯六右衛門	本陣葛屋九郎兵衛 古屋九兵衛	
<p>浅野村善光寺町一同出立。手分。【後手】同所大門町(善光寺本堂前) 制札前より北国街道重測、横町、左引込浄土宗寿福山無量院寛敬寺、岩石町、新町(市中限)、三輪村枝横山(家続)、相木、三輪神社前、神前(測。式内三輪神社。又社前より宇木村字下組、右側返目村、左側宇木村(返目村枝)、右側桐原村、左側押鐘村、吉田村、右一向宗東派白鳥山善教寺、稲積村、新町(駅場)、但、稲積村、下徳間村、東条村、三村入会駅。下山田村、右側御代官所、徳間稲倉村、左側下山田村、左右徳間稲倉村、左右下聴間村内、右飯山道追分、北国街道重測。此より飯山道新測。下徳間村・三才村界、先手の初繫。</p> <p>【先手】水内郡下徳間村、男谷御料所・三才村入会界より、左一向宗浄専寺、南江村、石村迄測。此より式内神社へ打上、社前迄測る。式内粟野神社、又石村より飯山道測、神代村(駅場)、右長沼、左北国道追分碑に繫。左制札、右式内伊豆毛神社。浅野村(駅場)、左一向宗正見寺、止宿前迄測る。仕越。鳥居川土橋、蟹沢村枝中島打止。それより浅野村へ帰着。</p> <p>浅野村出立。手分。【後手】信州水内郡飯山大倉村、蟹沢村入会、鳥居川土橋端より字橋詰、左右蟹沢村枝ニツ石、上今井村(立場)、左古城山、枝荒山、替佐村(駅湯)、上総川小流、右側替佐村、左側穴田村、替佐峠、先手の初に繫終。【先手】水内郡右替佐村、左穴田村、字替佐峠より替佐村枝赤坂新田、氷江村枝三ツ俣新田、右戸隠道、左善光寺道追分に繫置、蓮村、字境沢、深沢、枝茂右衛門新田、飯沢川土橋、枝飯沢新田、静間村上組、枝五右衛門新田、左一向宗蓮行寺、清川渡、飯山町字新町、右須坂道追分に埋抗を殘。此より飯山市中測。木戸、右番所上町、左一向宗善覚寺、左一向宗真照寺、本町左制札三ツ辻、右大手入口、横物大手前五町。測所迄測。</p>			
八一	八一	八一	



4-1	3			2-2	宿泊日・旧暦
後手昼休	(20)	先手昼休	後手昼休	(19)	(西暦)
川田村	須坂町上町	小布施村字中町	赤石村	飯山城下本町	宿泊地
同 長野市	同 須坂市	同 小布施町	同 中野市	同 飯山市	現・市町村名
又右衛門	本陣田中新五右衛門 升田屋平左衛門	高津屋名右衛門	名主徳兵衛	河内屋市郎兵衛 富倉屋弥右衛門	宿泊宅
<p>須坂町出立。【後手】同所下町、中町界、松代道追分より松代道測、横町、市中出口松代口木戸、小山村枝八幡村、墨坂神社前を歴て、式内墨坂神社前迄測る。往還へ戻り、市川無水河原、米持村、鮎川水無河原、幸高村、井上村、仁礼大笹道追分、綿内村枝牛地、枝大橋に川印を残、此より千曲川、犀川河口迄測。更級郡牛島村、千曲川端同村人家下に打止終。川印より高井郡菱川、先手の初、綿内村、川田村界に繋。それより無測にて川田村昼休。</p>	<p>須坂町出立。【後手】同所下町、中町界、松代道追分より松代道測、横町、市中出口松代口木戸、小山村枝八幡村、墨坂神社前を歴て、式内墨坂神社前迄測る。往還へ戻り、市川無水河原、米持村、鮎川水無河原、幸高村、井上村、仁礼大笹道追分、綿内村枝牛地、枝大橋に川印を残、此より千曲川、犀川河口迄測。更級郡牛島村、千曲川端同村人家下に打止終。川印より高井郡菱川、先手の初、綿内村、川田村界に繋。それより無測にて川田村昼休。</p>	<p>須坂町出立。【後手】同所下町、中町界、松代道追分より松代道測、横町、市中出口松代口木戸、小山村枝八幡村、墨坂神社前を歴て、式内墨坂神社前迄測る。往還へ戻り、市川無水河原、米持村、鮎川水無河原、幸高村、井上村、仁礼大笹道追分、綿内村枝牛地、枝大橋に川印を残、此より千曲川、犀川河口迄測。更級郡牛島村、千曲川端同村人家下に打止終。川印より高井郡菱川、先手の初、綿内村、川田村界に繋。それより無測にて川田村昼休。</p>	<p>須坂町出立。【後手】同所下町、中町界、松代道追分より松代道測、横町、市中出口松代口木戸、小山村枝八幡村、墨坂神社前を歴て、式内墨坂神社前迄測る。往還へ戻り、市川無水河原、米持村、鮎川水無河原、幸高村、井上村、仁礼大笹道追分、綿内村枝牛地、枝大橋に川印を残、此より千曲川、犀川河口迄測。更級郡牛島村、千曲川端同村人家下に打止終。川印より高井郡菱川、先手の初、綿内村、川田村界に繋。それより無測にて川田村昼休。</p>	<p>須坂町出立。【後手】同所下町、中町界、松代道追分より松代道測、横町、市中出口松代口木戸、小山村枝八幡村、墨坂神社前を歴て、式内墨坂神社前迄測る。往還へ戻り、市川無水河原、米持村、鮎川水無河原、幸高村、井上村、仁礼大笹道追分、綿内村枝牛地、枝大橋に川印を残、此より千曲川、犀川河口迄測。更級郡牛島村、千曲川端同村人家下に打止終。川印より高井郡菱川、先手の初、綿内村、川田村界に繋。それより無測にて川田村昼休。</p>	<p>特記・天体観測</p>
八一	八一	八一	八一	八一	大図番号

		宿泊日・旧暦	
5		4 2	
(22)		(21)	
下戸倉村		松代城下伊勢町	
同 千曲市		同 長野市	
鳥居屋十郎右衛門 沢瀉屋伊右衛門		本陣阿波屋五左衛門 北野屋善右衛門 坪屋新助	
<p>〔先手〕川田村界より字川田宿(駅場)、左諏訪社、字関崎、左不動堂、大室村、右諏訪社、左臨濟宗禅福寺、埴科郡東寺尾村字鳥打峠、宇立町、左山上に愛宕の社あり、関屋川土橋、左引込真言宗新義下野国足利郡鷄足寺末杵淵山福徳寺、右一向宗万徳寺、左引込浄土宗京都智恵院末恵日山長明寺、横町昼休、松代市中(家数三百九十三軒)、荒神町、中町、左引込浄土宗智恵院末逸経山西念寺、中印を歴て大手口の入口木戸迄測る。又中印より四辻小印を歴て、此より長国寺及式内神社へ打上。鍛冶町三辻を歴て田町、曹洞宗上州五閑長源寺末真田山長国寺、又鍛冶町、三印より、左に真言宗江戸護国寺末竜花山練光寺、此より諏訪明神へ打上式内祝神社社前迄測る。又街道四辻小印より伊勢町止宿前打止。</p>		<p>松代城下出立。総一手の測、同所止宿前より、左鳥居横町、木町四ツ辻を歴て、此より御朱印寺へ打上。柴町、左右家中屋敷、左大英寺入口を歴て、横に一支引込門前迄測る。浄土宗智恵院末皓月山大英寺、又寺入口へ戻、字御安口、左右家中家敷、本堂前に打止。曹洞宗甲州恵蓮寺末寒松山大林寺、又木町四辻より街道を測、石橋、紺屋町、石橋、紙屋町、神田川板橋、馬喰町、右浄土宗大真寺、木戸、清野村、右松代城内家中屋敷の間に武田信玄の茶亭あり、左に古城跡倉骨山あり。左小山の出鼻字戦ヶ窪という。上杉謙信の陣所、是より子の方に典厩寺の森、此所川中島合戦に典厩信豊討死の所、岩野村字新村、土口村、雨宮村、生仁川土橋、右諏訪社、屋代宿(又矢代)、字下横町、善光寺街道三辻を歴て、此より法華寺へ一支門前迄測る。真言宗大和国小池坊末寺山王山法華寺、又下横町より善光寺街道、江戸の方に向て重測、田町、高見町、上横町、右に制札あり、右須子岐神社華表前重測を止。又下横町より街道を善光寺へ向て重測、荒町、右引込天台宗智性寺、左右人家の限重測打止終。此より善光寺道、千曲川渡場に至る。昼休。それより無測、右間に(立場)寂蒔村にて小休、下戸倉宿着。此朝地方掛勘定役、松代侯より御贈物持参、即我等下役三人計預け置。</p>	
九六		八一	
		大図番号	



9 1		8		7		6		宿泊日・旧暦		
先手昼休	後手昼休	( 2 5)	( 2 4)	昼休	( 2 3)	昼休	(西暦)	宿泊地		
下仁田町上町	本宿村	矢川村字初鳥屋	中山道追分宿	馬瀬口村枝三ツ屋	田中宿	上田城下町				
同 下仁田町	同 下仁田町	群馬県下仁田町	同 軽井沢町	同 御代田町	同 東御市	同 上田市		現・市町村名		
名主幸之助	名主治左衛門	本陣問屋文蔵 年寄忠右衛門	本陣土屋市左衛門	名主次左衛門	本陣小田中新右衛門 山市屋四郎兵衛	本陣柳沢太郎兵衛		宿泊宅		
<p>下、下仁田町に下印を残。</p>		<p>矢川村字初鳥屋出立。手分。【後手】同所測所より、初鳥屋川小流、時丸岩、左の方大絶壁、鑄川山梨橋、枝柴ノ沢、柴沢橋、鑄川瀬成橋、枝荒屋、大栗橋、枝大栗、枝横川土橋、枝清水ノ沢、(川向)枝為岩、為岩橋、枝赤屋、根小屋村、黒川小流、枝小出家、中山道坂本道、根小屋橋小流、枝小屋ノ平、本宿村、右信州岩田道追分碑に繫、本宿(本村、駅場)、長楽寺前を歴て門前迄打上、曹洞宗弘誓山長楽寺。又往還より初、昼休、西牧御関所、(同御料)坂詰村字六瀬田、字小河原、(同御料)大平村、大平村・小坂村界先手の初に繫。【先手】大平村、小坂村界より、小坂村(此村三つに分る。即上小坂村、中小坂村、下小坂村也)、中小坂村、左松井田追分庚申塔に繫(此より妙義山、松井田宿)、字水骨、小坂川板橋、字中井、字反谷、字大久保、字安道寺、左正一位安岡稻荷の社、字中里、字関口、左一ノ宮道追分、字岩</p>		<p>追分宿出立。総一手、信州佐久郡借宿村、中山道の内下仁田道追分石碑より下仁田道測、油井村、湯川土橋、名所釜ヶ淵、油井村・発地村入会、左右共発地村、左妙義道追分、左松井田へ行小道あり、野陣昼休、右側発地村・馬取萱村入会、左側発地村、同字馬越、鱒坂峠国界を歴て、上州甘楽郡矢川村、左御川道追分(小道)、鑄川小流、矢川村本村字初鳥屋(馬駅)人家中測所に打止。</p>		<p>田中宿出立。無測、朴屋(立場)、佐久郡小諸町(小休)、平原(立場)、馬瀬口村(立場)、立場馬瀬口村枝三ツ屋(昼休)、中山道追分宿着。</p>		<p>下戸倉村出立。無測にて上田城下町(昼休)、それより小県郡田中宿に着。</p>		特記・天体観測
九五	九五	九五	九五	九五	九五	九五	九五	大図番号		

<p>101</p>	<p>92</p>	<p>宿泊日・旧暦</p>
<p>昼休</p>	<p>(26)</p>	<p>(西暦)</p>
<p>小幡町上町</p>	<p>宮崎村</p>	<p>宿泊地</p>
<p>同 甘楽町</p>	<p>同 富岡市</p>	<p>現・市町村名</p>
<p>大庄屋 横尾十郎右衛門</p>	<p>百姓兵右衛門 年寄八郎右衛門</p>	<p>宿泊宅</p>
<p style="text-align: right;"><b>特記・天体観測</b></p> <p>此より甲州街道打出。下仁田町（駅場、家数三百四十五軒）、字下町右制札、字中町を歴て、此より竜栖寺へ打上げ、横町を測。右に当町鎮守諏訪大明神の社、門前迄測る、真言宗醍醐報恩院末岩淵山普賢院竜栖寺。又字中町より、上町、左天王の社、上印迄測り、此より甲州街道打出。昼休、下仁田町（名産絹麻紙）、上町人家限、鑄川板橋右欄干に繫。又上印より御朱印寺へ打上げ。岡横町を行、左山際に天台宗養福寺、字石神、二方追分を歴て、此より常住寺打上、門前迄測る、天台宗世良田長樂寺末五代山普門院常住寺。又二方追分より清泉寺へ打上門前迄測る、天台宗世良田長樂寺末安養山成就院清泉寺。又下仁田町入口下印より街道を測、右浄土宗専修院、左右山間、字小坂峠、折之沢川、南蛇井村、左臨濟宗普門寺、梅沢川板橋、字辺平、小倉川板橋、字中井、右もく道、左下仁田道の碑に繫、字山際、字久保田、左引込臨濟宗西光寺、字中村、右森中に八幡宮の社あり、字原村、北境川板橋、右側上小林村、左側神成村、左引込式内字芸神社、神原村、字道端に天神小社、字根岸、宮崎村、左一向宗乗願寺、同村町並家八十四軒、止宿前打止。</p> <p>宮崎村出立。総一手測、同所止宿前より、左引込浄土宗竜光寺跡あり、今富岡宿へ移す。枝鐘打村、右引込曹洞宗永乗寺、一ノ宮町字横町、字左袋町、引込曹洞宗連珠寺、字内町三辻を歴て、此より一ノ宮へ打上。字坂町、字上町へ右三重塔鐘樓堂、右観音堂、直は妙義道、行当弥勒堂、一ノ宮神前迄測る、一宮、式内貫前神社。古書（織田信長軍令状）。又下町三辻よりマ印まで測。此より光明院へ打上、本堂迄測る、天台宗東叡山末尾崎山阿弥陀寺光明院。又マ印より板鼻道追分道祖神碑に繫、右に旧跡稻荷森（星下り松あり）、七日市村、左森の中に蛇宮大明神小社、木戸、字南横町三辻を歴て、此より陣屋打上、陣屋門前迄測る。又南横町三辻より字本町、左松井田道、富岡町（家数四百九十七軒。上町、中町、瀬下町、合富岡という）、左竜光寺本堂前迄測る、浄土宗京都智恩寺末宮崎山豊国院竜光寺。</p>		
<p>九四</p>	<p>九五</p>	<p>大図番号</p>



1012	宿泊日・旧暦	
(27)	昼休	(西暦)
吉井宿字中町	小幡町上町	宿泊地
同 吉井町	同 甘楽町	現・市町村名
間屋三右衛門	大庄屋 横尾十郎右衛門	宿泊宅
<p style="text-align: right;">特記・天体観測</p> <p>又街道へ立歸て初、左に制札、左横町、中山道板鼻道、中町内字上横町、左諏訪宮へ社前迄測る、諏訪大明神、別当天台宗青陽山諏訪寺延命院。又街道へ歸て初、字中町、右制札、右小幡道、瀬下町、右制札、字新田を歴て、此より小船大明神迄打上、社前迄測る、小船大明神、別当修験天台宗小船山福寿坊。又街道へ歸て初、曾木村字井戸上、字郷戸、字川端、左引込普賢寺、鐺川舟渡、田篠村字大坊瀬、字下組、福島町(駅場、家数九十六軒)、左東覚院へ一支打上、門前迄測る、真言宗稻荷山東覚院。又街道より初、左制札問屋場、追分フ印を殘、此より小幡町打上。右引込正一位稻荷大明神遠測、笹森稻荷、別当東覚院。小幡町字下町(人家二百十軒)、右引込曹洞宗宝泉院、左制札、左引込鎮守八幡宮、別当真言宗長厳寺、上町大手前を歴て、此より大手門迄測る。昼休。又上町大手前より御朱印寺(打上、字横町木戸、字赤城(右森の中に赤城社あり)、左森中に馬頭堂あり、字岩ノ上、字町屋、御朱印寺二ヶ所の追分テ印迄測。</p> <p>此より崇福寺打上、本堂迄測る、臨濟宗京都妙心寺末小幡山崇福寺。本堂後左の方、織田家代々の墳墓あり、尤信雄卿より七世迄。又テ印より長厳寺打上、秋畠川、本堂前迄測る、天台宗東叡山末蓮岩山長厳寺。此より無測にて福島町へ引返、同町追分フ印より街道測、白倉村、金井村、左宝勝寺へ一支引込、本堂前迄測る、児玉郡小茂田村勝林寺末真言宗歡喜山宝勝寺。又街道へ歸て初、字権現堂、多胡郡上長根村・中長根村人會字権現堂、右恩行寺一支引込本堂前迄測る、天台宗世良田長樂寺末医王山悉地院恩行寺。又街道へ歸て初、ケ印迄測。此より常行院打上、本堂前迄測る、天台宗世良田長樂寺末補陀落山長福寺常行院。又ケ印より、下長根村、大沢川板橋、中央界、吉井宿(駅場、家数百十七軒)、字上町を歴て、此より陣屋へ打上、陣屋前迄測る。又字上町より、字中町止宿前打止。</p>		
九四	九四	大図番号

12	11		宿泊日・旧暦
(29)	(28)	昼休	(西暦)
熊谷宿	本庄宿中町	藤岡町上中町	宿泊地
同 熊谷市	埼玉県本庄市	同 藤岡市	現・市町村名
本陣武井新右衛門	本陣内田七左衛門	本陣星野金左衛門	宿泊宅
<p>右秩父街道追分、小林村、右川越道追分、神流川中央国界迄測、武州賀美郡長浜村社印を歴て、此より式社打上、社前迄測る。式内今城青坂稲実池上神社(当時池上稲荷)。又それより式内今城青八坂稲実神社(当時八坂稲荷)、神前迄測る。又式内今木青坂稲実荒御魂神社(当時青坂稲荷)、神前迄測る。又同所より右式内長幡神社(当時仮玉大明神)。又街道へ帰社印より、右引込大御堂村内真言新義京都御室御所末安保山吉祥院真光寺、藤木戸村、横町村、安保町、七本木村、宝泉寺門前迄測。此より一支打上、本堂前迄測る、曹洞宗長樂寺末舜栄山宝泉寺。同所入口より、右八幡山宿通秩父道追分、七本木村枝三間新田、枝京塚、児玉郡本庄宿追分碑に繫。即文化巳年九月此所測量に殘印。此より中山道筋江戸の方へ向て重測。新田町、左に金讚神社、当国式、上町、中町、右本陣前、本町、本町の内制札の中心に繫。</p> <p>本庄宿出立。無測、深谷宿、新堀村字籠原(立場)昼休、熊谷宿着。</p>			特記・天体観測
八八	九四	九四	大図番号



1411	13	宿泊日・旧暦
昼休	(30)	(西暦)
本野上村	寄居村	宿泊地
同 長瀬町	同 寄居町	現・市町村名
名主島田六左衛門	源右衛門 三郎兵衛 弥右衛門	宿泊宅
山少林寺。	総一手、武州榛沢郡寄居村成立。同所止宿前より、中町、上町、左秩父街道追分、荒川端聖天前迄測。此より一支打上、真言宗象頭山極楽寺聖天宮。それよりテ印を殘迄測。此より御朱印寺打上、高麗郡越生竜穩寺末曹洞宗高根山正竜寺。古書画 約束之松茸給見事歎入候。正竜寺は氏邦菩提寺、軸物(多数)。テ印より末野村字女沢、寺印を殘迄測。此より御朱印寺へ打上、曹洞宗、児玉郡骨波田大用山長泉寺末万年山少林寺。	特記・天体観測
九四	九四	大図番号

15		1412	宿泊日・旧暦
(2)	昼休	(7.1)	(西暦)
大宮町	大野原村	金崎村	宿泊地
同 秩父市	同 秩父市	同 皆野町	現・市町村名
本陣名主惣太郎 名主七右衛門	名主五右衛門	本陣名主宮前佐左衛門 真言宗医王山長興寺	宿泊宅
<p>寺印より、字宿、字閼根、字原、字金場、北谷川土橋、本村字サビノ、字北久保、秩父郡矢野瀬村字下破崩、字根岸、字丹沢(御用人馬継場)、字北久保、字石原、野上下郷字小坂、字滝ノ上、寒気沢川土橋、字宮沢、諏方川、中野上村字竹ノ内、本野上村字袋郷、右曹洞宗普光山総持寺、本村(御用人馬継場)、昼休、藤谷淵村字高野、字久保、字元山根、字馬内、字犬川戸、字神山、字地藏堂、金崎村字大界、字岩下、本村(御用人馬継場)、金印に打止。恒星測定</p>		<p>特記・天体観測</p>	
九四	九四	九四	大図番号



宿泊日・旧暦			
(西暦)			
宿泊地			
現・市町村名			
宿泊宅			
特記・天体観測			
大図番号			
宿泊日・旧暦	16		17
(西暦)	昼休		(4)
宿泊地	坂本村枝栗和田		菅谷村
現・市町村名	東秩父村		同 嵐山町
宿泊宅	真言宗都幾山普門寺		本陣庄屋伊左衛門組頭半兵衛
<p>総一手、大宮町出立。無測、大野原村、大宮道・川越道追分碑より川越道を測、字黒草、横瀬川、黒谷村字小川端、字上ノ原、字曾根坂、字曾根坂峠、三沢村字曾根坂、字大洞、字宿入、左引込真言宗常楽寺、字広町(駅場)、字峯、字小峠、坂本村枝栗和田(駅場)、左引込昼休真言宗都幾山普門寺、字荒井、寺印迄測。此より八幡宮へ打上。槻川土橋、社前迄測る、八幡宮、別当修験聖護院末真如山神刀坊。又寺印より、字下田中、字長谷田、字落合、槻川土橋、奥沢村、槻川土橋、御堂村字後、右御朱印寺へ打込、池上本門寺末日蓮宗妙栄山浄蓮寺。槻川、字宮池、安戸村字都沢、右御朱印寺へ打上本堂前迄測、曹洞宗当国高麗郡越生竜穩寺末長谷山聖岩寺、又街へ帰て初、字鍛冶屋、右聖岩寺、右門前。左御朱印寺へ打上、本堂前迄測、武州越生報恩寺末真言宗西慶山上品寺。又街道初、安戸村本村(駅場)、止宿前に打止。</p>			
大図番号	九四		八八
	九四		九四

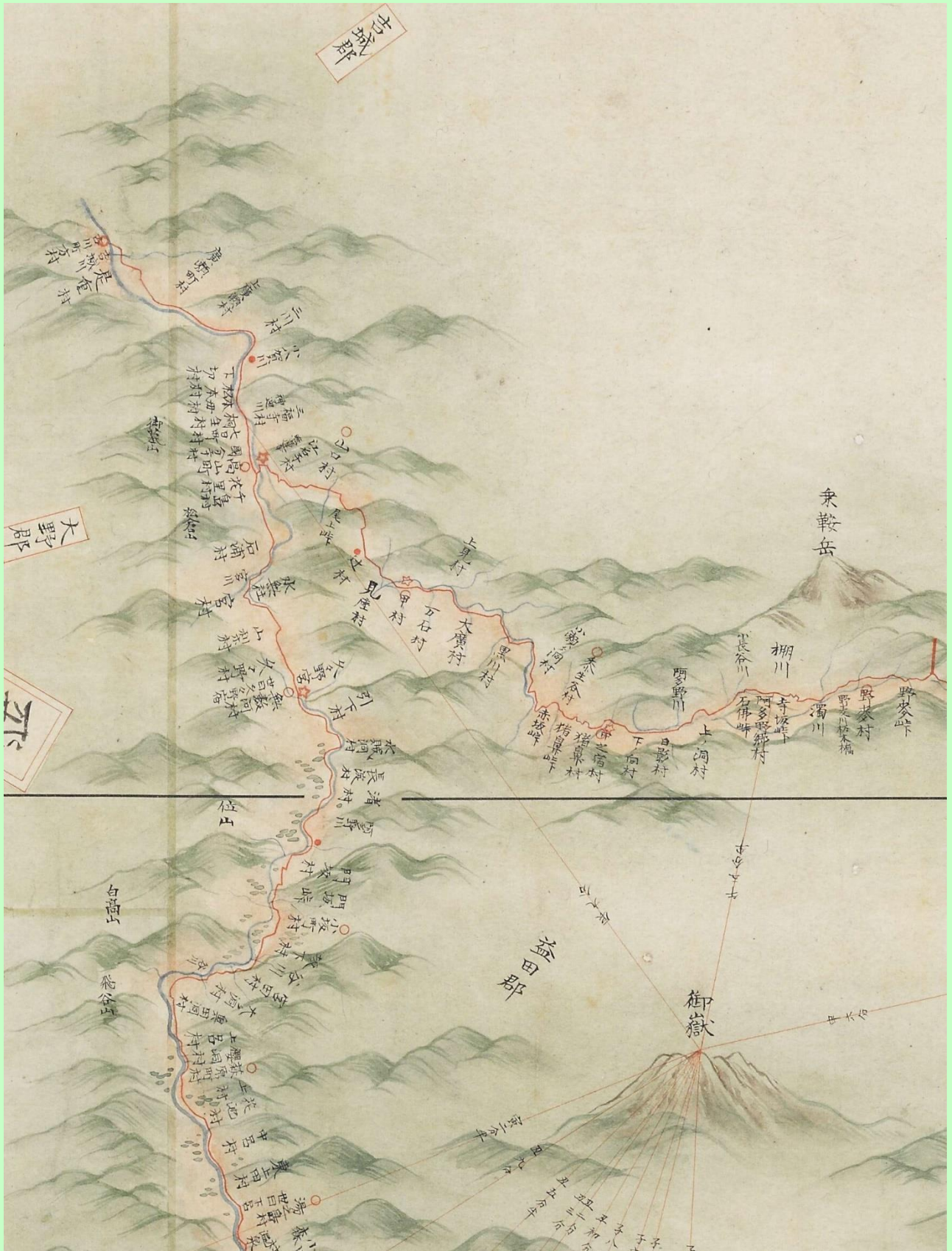
		宿泊日・旧暦
19		18
(6)	昼休	(5)
川越城下江戸町	中寺山村	高坂村
同 川越市	同 川越市	同 東松山市
本陣問屋久右衛門 嶋屋惣兵衛	名主要左衛門	本陣名主庄太夫 組頭忠右衛門
<p><b>特記・天体観測</b></p> <p>菅谷村出立。同所止宿前より、右八王子道追分、左熊谷道追分、馬頭観音碑に繫。上唐子村字原屋敷、字引野、字車口、左松山道追分、下唐子村字大塚原、石橋村字戸崎、四方追分（真直は伊草道、左松山道）、葛袋村、右に地藏堂、槻川、本宿村、高坂村入会、左右高坂村（駅場）、左日光道追分、御朱印寺へ打上、本堂前迄測る、曹洞宗野本村無量寺末大溪山高濟寺。又街道に帰て初、高坂村止宿前に打止。</p>		
八八	八八	八八
		大図番号



宿泊日・旧暦	20
(西暦)	( ) 7
宿泊地	大井町
現・市町村名	同 ふじみ野市
宿泊宅	本陣問屋兼大次郎 庄次郎
特記・天体観測	<p>川越城下出立。総一手、川越市中熊谷街道町限、赤間川志田橋南欄干二本目より江戸街道を測、志多橋、左時宗稲荷山東明寺、喜多町、右曹洞宗青鷹山広濟寺、喜多町・南町界制札昨日打止残本印に繋。此より江戸街道測、御朱印寺打上、曹洞宗宝泉寺末青竜山養寿院。往還に戻て初、鍛冶町、志義町、三辻迄測。此より八王子道打出し。志木町六軒町界、木戸の柱に繋置。往還に戻て初、松郷町市中限、松郷の内中町迄測。此より御朱印寺へ打上、浄土宗関東十八檀林内狐峯山宝池院蓮馨寺。</p> <p>往還に戻て初、寺印迄測。比より喜多院裏門道打上。松郷枝久保町、小仙波村、本村、浦和道追分、制札に繋。それより総門前を歴て薬師堂前迄測る。総門前左側、天台宗八檀林内星野山中ノ院。総門内右側、天台宗星野山南院。左に向東照宮、行当て薬師堂、左の方引込天台宗星野山喜多院無量寿寺、境内寺中七ヶ院、本堂十三間四面、開基慈覚大師、中興慈眼大師、境内(四万八千八百四十一歩、五町四方)。寺印より、通町、家屋町、左曹洞宗孝頭寺川越城主の菩提所、大仙波新田、大仙波村、岸村、瑞生川御代橋、左側砂新田、藤馬村字伊勢原、右扇町街道追分、右側砂新田、左右共藤馬村、右曹洞宗東光寺、(昼休)鶴ヶ岡村、右側鶴岡村、左側亀ヶ窪村、左右亀ヶ窪村、右八王子道、右越生道、右大山武蔵野地蔵道、勝瀬村、苗間村、大井町(駅場)、本陣止宿前に打止。</p>
大図番号	八八

23	22	21		宿泊日・旧暦
(10)	(9)	(8)	昼休	(西暦)
深川黒江町	板橋平尾町	白子村	膝折村	宿泊地
同 江東区	東京都板橋区	同 和光市	同 朝霞市	現・市町村名
忠敬隠居宅	伊勢屋佐兵衛	本陣百姓平左衛門 百姓市左衛門	名主兼間屋 八郎右衛門	宿泊宅
<p>此朝帰府に付内弟子一同、御証文且御遠鏡持参致返進、尤麻上下着、浅草高橋御役所高橋氏へ逢談。それより我等計小普請組頭渋谷新之助今日帰府之段申達、津田家へ立寄、小川町広小路支配松平石見守殿へ罷出着届申置、堀田撰津守殿へ罷越七ツ時後深川へ帰宅。</p>	<p>向、右の馬寄角に繋。</p>	<p>白子村出立。同所止宿前より、用水川土橋、豊島郡上赤塚村、字成増、下赤塚村、左引込曹洞宗上州白井双林寺末万吉山松月院、字新町、右側上練馬村、下練馬村字久保、字上宿、字中宿、朱印迄測。此より御朱印寺打上、字下宿本堂迄測る、真言宗大和長谷寺末如意山万福寺。又街道へ帰、朱印より、字中宿、上板橋村字七軒屋、字栗原、右練馬道追分、字中折、字上ノ根、字大宿、右真言宗長明寺、石神井川下頭橋、字上板橋宿(駅場)、右に制札、中山道板橋宿字大山、右大塚道追分、字茶屋前、金井窪村、板橋宿中山道に出、追分地藏の前迄測る。此より中山道京都の方へ向て戌年の重測。左引込浄土宗増上寺末狐雲山乘蓮寺。右に間屋制札</p>	<p>大井町出立。同所本陣止宿前より、右天台宗本乘院、右薬師堂、左稻荷社、藤久保村、右曹洞宗広源寺、竹間沢村、右所沢道・左水子川岸追分、新座郡大和田村枝中野、柳瀬川土橋、大和田町(駅場)、野火止村、右府中・左大宮道追分、右引込臨濟宗京都妙心寺末金鳳山平林寺、右側片山村、左側所膝折村(駅場)、左右膝折村、黒目川土橋、昼休、左に地藏堂、字広沢原、溝沼村、岡村、台村・根岸村入会、上新倉村字原新田、下新倉村字浅久保、白子村(駅場)、止宿前打止。</p>	特記・天体観測
				九〇





高山から野麦峠へ

「大日本沿海輿地全図 中図 5. 近畿」(伊能家副本からの模写本) 日本学士院所蔵

## 技術を繋ぐ

中村 泰子

私は、茨城県水戸市にある県立水戸工業高等学校で、この春入学してきた土木科一年生に対して、測量の授業を行っています。この授業で最初に説明をすることは「測量とは何か」です。位置を確定することと定義されますが、その確定に使われる要素が「距離」と「角度」です。観測で求められた距離と角度のデータを算術で高さ・面積を求め、点・線・面と次元が広がって空間となり、最終的に地図となります。授業では、計算だけでなく測量器械を用いて技術も学びます。水準測量ではレベル、角測量ではセオドライト、角度と距離を同時に測定できる光波を使うトータルステーションといった測量器械の扱い方を学びます。

最初は「距離測量」から始まります。自分の身体を物差しにしてモノの大きさを測る「身体尺」を学んだ後、「歩測」を行います。はじめに測点間の距離が分かっている場所を、歩数を数えながら歩きます。複数回繰り返し、距離を歩数で割って自分の歩がどのくらいの距離かを求めます。求めた一步の値を礎にして、課題として設けられた2測点間の距離を求めます。確認は、巻尺や $\beta$ を使って観測を行います。距離測量の方法を知り、精度を感覚的に体験します。

敬記念館エントランスに展示してある衛星写真と重ね合わせた伊能図を見たならばもつと驚くことでしょう。

「歩測」が器械を使わない方法としたら、次は距離を測るための道具を習います。「間縄」は「巻尺」、「梵天」は「ポール・標尺」に「象限儀・彎算羅針」は「コンパス」といった風に江戸時代の道具と現在の道具の比較を通して測量器械の変遷を伝えます。測量の目的によっても使う測量器械も変わります。技術の発展とともに測量機器が変化しても測量の基本は「正確なデータを求める」ことは変わりません。また測量に携わる姿勢や取り組みは真摯であること、至誠を尽くすことであり、嘘やいい加減なものはありません。正確さを求め、誤差を小さくし真値を目指して、器械の据付（求心・整準）練習を行います。目盛りの読み取りや計算を徹底的に学習します。伊能図には「不測」を明記していることは知られている事実です。科学的記録・事実と立証による嘘がない信頼に足るデータで描かれているからこそ二百年経っても伊能図は生きて語りかけてくるのだと思います。

生徒は、最初のうちはなにかも分からず、ただ言われるままにやってみましたが、人と比べて下手だなと悲しくなったり、もつとうまくできるようになりたいと焦ったりすることもありました。しかし、分かったとき、うまく出来たとき、嬉しさに満ちた表情をします。共に測量作業を行う中で、観測を繰り返し、自分に向き合うだけではなく、協働する人のことを考え、置かれた環境で分からない人と一緒にいて考えることが大切です。習ったことがすべてではなく、学校で教わるのは、

自分で学ぶための手立てで、土木・測量を通して、基礎的な知識を学び考え、自分と同志のいる集団の中で、自己を成長させていって欲しいです。何事も一番最初が楽しいといわれます。高校に入学して土木や測量という足を踏み入れたことのない分野を歩き、訪ね、観測し、記録する、これらは発見と創造の連続で貴重な体験です。

現代は「モータリゼーション」や「インターネット」の言葉にあるように、江戸時代とは比較にならないほどの遠い距離や桁違いの情報に触れる環境にあります。地図にはナビゲーションやGPSマップが欠かせず、実世界にある「地物」（道路・鉄道・河川・橋など）を記述し、これに加えて行政界や観光情報といった「目に視えないもの」まで地図上に階層化（レイヤー化）している時代です。「地図の電子化」という新しい技術発展がこの生徒らに見せる世界はどんなものであるか、私自身も共に学び、共に進んでいきたいと考え、授業に取り組んでいます。



測量実習風景 水準測量



同 セオドライトの据付

## 《参考文献》

- 「測量」実教出版
- 「伊能忠敬測量隊」渡辺一郎著 小学館
- 「伊能忠敬」小島一仁著 三省堂
- 「汐さいの地図」梅田うめのすけ著 ごまめ書房
- 「道をたずねる」平岡陽明著 小学館



## 忠敬翁の足跡と「広報ふくしま」

中塚徹朗

北海道最南端の白神岬の付け根に位置する福島町吉岡。ここに、伊能忠敬測量隊は上陸し、蝦夷地測量が開始された。

それを記念し、没後二百年の2018年に、測量作業姿の伊能忠敬翁の銅像が建てられ、その公園は「伊能忠敬北海道測量開始記念公園」と名付けられた。今年で建立5周年になることから、福島町教育委員会は、町民向け広報誌「広報ふくしま」（全戸配布）の5月号と7月号の計2回四頁にわたり「福島町の歴史と文化を知る」という特集を組み、伊能測量隊と福島町との詳細な関わりをあらためて振り返った。

タイトルは5月号が「日本地図の第一歩は吉岡から」で、7月号が「7月10日伊能忠敬吉岡上陸の日」である。

測量の語源は「測天量地」と言われるように、彎窠羅鍼わんさらかんを使用した昼の測量（方位・歩測）と中象限儀を使用した夜の測量（天体観測）をセットに繰り返し実施した伊能測量隊だが、広報文中では、町内の昼夜何処で測量したのかまた、どんな星を観測したのかができるだけ分かりやすく説

明してある。町内での伊能測量隊の足跡を身近に感じられれば、町民にとって興味は尽きないだろう。この記事を通じて日本地図測量の源流を町民が知る喜びを感じていただければとの企画。後に忠敬は全国の測量をすることになったのは天命であったと長女妙薫あて書状に書いているが、その測量の最初の出発点になったこの町福島町吉岡もまた天命により選ばれた地だったと言えるのではないだろうか。日本地図づくりの第一歩の様子を「伊能忠敬記念館」（千葉県香取市）で取材した国宝の伊能図・忠敬先生日記・山島方位記・書状などを活用しながら、この「広報ふくしま」は記している。会員の皆様にも是非ご覧いただきたい。

なお、この記事は、同教委が2021年2月に発行した『北海道ふくしま歴史物語』のなかの「日本地図の第一歩は吉岡から」伊能忠敬の内容を元に作成している。元の文章は中塚が書き、鈴木志穂学芸員が作図・写真を加え広報用に再度編集し直した。



『ふくしま歴史物語』

### 福島町での伊能忠敬翁関連活動

- ・2023年5月 殿様街道探訪ウォーク 古道を歩きながら「伊能忠敬の道」学習
- ・2022年12月 松前町立大島小学校6年生による伊能忠敬銅像見学と学習会
- ・2022年11月29日 松前町立松城小学校6年生による伊能忠敬銅像見学と学習会
- ・2022年11月11日 函館土地家屋調査士会研修会で伊能学習会
- 「伊能忠敬 道南の足跡」
- ・2022年10月22日 殿様街道探訪ウォーク 古道を歩きながら「伊能忠敬の道」学習
- ・2022年5月3日 殿様街道探訪ウォーク 講師・荒到夢形氏による「殿様街道と伊能忠敬」お披露目及び古道を歩きながら「伊能忠敬の道」学習
- ・2021年11月8日 松前町立松城小学校6年生による伊能忠敬銅像見学と学習会
- ・2021年10月23日 殿様街道探訪ウォーク 古道を歩きながら「伊能忠敬の道」学習
- ・2021年7月10日 吉岡上陸の日になみ伊能忠敬翁銅像の福島町小学生による清掃活動と学習会
- ・2021年6月29日 松前中学校2年生による伊能忠敬銅像見学と学習会
- ・2021年4月 町教委、小中学校での総合学習や、住民向け歴史講座の教材として伊能忠敬翁の物語も登場する『北海道ふくしま歴史物語』を全世界帯に配布
- ・2020年10月28日 松前町立小島・大島小学校5年生・6年生による伊能忠敬銅像見学と学習会
- ・2020年10月20日 殿様街道探訪ウォーク 古道を歩きながら「伊能忠敬の道」学習
- ・2020年10月19日 福島町史研究会 福島大神宮社務所にて伊能忠敬の津軽海峡対岸測量の研究発表
- ・2020年8月4日 福島町史研究会 七飯町郷土史研究会と伊能忠敬の蝦夷地測量の研究発表
- ・2019年10月20日 殿様街道探訪ウォーク 古道を歩きながら「伊能忠敬の道」学習
- ・2019年8月21日 道南ブロック教育長研修会にて伊能忠敬の蝦夷地測量の足跡を中塚講演
- ・2019年6月22日 福島町の町立福島中の卒業同期生による「喜寿の集い」で「伊能忠敬と福島」を講演

以上の講演は、福島町鈴木志穂学芸員と中塚が講師を担当した。

特集

福島町の歴史と文化を知る①

【福島町教育委員会生涯学習係】

# 日本地図の第一歩は吉岡から

吉岡の伊能忠敬北海道測量開始記念公園に伊能忠敬の銅像が建設されてから、今年で5年が経ちました。今回は、福島町ゆかりの偉人伊能忠敬について改めてご紹介したいと思います。

## 伊能忠敬測量隊 吉岡上陸

伊能忠敬は、江戸時代に全国を測量して、日本で初めて科学的な実測による日本地図「大日本沿海輿地全図（えんかいよちぜんず）」を作り上げたことで有名な人物です。

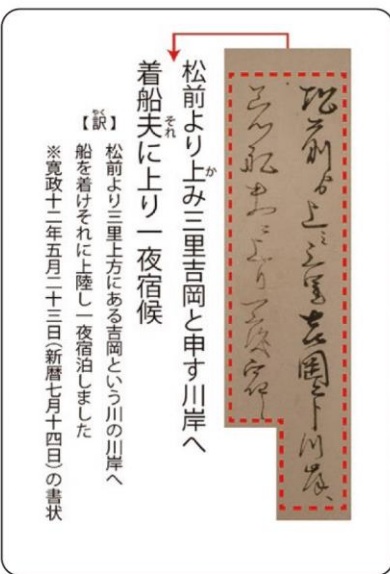
一八〇〇年七月十日（寛政十二年五月十九日）、伊能忠敬測量隊六人に乗せた船が吉岡川に到着しました。当初の行き先は箱館（現在の函館）だったので、風の影響で現在の福島町の吉岡川付近に運ばれたのです。彼らは、その翌日から蝦夷地（現在の北海道）の測量を開始します。日本地図作りの第一歩は、こうして吉岡から踏み出されました。

伊能忠敬らが吉岡に上陸したときの様子は、伊能忠敬が息子に宛てた書状や、日記などの国宝に記されています。

### ① 伊能忠敬の息子宛ての書状

伊能忠敬が長男の景敬（かげたか）に宛てた手紙には、「北海道上陸地は「吉岡と申す川岸」と記されています。当時、吉岡川の入江は深く、小舟は今より上流へのぼることができました。測量隊は、吉岡で一泊しました。

### ① 伊能忠敬が息子（景敬）宛てに書いた書状

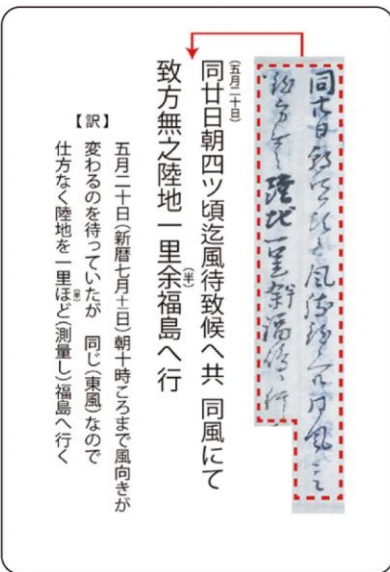


松前より上三三三吉岡と申す川岸へ  
着船夫に上り一夜宿候  
【訳】 松前より三三三上方にある吉岡という川の川岸へ  
船を着けそれの上陸し一夜宿泊しました  
※寛政十二年五月二十三日（新暦七月十四日）の書状

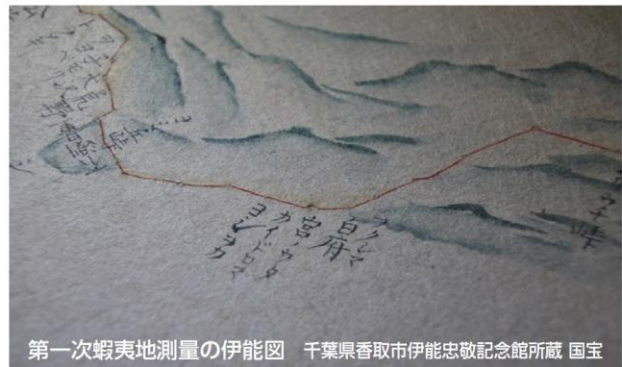
### ② 忠敬先生日記

吉岡に到着した測量隊は箱館まで船で行こうと考え、翌日の朝十時頃まで吉岡に滞在し、風向きが変わるのを待ちました。しかし、なかなか風向きが変わらないので、仕方なく陸路を測量しながら進むことにします。日記には、吉岡から「陸地一里余（いちりあまり）福島」へ行くと記録されています。この記載が、伊能忠敬が北海道で実施した一番はじめの測量の記録といえるでしょう。この時に測量された「一里余」は、現在でいう吉岡川付近から福島町大神宮までの間だと考えられています。

### ② 忠敬先生日記



五月二十日  
同廿日朝四ツ頃迄風待致候へ共 同風にて  
致方無之陸地一里余福島へ行  
【訳】 五月二十日（新暦七月十日）朝十時ごろまで風向きが  
変わるのを待っていたが、同じ（東風）なので  
仕方なく陸地を一里ほど（測量し）福島へ行く



第一次蝦夷地測量の伊能図 千葉県香取市伊能忠敬記念館所蔵 国宝

▲書状（上）と『忠敬先生日記』（下）  
千葉県香取市伊能忠敬記念館所蔵 国宝

[22]



## 福島町の歴史と文化を知る①



▲伊能忠敬像  
(伊能忠敬北海道測量開始記念公園)

### 北海道測量に込められた、天文学者としての目的

ところで、伊能忠敬はなぜ蝦夷地から全国測量をスタートさせたのでしょうか。

伊能忠敬は優れた天文学家でもあります。実は、伊能忠敬の心の中には、「日本地図を作る」とは別に「地球の緯度一度の距離を測り、正確な地球の大きさを知りたい」という天文学者としての大きな目的がありました。緯度一度の距離を三六〇倍すれば地球の大きさが分かります。それをもとに、当時狂いの多かつ

た暦をもっと精度の良いものにしたと考えていたのです。しかし、緯度一度の距離を測るには、一〇〇キロメートル以上離れた地点の緯度の計測が必要でした。

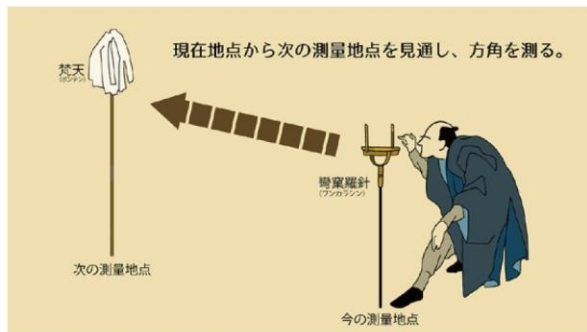
ちょうどその頃、江戸幕府は国防強化のために正確な日本地図を必要としていました。そこで、伊能忠敬の師匠の高橋至時（よしとき）は、江戸幕府に蝦夷地の地図製作を願い出て、測量の許可をもらいます。地図作りをしながら各地の緯度を計測しようと考えたのです。その担当者として、伊能忠敬が推薦され、蝦夷地測量が実現しました。

### 伊能忠敬像を見学しよう

福島町の伊能忠敬像は、横浜市の彫刻家酒井道久（さかいみちひさ）さんによって制作されました。酒井さんは、東京都富岡八幡宮の銅像の作者でもあります。富岡八幡宮の銅像では伊能の晩年の表情を描いたのに対し、福島町の銅像では全国測量を始めたばかりの熱意をもった若々しい姿が表現されています。

伊能像が手に持っているのは、「彎窠羅鍼（わんからしん）」という江戸時代の測量の道具です。杖の先端に方位磁針（羅針盤）が取り付けられています。方位磁針は常に水平を保つように作られており、足場の悪い野外でも簡単に方位を知ることができる便利な道具です。腰をかがめて彎窠羅鍼をのぞき込む伊能像の姿は、一風変わって見えますが、江戸時代の測量の現場を表現しているのです。

また、伊能像の腰に差している刀をよくみると竹光（竹製の刀）であることがわかります。金属の刀等を身に付けていると、方位磁針を狂わせてしまうため、作業中は鉄製品を身に着けないようにしていたといわれています。



▲彎窠羅鍼（わんからしん）を使った測量風景（模式図）

**ふくしま 歴史物語**

この記事は、福島町教育委員会発行『北海道ふくしま歴史物語』のなかの「日本地図の第一歩は吉岡から〜伊能忠敬」の内容を元に作成しています。

[23]

特集

福島町の歴史と文化を知る②

【福島町教育委員会生涯学習係】

# 7月10日伊能忠敬吉岡上陸の日

7月10日(旧暦5月19日)は、伊能忠敬が今の福島町吉岡に上陸した日です。伊能忠敬が、福島町でどのような調査を行ったのかを紹介します。

## 第一次蝦夷地測量 福島町での道のり

寛政12年(一八〇〇年)、伊能忠敬測量隊は第一次蝦夷地測量を開始します。江戸千住宿を出発し、奥州街道を北上三厩(青森県)から津軽海峡をこえ、吉岡に上陸しました。北海道南海岸を計測しながら、根室の先にある西別(別海町)まで進みますが、冬が迫っていたために、そこから折り返して同じ道を測量しながら帰路につきます。帰りは、松前まで測量を行いました。

では、福島町ではどんな測量を行ったのでしょうか。『忠敬先生日記』と千葉県香取市伊能忠敬記念館所蔵の下図から、測量ルートを予測することが出来ます。

まず、『忠敬先生日記』をもとに、福島町内の測量隊の行程(往路)をまとめてみました。

◎ 6月11日(旧暦閏4月19日)  
江戸を出立。三厩では、天気が悪く船を出すことが出来ず、9日間も風待ちをしました。

◎ 7月10日(旧暦5月19日)  
三厩から函館を目指します。しかし、東風が強いために、福島町の吉岡川に上陸しました。この日は、吉岡に一泊しました。

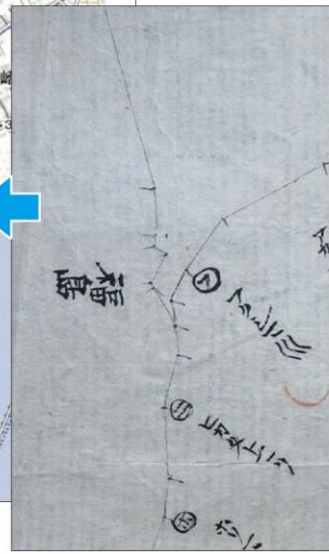
◎ 7月11日(旧暦5月20日)  
風向きが変わらないので、陸路で函館を目指すことにしました。一里余(半)測量し昼12時頃福島へ到着。一泊します。

◎ 7月12日(旧暦5月21日)  
福島から、四十八瀬という小川(福島町千軒)を数百度渡り、木古内へ。木古内で宿泊し夜測量します。…函館へ…

香取市伊能忠敬記念館所蔵下図(国宝)



▲福島町内での伊能の測量ルート概念図(国土地理院地図に加筆して作成)



伊能忠敬は地図を作るための下図を作りました。下図をみると、吉岡から海岸伝いに豊浜・宮歌・白符・日向を測量し、福島大神宮例大祭で山車が通る神社前の坂道を登り、横綱記念館の辺り(旧役場前通り)で左手に降りる道を測量していることがわかります。そして、横綱街道商店通りを役場方面に道なりに測量し、旧吉田

橋あたりで福島川を渡り、福島交番の付近から福島川に沿って福島峠方面へ進み、兵舞林道へ入ります。四十八瀬の小川を何度も渡ったあとは、私達が殿様街道と呼んでいる峠をこえて知内へと続きます。皆さんも、7月10日は伊能忠敬の歩いた歴史の道を辿ってみると楽しいかもしれません。



## 福島町の歴史と文化を知る②

### 精度の高い地図の作り方

伊能忠敬はいくつかの測量法を組み合わせて、地図の精度を維持していました。ここでは、伊能忠敬の測量技術について紹介します。

#### 海岸線を歩測する

主に使うのは「彎窠羅鍼（わんからしん）」と呼ばれる道具です。杖の上部に方位磁石が取り付けられています。これを、現在地に設置します。次の目標地点には「梵天（ぼんてん）」という竹の棒を設置し、目印にします。そして、現在地から梵天までの距離と方位を記録します。これを何度も繰り返し前進しながら測量します。また、第一次測量では、「歩測」を採用していました。一步を69センチと決めて、地道に計測していったのです。

しかし、この方法だけを繰り返して広大な範囲を計測しようとすると、わずかな誤差が少しずつ積み重なり、最終的に正確な地図になりません。そこで、伊能忠敬測量隊は、

共通の目印となる山頂や岬の方位を計測することで、測量のズレをこまめに修正する工夫をしていました。

#### 『山島方位記』にみる福島

『山島方位記』とは、日本の目印となる山や島の名前と方位の記録です。福島町の宮歌や福島丸山も記録されていました。なかでも、福島丸山は、龍飛・小泊・深浦など青森県の九か所から測量されていた。この山は、北海道と青森の位置関係を正しく地図に印すために、重要な役割を果たしていたようです。

### 伊能測量と星の観測

恒星の角度を計測することで、現在地の緯度を確かめることが出来ます。緯度一度の距離を計測する目的があった伊能忠敬にとって、夜の天体観測で測量地の緯度を割り出すことは極めて重要でした。『測地度説』という記録をみると、福島町でも十個の恒星を観測していることがわかります。星座名でいうと「はくちよう座」、「こうま座」、「みずがめ座」等の星です。また、星の観測は福島大神宮の境内で実施をしたと考えています。このように、昼と夜の二つの測量を同時に進めることが、日本で初めて行われた忠敬独自の測量法だったのです。



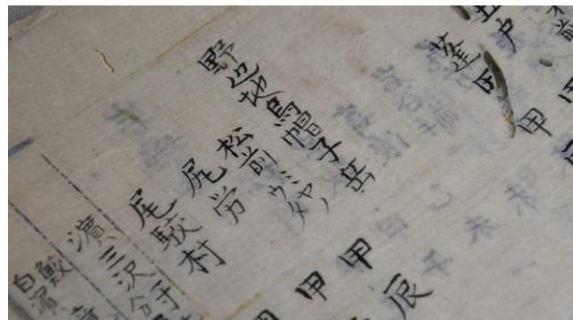
▲福島での天体観測（夜の測量）の様子

### ふくしま 歴史物語



この記事は、福島町教育委員会刊行の「北海道ふくしま歴史物語」の内容を元に作成しています。

#### 「北海道ふくしま 歴史物語」



▲ミヤノウタ(福島町)より野辺地烏帽子岳(青森県)を望む『山島方位記 一巻』千葉県香取市伊能忠敬記念館所蔵(国宝)

【橋本惣司氏講演会】

地域住民が支えた伊能忠敬の測量  
『大日本沿海輿地全図』は

こうしてできた！

岡山県瀬戸内市 水田清志

令和5年8月5日瀬戸内市民図書館で、岡山県津山市在住の郷土史家橋本惣司さんが講演を行った。

この講演会は同市の図書館友の会の主催だった。参加者は30名で、ほとんどの人が15分前には入室を終えて、橋本さんの話に聞き入った。

橋本さんの義母が住んでいた高梁市鉄砲町の古民家にあった襖の下張

りから橋本さんが古文書を発見した。

それは「測量人足仕出し帳」の一部で15枚あった。その中に書かれている測量人足数と先払い・ご案内・梵天持ち・綱引き・数取り書き役・絵図書き取り読上げなどの役割と測量ルートから離れている村の庄屋たちの動きも書かれており、受け入れ側の様子と費用なども書かれた貴重な資料であることが分かった。

伊能忠敬測量日記を見ると、文化8年（1811）閏2月、九州測量の帰路、忠敬本隊は東城から芸備線沿いに哲西町から新見市へ、坂部支隊は川上郡經由成羽・松山（高梁）から北房・小坂部を測り新見へ。合

令和5年度瀬戸内市協働提案事業 テーマ「デジタルアーカイブを核とした地域資源の情報発信」  
～市内歴史関連の史跡を中心としたデジタルアーカイブの蓄積と情報活用～

**講演会**

地域住民が支えた伊能忠敬の測量  
～『大日本沿海輿地全図』はこうしてできた！～

日本地図をつくるという偉業を成し遂げた伊能忠敬。その測量を支えたのは日本各地の多くの人たちだった？！当時の作業内容や費用を記録した文書がふすまの下張りから発見されました。それを見つけた津山市の橋本惣司さんから興味深いお話を伺います。

◆日時: 令和5年8月5日(土)  
13:30～15:00

◆場所: 瀬戸内市民図書館 つどいのへや

◆講師: 橋本惣司さん(郷土史研究者)

◆定員: 40名(申し込み不要/当日先着順)

参加無料

講師プロフィール  
津山市在住、郷土史研究者。長年にわたり、文化財保護活動に取り組む。2019年、新見市の親族宅で保管されていたふすまの下張りとして使われていた古文書を発見した。

主催: 瀬戸内市民図書館友の会 せとうち・もみわフレンズ 共催: 瀬戸内市民図書館

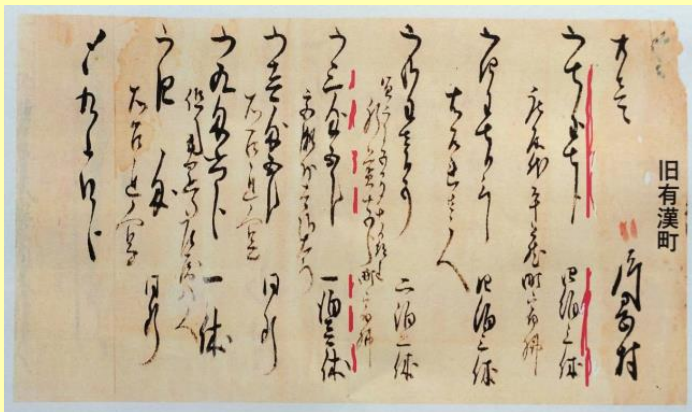
講演会案内



講演会のようす

同隊は高梁川沿いに高梁市から総社市までの道を測量した時の記録であることが分かった。

- 1 15枚の古文書から分かったことは、表紙のある仕出し帳は5枚、費用などを書いた7枚は綴りの穴が違うので別帳である。
- 2 備中国川上郡、阿哲郡、阿賀郡28か村から840人以上が駆り出されているので、全部残つていれば千人以上になるであろう。
- 3 7枚の別帳面には、43か村(高梁市14、新見市9、哲西町8、哲多町6、賀陽町5、備後国1)の



講演会の資料

大庄屋、村庄屋の名前と動静と内海、柳井、神戸氏など藩の役人が書かれていて測量隊への気遣いが感じられる。

4 費用面では、別帳面の最後に「1貫329匁7分8厘」とあり、1匁1、250匁として166万円余りになる。

以上、講演会の資料から抜粋したが、正式には橋本さんからの報告を待ちたい。



九州支部ニュース

令和五年度九州支部総会報告

九州支部長 井上辰男

恒例の九州支部総会を6月17日(土)午後1時より開催したが、四年ぶりの開催ということで欠席が多く、理由としては予定重複、高齢による体調不良であった。会員18名中6名、



令和5年度伊能忠敬研究会九州支部総会  
R5. 6. 17 (株)カクマル福岡本社会議室にて

ゲスト参加4名(内入会予定1名、会員同伴1名含む)計10名が出席し、本年度の会場を福岡市の曾根田馨会員の好意により同氏経営の(株)カクマル本社会議室にて開催した。冒頭支部長挨拶を行い、令和5年度より支部体制を支部長(事務局長、会計兼任)井上辰男、特別幹事石川清一、幹事曾根田馨、監事遠藤藤とすることを願った。ゲストの日本測量協会九州支部後藤勝広

センター長の紹介、並びにゲスト参加者、会員同伴者の紹介の後、過去三年間の九州支部会員の動向並びに会計報告を行い、去る5月27日東京に於いて開催された2023年度定期総会の概要を曾根田馨会員が報告した。役員改選については菱山剛秀理事、河崎倫代理事、新沢義博理事、高安克己理事が退任された。後任には堀野正勝氏が代表理事に、柏木隆雄氏が副代表理事、狼芳明氏が事務局長に、それぞれ就任された旨報告した。(この他詳細は会報第100号に記載) その後、出席者全員による近況報告をしていただき、早速講演(1)

会九州支部後藤勝広センター長の紹介、並びにゲスト参加者、会員同伴者の紹介の後、過去三年間の九州支部会員の動向並びに会計報告を行い、去る5月27日東京に於いて開催された2023年度定期総会の概要を曾根田馨会員が報告した。役員改選については菱山剛秀理事、河崎倫代理事、新沢義博理事、高安克己理事が退任された。後任には堀野正勝氏が代表理事に、柏木隆雄氏が副代表理事、狼芳明氏が事務局長に、それぞれ就任された旨報告した。(この他詳細は会報第100号に記載) その後、出席者全員による近況報告をしていただき、早速講演(1)



平田稔会員の講演

報告した。この他詳細は会報第100号に記載) その後、出席者全員による近況報告をしていただき、早速講演(1)に入り、平田稔会員による「離島の御用測量と村民の姿」は、会報第97号に記載された「門谷清次郎の『薩隅見聞之覚書』を読む」の種子島測量時の部分で、当時の村民の姿を原文、翻刻文と映像を使い報告され、大変興味深く拝聴しました。

講演(2)は、中野直毅会員による「伊能図の二つのずれの問題について考える」は、伊能大図の下図を活用した透過地図で現地調査を行い検討され、伊能忠敬測量経路の復元報告で、実証的で詳細な報告でした。恒例の懇親会を近くの居酒屋で開



会場のカクマル本社にはサーベイミュージアムがあり、象限儀や海外の測量機器等が展示されている。



中野直毅会員の講演

き一同大いに懇親を深め充実した一日になったと思います。



会員だより

山武のスケッチ (三)

山武杉とイワシ漁船

千葉県山武市 江口俊子・画



「坂田城址」、「九十九里浜のイワシ漁」と続いた伊能忠敬ゆかりの地「山

武のスケッチ」。今号は「山武杉」である。(文章は河崎が担当した。)

北陸に住む私は太平洋岸の風土になじみが薄いのだが、江口さんから最初にこの二枚の画を見せられた時のハツとした気持ちを大切に、綴ってみることにした。

左上の画は江口さんの自宅二階から見える「山武杉」という。4本のすつくと伸びた杉の木が四曲一雙の屏風のように集落の背後に控えている。江口さんの話では、樹齢200〜300年になるという。

前に広がる一面の雪野原と常緑の杉林の対比が清々しい。それにしても、なぜこの4本は四つ子の兄弟のように「そっくり」に立っているのだろうか。なぜか魅かれる光景だ。

右下の「下枝切り」の画は実は「檜(ひのき)」だそうだが、「山武杉」も同じように下枝切りが行われるらしい。かなりの高所かと思われるが、いとも簡単に大枝を落とすように高い木に登って枝木を伐採する職業のことを「空師(そらし)」



と呼んでいる。日本で昔から技術が引き継がれてきた伝統的な職業のひとつだが、今はあまり多く存在していないという。

杉は日本にだけ自生する固有の常緑針葉樹で、日本の人工林約1000万haの45%を杉が占め、建築材、土木用材、船舶材、車両材、生活用材、楽器材等、極めて多岐にわたり使われている。日本最古の舟は鳥浜貝塚(福井県三方上中郡若狭町)などの縄文遺跡から出土した丸木舟であるが、これも多くは杉の大木をくり貫いて造られていた。

「山武杉」は千葉県東部の山武地域で生まれた優良な性質を多く持つ

挿し木スギである。発根性が良く成長が早い。花粉をほとんどつけないので、花粉症対策品種であるという。

山武杉の歴史は17世紀に遡り、九十九里浜でのイワシ漁に使用する船の船材として植林されたのが始まりとされている。枝ばりが小さく丈が高い美林で、木目は赤味を帯びている。杉の中でも材質が固く、また、油分が多いことから船の材料に適していた。九十九里浜では船材や漁師納屋の材料として、江戸へは建築材や建具として供給されてきた。

下総(しもうさ)国から上総(かずさ)国にまたがる九十九里浜が全国有数のイワシ漁獲地となったのは、





昇亭北寿画「上総九十九里地引網大漁獵正写之圖」（大英博物館所蔵）に描かれた「イワシ漁船、

近世後期にイワシの加工品である干鰯（ほしか）・粕（しめかす）が、

木綿・藍・ミカンなどの商品作物の金肥として需要が高まったからである。

紀州（和歌山県）漁民によって伝えられた地引き網漁は17世紀に普及したが、漁の大半は「旅網」とよばれる紀州漁民の季節的な出稼ぎで行われていた。しかし、元禄16年11月23日

（1703年12月31日）の大津波により、旅網は打撃をうけて衰退した。かわって九十九里浜の有力漁民が大地的な地引き網の経営を担っていった。粟生村の網主飯高家が有名である。飯高惣兵衛と交流のあった伊能忠敬の小関家も網主であった。

この地引き網漁が大量の木造船を必要とし、船材として「山武杉」が注目されるようになった。前述のように、挿し木で増やすことができたことから、急速に「山武杉」の林が広がったのである。（河崎倫代・文）

【参考文献】

- ・九十九里町ホームページ
- ・千葉県ホームページ
- ・『九十九里町誌』1975〜92年
- ・高桑進「杉と日本人のつながりについて」(京都女子大学宗教・文化研究所『研究紀要』25) 2012年
- ・『千葉県の歴史散歩』山川出版社2006年

新入会員の自己紹介

神奈川県 松川 昌義



この度、柏木隆雄様のご紹介で研究会に入会することになりました。

出身は佐原の小野川沿いで、実家の石材店は伊能家旧宅から歩いて5分のところにあります。小学生の時は、旧宅の前が通学路でした。中学生の時は、友人の父親が旧宅の管理をしていたので、今では考えられませんが、旧宅の座敷でトランプ遊びをしたりしていました。

高校卒業後は大学・仕事と東京で過ごし、現在は現役を引退し日本生産性本部のシニアフェローをしています。

福岡県 中野 正治

専門は建築設計。測量協力者の子孫です。地理・歴史が好きで、地図の中を歩いています。

その他の新入会員

滋賀県 木村善則さん

## 『伊能忠敬研究』投稿要領

### ①原稿の長さ

論文・報告、紹介、などは、本文・写真・図などを含めて一件につき刷り上がり八頁まで、各地のニュース・お知らせなどは刷り上がり一頁以内を原則とします。

\*刷り上がり一頁に入る文字数は約2000字(704字×三段または480字×四段)です。長い原稿の場合は連載として分割していただくこともありあります。

### ②原稿のかたち

・本文(テキスト) 原則として、マイクロソフト社のワードなど一般的なワープロソフトで作成された電子ファイルとします。

・写真 一般的なJPEG形式またはTIFFまたはフォトショップのPSD形式でフォーマットされた電子ファイルとし、印刷サイズで350dpi程度解像度のよい鮮明なものを用意してください。

\*印刷サイズが100mm×75mmと350dpiのカラー写真の場合、1MB前後のファイルになります。通常のデジタルカメラやスマートフォンによって5Mモード以上で撮影された画像ファイルで問題ありません。

デジタルカメラのデータ仕様がわからない場合は、L判(127mm×89mm)程度にプリントアウトした鮮明な写真でも結構です。

・図 写真に準じます。原図をコピーする場合は、なるべくスキヤナで撮った電子ファイル(JPEG形式またはTIFF形式)にしてください。

### ③原稿の送り方

左記まで電子メール添付か、CDなどのメディアにコピーしたものを郵送してください。その際、挿入する写真・図がある場合はその位置、およびそのサイズを本文中に編集者がわかる形で記入しておくか、概略を記入した割付用紙を添付してください。また、題名、著者連絡先、原稿区分、刷り見込みページ数などを記入したメモ、または原稿整理カードも同時に送付してください。(詳しくはホームページ <http://www.inoh-ken.org/> を参照)

### 送り先

・電子メール添付の場合 [kahno@inoh-ken.org](mailto:kahno@inoh-ken.org)

・郵送の場合 〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6 日本地図センター2階

伊能忠敬研究会「伊能忠敬研究」編集部

### ④注意事項

・編集途中での大幅な追加修正はお受けできません。完成原稿として投稿してください。

・図や写真の引用について、必要な場合は投稿する前に執筆者が責任を持って会誌及びホームページ掲載の許可を取っておいってください。

・引用した文献等については本文末尾にリストや注記等で出典を明らかにしてください。

・原稿内容を編集委員会で検討し、不明な点や内容的に不備な点があった場合には執筆者に連絡し、修正または掲載を見送る場合があります。

・受理した原稿は原則として執筆者にお返しいたしませんので、必ずコピーをとっておいってください。本誌に掲載された記事の著作権は、伊能忠敬研究会に帰属することとします。他誌等へ転載する場合は、事務局に連絡して許可をとってください。

## 伊能忠敬研究会入会の御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方にはどなたでも入会できます。

二、つぎのような活動を行っております。

①会報の発行 研究成果・会員活動情報など 原則として年三回発行

②例会・見学会の開催

③忠敬関連イベントの主催または共催

④その他付帯する事業

三、入会方法等

入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄に専門、趣味、入会の動機、御意見などを書き添えて、年会費五千円を左記にお送り下さい。

会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度の会報のバックナンバーをお送りします。

四、伊能忠敬研究会事務局所在地

〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6 日本地図センター2F

電話・FAX 03-3466-9752

(留守の場合は録音テープに吹込んでください。)

事務局メール [mail@inoh-ken.org](mailto:mail@inoh-ken.org)

郵便振替口座 〇〇一五〇六〇七二八六一〇

ホームページ <http://www.inoh-ken.org/>

## 編集後記

◇何とか101号を発行することが出来た、やれやれ。これが偽らざる感想である。◇この夏の猛暑の日々も、果たして原稿が集まるのだろうか、ヒヤヒヤしながら過ごすことになった。◇投稿して頂いた方々には感謝するばかりである。◇ワードで完成原稿まで編集し、PDFにしてZipで圧縮したものを印刷業者にWeb入稿する。◇この作業にデスクトップ・パブリッシングなるものとは無縁な編集担当者が取り組んだ。◇阿鼻叫喚とまではいかないものの、試行錯誤、右往左往しながら編集することになった。

◇前任者からは「さらなる進化を期待したい」とのエールを受けて引き継いだものの、会報を途切れさせないことで精一杯であった。◇今号では全国各地での、会員諸氏の様々な活動の様子を知ることが出来た。◇本研究会の特質は地域的にも職業的にも、また伊能忠敬のどこに興味関心があるのかという点においても、多様な多彩な会員の集まりであることである。◇様々な視点からの投稿をお待ちしています。(丁生)

次号(第102号)は2024年2月発行、原稿締切は12月31日です。  
皆様の投稿をお待ちしております。